



第48回全国高等学校総合文化祭

清流の国ぎふ総文2024

集え青き春 漕ぎ出せ知の筏 水面煌めく清流の国へ



郷土研究部門

発表大会

令和6年 8月1日(木) / 関ヶ原町

ご挨拶

第48回全国高等学校総合文化祭郷土研究部門代表委員長
(岐阜県高等学校文化連盟地域研究部会長)

中村 豊

1

郷土研究部門 発表一覧

【歴史・考古部門】

1	岡山県立倉敷古城池高等学校	郷土の史跡を未来に紡ぐ	2
2	岐阜県立岐山高等学校	長良川の移り変わりと岐阜	6
3	旭川龍谷高校	上川アイヌの研究 その57 「アイヌのイナウ(御幣)とヌササン(祭壇)」	10
4	青森県立青森南高等学校	縄文時代を知り考える現代の国際問題	14
5	岐阜県立加納高等学校	石造物に思いを刻んだ名古屋の米商人	18
6	福島県立相馬高等学校	古墳時代の相馬におけるヤマト政権との関わりについて	22
7	鳥取県立青谷高等学校	青谷上寺地遺跡水田復元の試み	26
8	栃木県立石橋高等学校	日光道中と一里塚	30
9	土浦日本大学高等学校	茨城と満蒙開拓	34
10	千葉県立木更津高等学校	満洲国鉄嶺市の生活史	38
11	日大三島高等学校	野戦重砲兵連隊と三島	42
12	サレジオ学院高等学校	伊豆山権現の繁栄と衰退	46
13	昌平高等学校	下総国葛飾郡深輪村のれきし	50
14	石川県立七尾高等学校	明治の館「室木家」が所蔵する「博愛」扁額の調査	54
15	岐阜県立関高等学校	東美濃戦国史の研究	58

【地理・産業部門】

1	鳥取城北高等学校	豊かで安全な社会づくりのために	62
2	三重県立松阪高等学校	宮川と共に生きる	66
3	栃木県立矢板東高等学校	矢板宿の今昔	70
4	岐阜県立岐阜農林高等学校	亜熱帯果樹アボカドの栽培について	74
5	鎌倉学園高等学校	建長寺と幻の処刑場地獄谷	78
6	鶯谷高等学校	消えた徳山村と観光資源	82
7	石川県立金沢泉丘高等学校	北陸新幹線の敦賀延伸と在来線や地方の在り方	86
8	成田高等学校	真・解釈長沼事件	90
9	岐阜県立関高等学校	ほらどのめぐみ 関市洞戸の未来を守りたい	94

【公共・政策部門】

1	岐阜県立関・加茂高等学校	楽しく学ぶをモットーに! 模擬国連×模擬市議会	96
2	鳥取敬愛高等学校	新しい故郷と、原故郷のはざままで	98
3	石川県立金沢桜丘高等学校	復元の今	102
4	法政大学第二高等学校	都市と遺跡	106
5	静岡県立浜名高等学校	静岡県における更生保護事業のはじまり	110
6	青森県立三戸高等学校	三戸高校クリエイティティ部とは	114
7	山陽学園高等学校	未来のために私たちができること	118

ご挨拶

第48回全国高等学校総合文化祭郷土研究部門代表委員長
(岐阜県高等学校文化連盟地域研究部会長)

中村 豊

「集え青き春 漕ぎ出せ知の筏 水面煌めく 清流の国へ」を大会テーマに「清流の国ぎふ総文2024」が、ここ岐阜県で開催されます。協賛部門として開催される「郷土研究部門」は、「天下分け目の戦い」で知られる、関ヶ原町で行われることとなりました。

安土桃山時代の慶長5年、ここ関ヶ原で歴史に名高い合戦が繰り広げられました。400年以上の時を超え、関ヶ原町文化センターを中心に「地域研究部会」が行われることは大変記念すべきことであります。3日間にわたって研究発表大会や巡検研修を実施し、研究発表大会は「歴史・考古」、「地理・産業」、「公共政策」、「ポスターセッション」の4分野で開催します。1日目は関ヶ原古戦場の巡検と岐阜関ヶ原古戦場記念館館長である小和田哲男先生の記念講演会、2日目は各県の代表校による研究発表大会、3日目は郡上や多治見、海津方面の3地区に分かれて巡検研修を企画しています。斬新な視点と郷土愛に満ちた研究発表にどうぞご期待ください。

その他、JR関ヶ原駅では東軍と西軍の主な武将の氏名が書かれた、「古戦場の町関ヶ原」と題する看板が掲げられており、皆さんをお迎えいたします。町中には徳川家・石田家などの家紋入りの旗や石碑などが溢れ、町全体が関ヶ原合戦を彷彿するようです。また、岐阜関ヶ原古戦場記念館や関ヶ原町歴史民俗学習館など、多くの歴史的な施設とともに、徳川家康が最初に陣を敷いた桃配山、西軍の指揮を執った石田三成が陣を敷いた笹尾山、小早川秀秋が陣を敷いた松尾山と、三方から見渡す景色の雄大さ、それら全てを味わっていただくと確信しております。

結びに、本大会の開催にあたり、さまざまなご配慮をいただいた関ヶ原町の関係者の方々、各教育委員会、諸施設の皆様のご協力とご支援に感謝申し上げますとともに、日々熱心に指導されている各校の先生方に敬意を表し、「郷土研究部門」開催にあたっての挨拶といたします。

郷土の史跡を未来に紡ぐ

岡山県立倉敷古城池高等学校
地域交流部 ワッショイ！とーかーず
3年 則井優希 三輪悠喜
2年 妹尾光希 名越公祐

1. はじめに

倉敷古城池高等学校は、水島コンビナートを抱える岡山県倉敷市水島地区にある唯一の普通科高校です。水島地区は古くから瀬戸内海を通る交易路として栄え、中世には源平合戦や大規模な干拓が行われ、近代には航空機製造工場が設置されるなど古くより歴史をつないできました。こうした歴史を本校では様々な取り組みを通じて校内だけでなく、多くの人に広めてきました。今回はこうした取り組みのうち、水島・藤戸合戦、亀島山地下工場についての取り組みを紹介していきたいと思います。

2. 水島・藤戸合戦

(1) 水島合戦・藤戸合戦とは

水島合戦は砺波山の戦いと宇治川の戦いの間である1183年11月17日に、源氏の本曾義仲が四国の平氏の拠点である屋島を攻めようとしたことにより起こりました。この戦いは源平合戦の中でも珍しい、平氏が源氏に完勝した戦いでもあります。平氏の勝因の一つに、戦闘中の金環日食が挙げられます。実は貴族的趣味から天文学に通じていた平氏は金環日食が起こることを知っており、異変をきたした太陽を見て動揺する源氏を相手に太陽を背にして戦いました。この話は源平盛衰記にも記載されており、天文学的にも実際にあったことがわかっています。また、平氏は戦法にも工夫を凝らし、船同士を板で繋げ、揺れを軽減し、一般兵は軽装備にすることで、海上で動きやすくしたことが挙げられます。この戦いで勝利を掴んだ平氏は一時的ではあるものの源氏を押し返し、この動きが後の一の谷の戦いなどに繋がることとなります。

一方、藤戸合戦では源氏が西へ落ち延びていく平氏を追撃するなか、伸びきった兵站路が藤戸で平氏によって遮断され戦線が膠着してしまい、その奪還のために一の谷の戦いと屋島戦いの間である1184年12月7日に起きました。この戦いは、源氏の武将である佐々木盛綱により大きく変動したことで有名です。彼はこれまでの戦いで弟たちが多くの手柄を上げていたことに対抗心を燃やしており、何としてもこの戦いにおいて手柄を立てることを渴望していました。しかし、そんな盛綱の思いとは裏腹に源氏と平氏は海を挟んで長くにらみ合いを続けており、そんな状況に業を煮やした盛綱は自身が海を渡り、先陣を切ろうと画策し、馬でも海峡を渡る浅瀬を地元の漁師に教えてもらいます。その際に盛綱は情報漏洩を恐れて、その漁師を斬り殺してしまったのです。その後、漁師から情報を得た盛綱は、翌日部下数名を連れて先陣を切り、平氏を圧倒したことにより源氏はこの戦いでの勝利を掴み取ることとなります。また、盛綱もこの戦功を源頼朝から称賛され褒美の一つとして藤戸を与えられるという栄誉を受けることとなります。しかし、殺された漁師の母は息子の理不尽な死に怒り、戦いの後に藤戸の地に移った盛綱にその恨みを訴えることとなりました。この話は能の演目「藤戸」などを代表として多くの文学、演劇作品に影響を与えることとなります。

この戦いに関する史跡は数多く残されており、戦いの後には盛綱が先陣を切った場所近くの山に先陣寺というお寺が建てられ、近隣の藤戸寺では合戦の戦死者を弔った大法要が行われた際の石塔が残されていたり、経山という場所には盛綱が漁師の供養の為に立てたと伝わる経塚が残されていたりと今でも約900年前の当時の面影を垣間見ることができます。

(2) 本校の取組

郷土史という魅力的な地元資源を新たな観光資源とするため、2019年に藤戸合戦の史跡をめぐるウォーキングMAPを作成しました。それを踏まえ、2020年には水島・藤戸合戦の史跡を巡るツアー案を作成し、水島合戦に関してはこの戦いの目玉とも言える日食を現代の技術によって再現しようと地元科学センターとも交渉し、プラネタリウムを用いて当時の合戦を考察・紹介し、本校生徒がガイドとなり、船舶を利用し当時の面影を見せる小島でのトライアルツアーを行いました。2022年には地元和菓子店や通船業者などとも協力しツアープランを作成し、2023年に本校が独自に実施して数年ぶりに復活した「水島コンビナートクルーズ&バスツアー」と藤戸・水島合戦ツアーと合併して実施しました。藤戸合戦において、現存する史跡の多さを目玉として多くの人に史跡を知ってもらおう内容となり、好評を得ました。

2 亀島山地下工場

(1) 亀島山地下工場とは

亀島山地下工場とは、太平洋戦争中に空襲から三菱重工業第七製作所（以後、水島航空機製作所と記す）を守るために、工場機能を一部移した地下工場である。この水島航空機製作所は現在の水島コンビナートに建築され、当時全国に6つあった三菱重工業の航空機製造拠点の一つであり、最大規模は3,348,000平方フィート（1945年2月当時）、そのうちの3分の2は製造エリアでありました。

水島航空機製作所の設立は、日中戦争が進展するにつれ、航空戦が戦局を左右するようになったため、海軍が1940年11月4日に「第二生産能力確保計画」を作成し三菱重工業に対して「昭和十八年三月末日迄ニ達成スベキ能力 小型（A型級）月産六二機、中型機（G4級）月産七十五機」を要請したことから始まりました。三菱重工業は名古屋航空機製作所とほぼ同一規模の生産専門工場を他に新設することにし、工場と飛行場、青年学校学習工場、工員社宅、合宿所などを含む厚生設備の用地、約130万坪の適地を必要としました。その際、農業県から将来の重工業による地域開発・発展を目指した岡山県は誘致活動を行い、最終的に当時の岡山県浅口郡連島町高梁川川尻（現岡山県倉敷市水島地区）を埋め立てて建設することに決定しました。そして、水島航空機製作所は海軍の全面的な資金提供の元に1943年より建設を開始し、1944年1月に操業されました。建設にあたり、この工場で働く従業員を通勤させるための関連インフラや住居を作る必要がありました。そのため当時、発展していなかったこの地域一帯を都市化させるため大規模の都市計画が始まりました。まずは、軍需工場の建設・操業に伴い街路網を確保するために総路線50線、総延長距離108kmに及ぶ街路が計画され、それと共に工場専用の鉄道も計画、建設されました。これらのインフラは戦後さらに充実され、現在水島の街とコンビナートを支える必須のインフラになっています。そして、街路網がつくられると共に東高梁川を埋め立てた約700万坪（約23平方km）もの広大な土地に水島航空機製作所従業員数約2万5000人、下請け工場約5000人合わせて約3万人分、さらに従業員数の2倍～4倍の約10～12万人が生活する街作りが行われました。このときに区画整理された街には、弥生町、栄町、常磐町などの名古屋の地名が使われて

います。これは、当時名古屋の三菱重工業で働く人が水島地区に移り住んだことにより慣れ親しんだ名古屋の地名を新たに自分たちの住むことになった地域に付けることにしたからです。このときに作られた水島の街は現在でもその名残を残しており、上記の地名だけでなく、空襲に備えて用意された土地は公園として利用されています。このように厚生設備も備えられた水島航空機製作所で製作された軍用機は一式陸攻 513 機、紫電改 9 機製作されました。この水島航空機製作所は、戦後に現在の三菱自動車が使用し、埋め立てされた土地がその他企業に使用されたことに現在の岡山の製品出荷額の 45% を占める水島コンビナートになりました。しかし、この水島航空機製作所はアメリカ軍による度重なる空襲、特に 5 度目にあたる 1945 年 6 月 22 日には B-29 より合計 603 トンの爆弾を落とされた結果、屋根のある領域の 45% の 140 万フィート (0.1 平方 km)、全敷地の 12% が破壊され、攻撃前に残っていた工作機械の 231 台の内、70 台が破損、85 台が破壊されてしまいました。当日は金曜日でありましたが節電休業日 (日曜日と振替) のため、労働者が少なく、人的被害は少なかったが設備被害は大きく、この空襲によって航空機製作所の生産能力は大きく低下しました。

こうした空襲が起こる前から空襲の被害を少なくするため、工場を分散・疎開させるために疎開工場が作られていました。その一つが亀島山地下工場です。亀島山は、現在の水島コンビナートの入口に位置し、高さ 78m と小高い山でその形が亀のように見えることからそう呼ばれていました。その亀島山に、1945 年 3 月に地下工場の建設が開始されました。東西方向 5 本と南北方向 28 本のトンネルから構成され、トンネルの総延長は約 1701m、総面積は約 6053 平方 m、中でも 1 号トンネルと呼ばれる東西 5 本の内の一番南のトンネルは幅が約 7m、高さ約 7m、長さ約 162m とかなりの大きさになっています。またこの地下工場は下の図 I のように南北のトンネルが繋がっています。このように作られたのは、トンネルを掘進める際にダイナマイトを使うため、その爆風を防ぐためといわれています。そのため、手前で作業をしていた人たちは、奥で何の作業をしていたかはわからなかったといった話があります。そしてこの地下工場は戦後放置されたことにより当時の様相を色濃く残しています。まず、南北トンネルの 1 号トンネルから 2 号トンネル間にある東西トンネルの 11 号トンネルから 18 号トンネルには、戦時中に実際に工作機械が運び込まれて疎開工場として稼働していた部分があります。そのため、12 号トンネルと 13 号トンネルには機械工場の一部が疎開していたとされる跡が残っており、12 号トンネルには

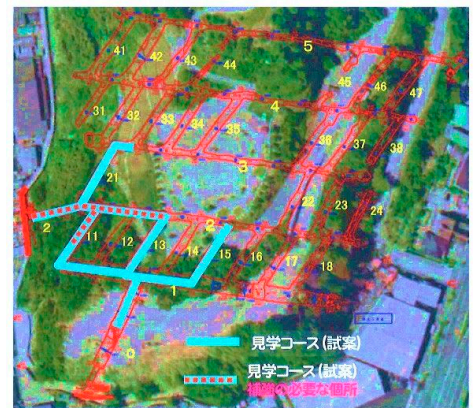


図 I 亀島山地下工場全体図
(提供「亀島山地下工場を語りつぐ会」)

1 m 間隔で東壁沿いに 6 機西壁沿いに 2 機の方形の工作機械の据付痕と 13 号トンネルには 13 機の据付痕があり、そのうち 4 機のみ木製の基礎が残っています。また 13 号トンネルには、東西それぞれ 22 機の穴が床から高さ 2m の所で穿たれており、これはトンネルの天井と側壁上半を覆うための支柱の痕跡と考えられ、このことから工員と工作機械を小さな落石から守るとともに機械の動力や照明のための配電施設が設けられていたと考えられています。この地下工場で働いていた体験者から「作業の合間にトンネルの板壁と岩盤の間に入って休むこともあった」といった話もあります。南北トンネルの 2 号から 3 号トンネルの間の 17 号トンネルには集水桝があり、22



号トンネルにはトロッコを使うためのトロッコ軌道の枕木痕、33号トンネルから35号トンネルには測量杭のものと思われる穴が残されています。また穴を掘る際に使用するダイナマイトを入れる穴のロッド穴も複数確認されており、穴の方向から東西からトンネルを掘り進んでいったことが確認されています。南北4号トンネルと5号トンネルも3号トンネルと同様に東西から掘進められたため、中央部付近が狭くなっています。また天井部にはランプなどを吊り下げる金具であろう金属片が残されており、5号トンネルの北壁などに折れたロッドや刺されたままのロッドが見られることから工事途中で終戦を迎えたのだと思われます。こうして未完成のまま終戦を迎えた亀島山地下工場の工事には、勤労働員学徒や女子挺身隊員などの学生や朝鮮労働者たちが働かされていました。また、落盤や雑な配線による感電の危険性、昼夜交代の厳しい勤務体制による疲労、学生などの未熟練者が機械を使っていたため危険性が増大し、大怪我した労働者も多かったと当時の労働者の証言があります。これは、戦争末期であり、安全が極度に軽視されていたことが分かります。亀島山地下工場はこのような当時の戦争の様子をそのまま残し、中に入ると戦時期に戻ったような緊迫感に包まれ、戦争をイメージし平和の大切さを実感できる戦争史跡です。

(2) 本校の取組

亀島山地下工場は、見学者の安全と地権者の関係により、誰しもが自由に見学する事ができていません。本校では、亀島山地下工場という貴重な戦争史跡を数多くの人に知ってもらうために活動を行ってきました。2020年に学校で独自まとめた水島地区を紹介した冊子のなかに亀島山地下工場の特集ページを設け、現在は公園となり地域住民の憩いの場となっている亀島山に地下工場があること、密にならず訪れず場所としてアピールしました。翌年には当時の体験者にインタビューをし、貴重な内容を聞き書きし冊子としてまとめました。このときにいただいた体験談は、上記クルーズツアーの一部として亀島山を訪れた際に紹介しています。2023年には、本校が独自に実施して数年ぶりに復活した「水島コンビナートクルーズ&バスツアー」の案内コースに亀島山を含めてもらいました。これらは上記した藤戸合戦・水島合戦のツアーと同じものです。今年は、本校生徒が中心となり「高校生ガイドから学ぶ亀島山見学ツアー」を実施します。これは地域の公民館と連携し、小学校高学年とその保護者の方々を対象とし、この亀島山について知識を得ながら戦争と平和について考えてもらうという企画です。こうした企画を通じて、保護者など大人だけでなく自分たちよりも年下の世代にも亀島山を知ってもらい、平和の大切さを実感してもらいたいと考えています。

3 終わりに

本校では、代々地元水島の史跡を活用し多くの人にその魅力と意義を広めてきました、私達はこの活動を後輩たちに繋ぎながら、歴史から学ぶことを地域のために生かしていきたいと考えています。今も試行錯誤しながらしっかりと計画・実践」を行い、私達の努力と活動を通じて、次の世代に過去の遺産を紡いでいきたいと考えています。

長良川の移り変わりとは岐阜

原 遥陽 岡田真輝
内山和香 小西智之 高橋和希
平光祐斗 盛田匡広 横山誌鞍
猪又有稀 二瓶孝介 古川智章
松田大誠 吉田 航

昨年度、私たちは、「川は城の建築と攻防において重要な役割を果たしている」という予想より、「城と川の関係」をテーマに調査・研究を行いました。その研究を進めていくにつれ、川は城の建築、攻防以外にも町の文化や歴史にも深く関与しているということに改めて思い知らされました。そして、今までの研究をもとに、長良川についての知識をより広く、より深くさせていきたいという思いが強くなり、昨年度の研究成果をもとにし、今年度は「長良川の移り変わりとは岐阜」というテーマを設定しました。

1. 仮 説： 長良川と岐阜市周辺の産業は大きく関係している。長良川は岐阜の産業や人々の生活の中で、大きな役割を果たしている。
2. 調査項目： 長良川に関連していると考えられる以下の5つの観点について
① 鵜飼について ② 岐阜周辺の伝統的な産業について
③ 川原町・水運について ④ 水害について
3. 調査方法： 書籍を使用した調査

4. 調査結果：

① 鵜飼について

☆起源や歴史

一番古い鵜飼の記述は飛鳥時代の『随書』倭国伝であり、その後の『古事記』や『日本書紀』にも記述がある。長良川鵜飼が1300年の歴史を築くことができたのは、時代ごとに美濃国の守護の土岐氏や戦国大名の斎藤氏、織田氏など時の権力者によって保護されてきたからである。

江戸時代の1615年には、徳川家康が鵜飼を見物して感動し、鮎鮓を所望されるようになった。鮎鮓が幕府の上納品となり、長良川の鵜匠は優先的な漁業権、給米支給、不漁時の御救米支給、所持する土地の諸役免除、鵜匠頭の苗字帯刀などの保護・恩恵を受けた。当時の長良川は天領だったので、公儀御用鮎漁と鮎鮓献上は美濃国奉行の所管だったところ、元和5年に関係地域が尾張領に編入されて、それらの業務が尾張徳川家の岐阜代官に移管された。しかし、18世紀半から鵜匠と鵜舟の数を約半分に減らされた。鮎鮓の献上自体は明治維新直前の1862年まで続けられた。

② 岐阜市周辺の伝統的な産業

面しており、舟で物資が運ばれる際の中継地点になっていたと考えることができる。また、この狭い範囲の中で3つの市が設けられた井ノ口は、当時非常に栄えていたと考えられる。

斎藤道三の時代、中川原は「要害の地」として産業が栄えていた。そう呼ばれた根拠として、大きく二つ考えられる。

(1) 道が視覚的にも機能的にも壁としての役割を果たしていたこと。

当時の中川原は、他の道よりも約5 m高い位置にあった。また、中川原の南方面にあった湿地付近に高い石垣が積んであったのが確認されている。外から中川原の様子を覗いたり、中に入ったりするのは難しい。

(2) 中川原北側に接した長良川との境界で約3 mの落差があること。

この落差は交易をする際に必要だったと考えられる。

この特徴により、斎藤道三は「中川原は攻められにくく、守りやすい地域」つまり「要害の地である」と捉え、美濃の産業の中心にすると決め、栄えていったと考えられる。

☆水運について

信長の孫の織田信秀は鏡島湊を重視した。(図1) この当時、長良川の流路が一定せず、川の堆積物が多かったため、中川原湊と鏡島湊の間を舟で行き来することができなかった。そのため、川を上ってきた舟は鏡島湊から陸揚げしなければならなかった。

陸揚げ後は忠節村を經由して湊道(岐阜への道)で陸送(1650年に長良川の大洪水が起き、上流に舟が行き来できるようになるまで続いた)。

しかし、関ヶ原の戦いの影響で中川原は突然衰退してしまう。江戸幕府ができた際には徳川氏が美濃地方を含む多くの地域を支配し、大久保長安という人物によって岐阜に陣屋が置かれた。また岐阜城が廃城されたことも重なった。岐阜の産業は衰退していき、経済をまわしていくために長良川の水運を利用せざるを得ない状況にまでなる。

☆川並役銀について

1690(元禄6)年に川並役銀(通行税)の徴収が始まった。これは舟運の利用者が増加したことや、年貢米以外の米が市場に出るようになったことが関わっている。本舟(積載量が多いが、税金が高い)には2匁7分4厘が課せられた。灰舟とは同じ大きさの舟で下流へ下り灰買する場合又は5間の舟で積み下ろす場合のことで役銀1匁1分9厘が課せられた。本舟は、盆前、盆後合計で大きく衰退している。一方、灰舟の往来数は急増している。背景には河川の水位が浅くなり大舟の運搬を困難にしたことで小舟が輸送を担わざる負えなくなったことが挙げられる。(資料①・②)

資料① 本舟の往来数

本舟の往来数			
年	1712	1713	1869(明治2年)
本舟の数	1555隻	1578隻	60隻
増減	—	23隻増	1518隻減

資料② 灰舟の往来数

灰舟の往来数		
年	1691	1869（明治2年）
灰舟の数	123 隻	4837 隻
増減	－	4714 隻増

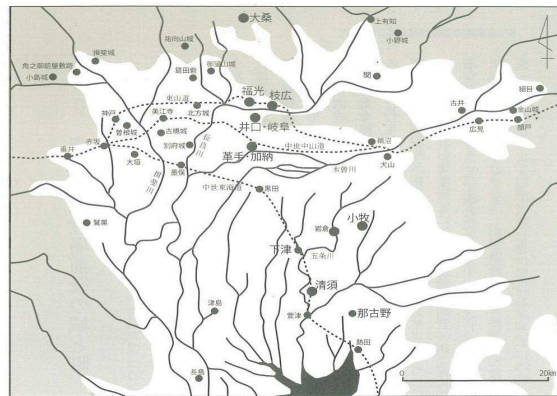
1650年9月、尾張国、美濃国において大規模水害が発生した。堤防はことごとく破壊され、木曾三川流域(図2)はまるで海のようになってしまった。特に被害が大きかったのは、大垣藩及びその周辺であった。この洪水は俗に「ヤロカの大水」と呼ばれている。この大洪水によって前記した中川原湊と鏡島湊がつながった。

(「ヤロカ水」とは、江戸時代、尾張国・美濃国に出現した妖怪のこと。川岸や川底が濁流に洗われ、大きな石が流れる際の音を「ヤロカヤロカ」と表現し、上流で発生した土石流伴う土砂が堆積し、水があふれる際の状況を「ヨコサバヨコセ」と表現したもの)

(図2) 木曾三川流域の地図

【城館研究叢書3 戦国美濃の城と都市 より】

明治時代になると水運の使い方が変化した。明治に入り、地租改正によって税を現金で納めるようになった。そのため、収穫した米を現金に換える必要があり、舟の目的地は米市場のある桑名村に変わった。



第1図 美濃国、尾張国の守護所・戦国城下町等の位置

5. 考察：

長良川が存在だけでなく、ほかの地理的条件や権力者の保護などの要因があったことで、長良川流域では産業が発展した。岐阜は要害の地であり、長良川の水運があった理想の土地であったから時の権力者が注目した。

ある意味では齋藤道三が拠点にしたことは偶然的だったが、その後長良川の水運や地理的条件によって栄えたことは必然的だったと考えられる。

6. 参考資料（主要なもののみ）：

- ・城館研究叢書3 戦国美濃の城と都市.2021年.内堀信雄.高志書院
- ・岐阜県の歴史シリーズ(10)岐阜県歴史年表.1988年.吉岡勲.株式会社郷土出版社
- ・戦国城下町・岐阜～織田信長と天下布武の町～.2007年.松田千晴
- ・和傘.2012年.岐阜市歴史博物館.岐阜市歴史博物館
- ・長良川の一日.1989年.天野礼子.山と溪谷社
- ・美濃紙.1983年.澤村守.同和製紙
- ・岐阜ちょうちんあれこれ百問百答.1983年.小島幸一.岐阜県物産
- ・美濃の和紙.1987年.岐阜市歴史博物館.岐阜市歴史博物館

上川アイヌの研究 その57 「アイヌのイナウ(御幣)とヌササン(祭壇)」

旭川龍谷高等学校 郷土部

はじめに

2021年2月9日、上川アイヌの首長の流れを継ぐ「川村カ子トアイヌ記念館」館長の川村兼一氏がお亡くなりになりました。兼一氏は、記念館の運営だけでなく上川アイヌの儀式、沖縄戦のアイヌ戦没者慰霊、全国の大学や研究所に眠る（研究用に盗掘された）上川アイヌ人骨の慰霊など、上川アイヌの長老としてその責任を一身に背負っていました。兼一氏の死は、上川アイヌにとってとても大きな出来事でした。

1. 上川アイヌが執り行っているカムイノミ（神への祈り）の儀式

川村家の喪が明けた2022年2月、上川アイヌの儀式が本格的に始まりました。兼一氏の後継を決意したご子息、年齢25歳の川村晴道(はると)さんにとって、「川村カ子トアイヌ記念館」の運営だけでなく、上川アイヌの首長の流れを継ぐ者として儀式の担い手となり伝承文化を後世へと伝える重い責任を持つ生活が始まりました。

- ①… 3月下旬 サケの出発式とカムイノミ
- ②… 5月下旬 聖地でのチノミシリカムイノミ（チノミシリ=聖地）
- ③… 6月初旬 「アイヌ神謡集」を書いた知里幸恵生誕祭でのカムイノミ
- ④… 6月中旬 旭岳の安全祈願祭のヌプリコロカムイノミ（ヌプリコロ=山の神）
- ⑤… 8月中旬 上川アイヌ「殉郷殿」でのイアレ（先祖供養）
- ⑥… 9月下旬 交通の難所である「神居古潭」の安全祈願のカムイノミ
- ⑦… 9月下旬 サケを迎える儀式 カムイチュプノミ（カムイチュプ=神魚(鮭)）

カムイノミにはその都度、様々な神々に捧げる祭具「イナウ」=御幣を作製し、それを祀る「ヌササン」=祭壇を構築することが必要です。晴道さんは、上川アイヌの代表として、伝統の「イナウ」の作製と「ヌササン」の構築を続けなければなりません。そこで、上川アイヌの祭具作成を正しく継承している指導者のもと、上川アイヌ伝統の「イナウ」と「ヌササン」について引き継ぐこととしました。この「イナウ」・「ヌササン」の伝承活動に私たち郷土部の部員も参加が許され、厳格な雰囲気の中貴重なアイヌの精神文化を体験し学ぶことが出来ました。

2. 「イナウ (inaw)」とは何か

「イナウ」とは、アイヌ民族の祭具のひとつで、人間と神の間を取り持つものとされ、日本の「御幣」に姿は似ていますが、あくまでアイヌ民族独自の精神文化から生まれたものです。

一本の木の棒を削り、削った房を残したり削り取ったりして形作ります。「イナウ」は神の喜ぶ捧げものであり、それ自体が神でもあります。カムイノミの際、お酒とともにイナウを捧げると、アイヌの思うところが神に伝わり、いただいた神もその力を増すものと考えられています。その姿や形にはちいささがあります（写真：上川アイヌの「イナウ」）。



使用する木材は、上川ではヤナギ・ミズキ・シコロ・ハンノキが使用されます。重要な儀式には、「肌の黄色いシコロ」が使用され、災いがあったときには「肌の赤いハンノキ」が使用されます。ヤナギを用いた肌の白いイナウは神の国では“白金”に、ミズキやシコロを用いた肌の黄色いイナウは“黄金”になると考えられ、両材料が多く使われました。上川アイヌでは“イナウニ＝イナウになる木”は「ミズキ」となっています。

「イナウ」作りは、アイヌの男たちの仕事であり、一人前の男として認められる仕事のひとつです。重要な儀式では、儀式の行われる場所に泊りがけで「イナウ」作りをしました。特にイオマンテ（熊送り）やチセノミ（新築祝い）などの大きな儀式が行われるときには、たくさんの「イナウ」が作られました。

3. 「イナウ」の作製

材料となる木は、「土地の神（シランバカムイ）」と「樹木の神（シリコロカムイ）」に「イナウを作るために枝をいただきます」とお祈りを捧げ節の無い真っ直ぐな直径が3センチの木材を採取し、約70センチメートルの長さに切り揃え採取します。皮を剥いで乾燥させ、程よく乾燥したら、根元の方を奥に枝先の方を手前に持って、表面にマキリ（小刀）の刃を立て、奥から手前へ引き削りカールした削りかけをたくさん作ります（写真：削りかけ）。「イナウ」は、神そのモノでもあるので、作業には非常な熟練と精神統一を必要とし、決して遊び半分で削ってはいけません。



「イナウ」は、次の4種類を基本としています。

- ・「キケパラセイナウ＝削りかけを散らしてあるイナウ」
- ・「キケチノイエイナウ＝削りかけを燃ったイナウ」
- ・「チエホロカケプイナウ＝逆さに削ったイナウ」
- ・「イナウル・イナウキケ＝削りかけだけのイナウ」

※伝承活動の中で・・・(Q & A)

Q：イナウは何のためにあるのですか？

A：神に言葉を伝えるためにある。神にはそれぞれ役割分担があって、それぞれの神のイナウを作ってお祈りをする。イナウは神！しかし、アイヌの宗教観では人間と神は対等な関係。神に守ってもらうために作るけれど、守ってくれなければ神を叱りつけて解約する。守ってくれなかったイナウは燃やして新たなイナウを作って再びお祈りをする。

Q：最も身近なイナウは何ですか？

A：「火の神（アペフチカムイのイナウ）」。毎日、1日2回お祈りをする。それぞれの神にお祈りするときには必ず火の神に話を通してから行う。「チプサンケ(舟おろしの儀式)」のときもまず火の神に話を通してから「水の神（ワッカウシカムイ）」にお祈りをした。

Q：イナウが増えてきたら？

A：村共通のチノミシリに持って行き、大木の下に納める。上川、川村家のチノミシリは嵐山。杉村家のチノミシリは、比布出身だから比布にあるチノミシリ（今はスキー場になっている）に収める。

Q：イナウを作るときに大切なことは？

A：イナウは神だから、真面目な気持ちで決してふざけて作ってはいけない。木の上下を間違っただけではいけない。ノコギリの切り目をそのままにしないでマキリで削る。イトツパ（家紋）を彫った木屑は必ず火で燃やす。生理のある女性はダメ！おばあさん（生理のない）になったら良い・・・

Q：近文地方のイナウに特徴はありますか？

A：ほとんどのイナウが「キケチノイエイナウ＝削りかけを燃ったイナウ」。削りかけを燃った部分の上部に「イナウコケラ」がつく（上川と十勝のアイヌだけ）。ヌササン（祭壇）ではコタンコロカムイ（村の守り神）はフクロウの神だから、そのイナウには「キサラ＝耳」が付く（写真上：上川アイヌの「イナウ」）。



Q：お祈りのときにお酒をつけるのはなぜですか？

A：人間の言葉を神の言葉に変えるため。イクパスイ（奉酒箸）にお酒をつけて3回イナウに雫を垂らし祈る。これを2回行う。このとき必ず火を燃やし、その煙に言葉を乗せて神の国へ伝える。イクパスイにもイトツパ（家紋）を刻み、誰の言葉かを神に明らかにする。（写真下：イクパスイと酒椀）



Q：カムイ（神）って、どんな存在ですか？

A：人間には人間の役割が、神には神の役割がある。人間は神の喜ぶ「イナウ」を心込めて作り、作法にのっとって神々に祈りや感謝の言葉を伝える。もしその神が祈りの言葉を実行しなければ、人間はその神を叱って関係を解約し、新たに「イナウ＝神」を作り再び祈りを伝える。そこには神々に絶対的な力を認めながらも失敗を許さない、人間と神の対等関係があります。

4. 「ヌササン(nusa san)」とは何か

アイヌの祭事で常に主要な場となるのがヌササン（祭壇）です（写真：上川アイヌのヌササン）。

住居チセ（家）の東側、上川アイヌでは川の上流側にカムイプヤラ（神窓）という神が出入りをする神聖な窓がつけられます。その外側に、ちょっとした広場があり、その正面にヌササンは設けられます。チノミシリでは7つの神が祀られています。



※ヌササン誕生の伝説

『コタンコロカムイ（造化の神）』がこの世界を造った時、真っ先に生えたのがドロノキで、次に生えたのがハルニレであった。コタンコロカムイが人間に火を授けようと、ドロノキで「発火台」と「発火棒」を作り、それを揉んで火を起こそうとした。けれども、いくら揉んでも白と黒の揉みくずが溜まってくすぶるばかりで、火はついに出来なかった。いまいましくなって白い揉みくずを吹くと、「パウチカムイ（淫乱の神）」という魔神になり、黒い揉みくずを吹くと、「パコロカムイ（疱瘡の神）」となって飛び去った。ドロノキで作った発火台と発火棒は「ケナシウナルベ（木原の怪鳥）」・「イワエトウンナイ（奥山

の怪鳥)」とよぶ恐るべき魔神となった。

- ・白い揉みくず⇒パウチカムイ（淫乱の神） ・黒い揉みくず⇒パコロカムイ（疱瘡の神）
- ・発火台⇒イワエトウンナイ（奥山の怪鳥） ・発火棒⇒ケナシウナルペ（木原の怪鳥）

造化の神は次にハルニレの木で発火台と発火棒とを作り、それで揉むと初めて「アペフチ（火の婆）」が生まれた。アイヌはハルニレを「チキサニ」、すなわち「我々が火を揉み出す木」と呼ぶようになった。この時の白い揉みくずは、飛んで「ハシナウウカムイ」（御幣の神〔狩りの女神〕）となり、発火棒は化して「ヌサコロカムイ」（屋外の幣場の神）となった。

- ・火の誕生⇒アペフチカムイ（火のフチ神） ・白い揉みくず⇒ハシナウカムイ（御幣の神）
- ・黒い揉みくず⇒キムンカムイ（山の神） ・発火棒⇒ヌサコロカムイ（幣場の神）

こうしてハルニレから生じた火の神・山の神・幣場の神は互いに姉妹に当たる貴い神として、アイヌが礼拝するようになった。また、ドロノキは能力の低い木であったから、この木から生じた神々はすべて魔神で、我々は日常木幣を捧げて礼拝することはしない。』

アイヌ民族にとって、最も身近な神である「火の神」が生まれるための道具が「ヌササン」であり、その時出た白い揉みくずが「イナウ」に、黒いも揉みくずが「キムンカムイ」になりました。

5. 上川アイヌ正しい伝承の復活

上川アイヌの伝承のため、父の遺志を継ぐため歩き始めた川村晴道さん。初めて責任ある儀式の祭主を務めた際、上川アイヌの伝承が途絶える可能性を実感する出来事がありました。「このままでは上川アイヌの伝承が消えてしまう。私がやらなければ・・・」と決意し、伝承者からの聞き取りや古い記録からより正しい伝承継承を目指し取り組んでいます。



おわりに

今回の研究では、一人のエカシ（長老）によって受け継がれてきたものの次世代への伝承の難しさを感じました。そんななかで父の遺志を継ぎ、上川アイヌの担い手となることへの決意と行動を目の当たりにして、私たちはアイヌ民族ではないですが、少しでも力になればと強く感じました。

主題としたヌササンとイナウにかんして、特にヌササンに関する資料や文献少なく、詳しく調べることが出来ませんでした。ヌササンの構築に携われたこと、体験できたことで、アイヌ民族の心の在り方を肌で感じる事が出来ました。研究は、まだまだ納得のいくものになっていません。上川アイヌの方々や晴道さんとの交流を通して経験を通しての調査研究を続けていきたいと思ひます。

縄文時代を知り考える現代の国際問題

青森県立青森南高等学校縄文チーム (AMJ)

1. 私たちの活動理念

縄文時代が平和であったことについて探究活動を行い、今起きている数多の争いについて考え、今一度平和の尊さについて知ってもらうような活動を行う。また、地域住民との交流に焦点を置き、地域活性化にも貢献をする。

2. 調査からわかったこと

・集落, 精神文化の移り変わり

→集落にある役割や祭祀場の出現など同じ縄文時代でもおおよそ6つに分類することができる。

○Ⅰ 定住の開始

Ⅰ a 居住地の形成

氷河時代が終わり急激に温暖化し、現代と同じような自然環境に変化した。人々は新しい環境に合わせて、遊動生活から定住生活に変えていった。竪穴建物に住み、土器や弓矢を使い始める。

(大平山元遺跡)

Ⅰ b 集落の成立

日本各地に定住集落、貝塚集落が出来上がる。居住域と墓域が分離する墓制が成立する。垣ノ島遺跡では、墓穴から世界最古となる漆製品が見つかっている。

(垣ノ島遺跡)

○Ⅱ 定住の発展

Ⅱ a 集落施設の多様化

温暖期に、縄文海進と呼ばれる海水面が3mが上昇する出来事が起こった。内陸部にも貝塚あり、日本の中央では環状集落が発達した。北東北の集落内には貯蔵施設、祭祀的な捨て場など様々な施設が設置された。

(北黄金貝塚、田小屋野貝塚、二ツ森貝塚)

Ⅱ b 拠点集落の出現

東日本で人口が増え、集落が大規模化した。複数の小規模集落を束ね、祭祀や交易の拠点集落が現れ、地域社会が成立した。集落の祭祀場が多様化し、顕著となった。

(三内丸山遺跡、大船遺跡、御所野遺跡)

○Ⅲ 定住の成熟

Ⅲ a 共同の祭祀場と墓地の進出

東日本では、複数の集落が共同で祭祀場と墓地をつくるようになる。環状列石墓地、周堤墓が発達した地域もある。後期末には塩づくりがはじまり、広まっていた。

(入江貝塚、小牧野遺跡、伊勢堂岱遺跡、大湯環状列石)



Ⅲ b 祭祀場と墓地の分離

祭祀・儀礼が充実して、共同墓地、共同祭祀場が発達した。後期より漆文化、漁具、祭祀具が発達した。九州北部で水田稲作がはじまり津軽平野まで広がった。

(キウス周堤墓群、大森勝山遺跡、高砂貝塚、亀ヶ岡石器時代遺跡、是川石器時代遺跡)

○縄文時代の平和

・縄文時代が平和であるといえる根拠

岡山大学と山口大学の共同研究によると縄文時代における暴力での死亡率はわずか1.8%という結果が出た。2582点の人骨を収集し、暴力での死亡率を算出したところ、暴力の痕跡があったのは23点だということが分かった。この結果はほかの時代の約5分の1である。

・なぜ縄文時代が平和だったのかの考察

①定住を開始した

旧石器時代の食料調達には狩猟が主流であり、獲物を追って人々も住処を転々としたため、一か所で暮らすことができなかったが、縄文時代の人々は主に植物採集や漁をして食料を確保するため、森や川、海などの近くで定住をすることができた。定住することで食料を貯蔵でき、飢えることなく暮らせるようになった。

②土地を所有しなかった

縄文人は定住しても現代のように土地を所有するという概念がなく、場所にしばられることがなかった。自然の恵みは自分たちのものではないという考えであり、食料が取れなくなったら、集落ごと別の土地に移っていた。

・いつ頃争いが始まったのか

日本人が本格的に戦争を始めたのは弥生時代からといわれている。弥生時代の戦争のきっかけは「稲作」である。米を作るためには土地を開墾しなければならず、土地を所有するという概念が生まれた。縄文時代よりも安定して食料が供給されることで人口が急激に増え、土地を所有するもの所有しない者といった縄文時代にはなかった格差が生じたことで弥生時代に争いがおこったとされている。

○縄文時代の豊かな暮らし

・自給自足の生活

日本は海と山の恵みがあり、魚から木の実、山菜まで多くの食材を得ることができ、また自分

たちで肉を食べるために狩りを行っていた。当時は人口が少なかったため必要な分だけを取り保管技術もあまり発達していなかったためとったものをすぐ食べるという争いが起こりにくい環境であった。大陸のように外敵から狙われにくいという地理的要因もまた安全で豊かな生活を送っていた理由であると考えられる。

・狩りの特徴

動物を狩っていたのは木の実が採れない冬が主で、川や海から魚を捕るのは1年中行われていたと考えられている。乳類から鳥類まで幅広い動物を狩って生活していた。旧石器時代に狩られていたのは大型の哺乳類だったが、縄文海進により大型動物が絶滅し狩りの対象が小型化していった。狩りの対象は地域によって異なりますが、北海道や東北ではサケやマスが主に食べられていた。

3. 縄文時代を知り考える現代の国際問題

○現代起こっている国際問題

国際問題を挙げると貧困、教育、人権、紛争、難民、食料、健康、気候変動など多岐にわたる。これらの問題は問題を抱えている国だけで解決して完結するようなことではなくすべての国が協力する必要がある。

貧困問題の原因として一次産業中心で経済的基盤が弱いこと、紛争や内戦で国が混乱していること、対外債務を背負っている国が多いことがあげられる。また、教育に関する識字率が低い理由も貧困と類似していて経済的基盤が弱く学校を建設できていないこと、紛争や内戦が国内で起こっているということである。人権は性、障害、貧困、民族、宗教など多くの理由で侵害されている人が国内外問わず存在しており国境をまたいで人権侵害が行われると国際問題として発展するケースもある。難民・食料の問題は原因をたどると大きな理由として紛争・内戦につながる。健康の問題では貧困が原因で診察を受けることのできない人が世界人口の半数に達している。エイズ・結核・マラリアなどの感染症は国境をまたぐため国際的な支援が必要である。人間活動が主に温室効果ガスの排出を通して地球温暖化を引き起こしてきたことで気候変動が起こっているということに疑う余地はなく主に先進国での工業的活動が原因となっている。

○縄文時代の平和を現代につなげるために

縄文時代は貧富の差がなく食糧難にも陥っていなかったのはなぜか考えると土地の所有や商売が行われず物々交換で行っていたこと、人数に応じた分だけ食料を調達して生活していたことが理由だと思う。現代で物々交換を行うことや人数に応じたぶん食料を生産することはあまりにも困難なことである。しかし縄文時代の平和を現代へつなげることでできることとして相手を思いやった行動をすることがあげられる。お互いを助け合って生きることは現代では欠けていると感じる。平成から令和という新しい時代になり6年がたち、この短期間でも人々の価値観は変わってきている。その中で都会では特に顕著に地域住民同士の関わりが減ってきている。人付き合いを苦手としている人には良い価値観ではあるとは思いますが、何か困ったときに支えあうというのは人間にとってもともと必要なことであると思う。だからこそ私たちは縄文の平和を通して、人と人のつながりを発信していきたい。



○出典

<http://free-photo.net/archive/entry191.html>

<http://free-photo.net/archive/entry3700.html>

<https://news.line.me/detail/oa-penonline/wl2toawgxsmv>

<https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00372745/index.html>

石造物に思いを刻んだ名古屋の米商人

岐阜県立加納高等学校 地域研究部

長谷川健・中村諒世・畑中響葉・堀江優介・川原諒太

(※ は発表スライドのページ番号と符合)

こんにちは、岐阜県の加納高等学校地域研究部です。本日は私たちが先輩の代から長年追いつけてきた名古屋商人についてご紹介します※¹。

近世後期の商人杉屋佐助は、名古屋を中心に寺社や街道などに灯籠や道標など石造物を次々と寄進しました※²。杉屋の石は現在55カ所で見つかっており、私たちの地元岐阜にも多数あります。また55のうち3つは私たちの部の先輩が見つけた物です※³。

杉屋については名古屋蓬左文庫、横井在時の先行研究があります。それによりますと、杉屋は初代と二代目がいます。初代は濃州石田村、現在の岐阜県羽島市下中町石田の田内家から名古屋に奉公に出て、碁盤割と言われる長者町に店をもつほどの財を築きました。寄進を行ったのは二代目です※⁴。

杉屋はその石造物に「尾州名古屋米穀問屋」と刻んでおり、米穀商です。そして「名古屋中御園町」とある石もいくつかあります※⁵。最近ネットで紹介された新発見の杉屋の常夜灯は濃尾平野を見渡す山腹の神社にあり、案内看板に「手旗信号で送られてくる米相場を受信した場所で、名古屋方面の相場師から寄進された灯籠」とあります※⁶。当時米価は大坂堂島米市場で決まり、手旗信号でその日に全国へと伝わりました。ここはその旗振り場です。杉屋は米価の変動で利ザヤを稼ぐ相場師、延米（のべこめ）商人です※⁷。

杉屋の石には天保3年から息子の佐太郎という名前が現れます。桑名市春日神社の対の狛犬は、右が杉屋佐助、左が佐太郎で、佐太郎は中御園町でなく船入町とあります※⁸。

私たちは杉屋佐助の中御園町に行ってみました。今の地名は名古屋市中区丸の内、日本銀行名古屋支店もある、古くからの金融街です※⁹。佐太郎の船入町は、堀川水運の船荷をあげる労働の現場で、近くに四間道とよぶ倉庫街や名古屋で最も古い円頓寺商店街があり、暖かい庶民生活の場です※¹⁰。佐助・佐太郎の場所を絵図に置いてみると、息子佐太郎は名古屋の大動脈の堀川沿いで実際に米を扱う延米を、父親の佐助は碁盤割と呼ぶ長者町で金融を営んで、石造物寄進という隠居仕事もしていた様子を読み取れます※¹¹。

杉屋の寄進は文政3（1820）年から安政3（1856）年まで37年間行われました。これを年代順に並べてみました。まず文政3年に1基、文政10年に3基入れました※¹²。文政10年の3基は全て杉屋と近江屋市兵衛・松野屋久左衛門という3名による共同寄進です※¹³。

杉屋が本格的に寄進を始めたのは天保3（1832）年からです。この年6基の石を入れました。その後、天保7年までの5年間で合計12カ所で寄進しました※¹⁴。

この天保3年の6つは共同寄進ではなく、全て杉屋単独による寄進です。そして全て「名古屋米穀問屋杉屋佐助」と名乗った後に、番頭の与吉という名前を従えています。息子佐太郎の名前を石造物にデビューさせたのも天保3年で、現役の仕事を佐太郎に譲り、石造物寄進という隠居仕事で佐太郎を盛り立てていこうとしたのかもしれない※¹⁵。

この天保3年から7年までの12の寄進を地図に示すと、どれも名古屋周辺部です※¹⁶。

天保8年～10年まで、寄進はしばらく途絶えました。ところが表の通り、天保11（1840）年、一気に9か所に入れました※¹⁷。この年、杉屋に何があったのでしょうか。

名古屋の笠寺観音にある天保11年の供養碑は、佐太郎の名前で三尊仏が入り※¹⁸、裏に

次のように書かれています。「濃州三ツ柳村住人魚住六角倅二男乙左十五才ニ名古屋中御園町杉屋佐助方へ奉公ニ参改名乙吉十九才元服与吉ト改主人ノ為ニ商賣に励み忠義一心一生無妻四十六歳天保十一年五月十四日世去（よをさる）扱者（さては）世ニまれなる人かな是をよむ人念佛授けたまえかし」…番頭の与吉さんが亡くなったのです。結婚もせず杉屋に尽くした与吉さんを称え、読んだ人に念仏を唱えてほしいと呼びかけています^{*19}。

与吉さんが亡くなった天保11年の9基の石のうち、5つが今のような与吉さんの供養碑です。そして名古屋近郊だけでなく、富山県立山参道・三重県熊野街道など、かなりの遠隔地にも立てました。石造物寄進に慣れてきた事情もあると思いますが、遠くにも思いを広めたかったようです^{*20}。その一つ、熊野街道の石造物、三重県紀北町の真興寺蛤（はまぐり）石は、佐太郎の名前で表で往来する人々の安全祈願を、裏で与吉の供養をしており、与吉さんを死なせたのを、世間への奉仕で償おうとしているかのようです^{*21}。

番頭与吉さんを失った杉屋に、さらに試練が訪れます。弘化2（1845）年、今度は11か所に寄進する2度目のラッシュが起きました^{*22}。名古屋の八事興正寺にある弘化2年の供養碑には「俗名杉屋佐太郎・同与吉法界含識（ほっかいがんしき）」とあります。俗名すなわち生きていた頃の名前ですから、これは与吉さんだけでなく佐太郎も亡くなったことを意味します。29歳の短い生涯でした。あの世にいる番頭与吉さんと、次いで旅立った息子佐太郎が、共に向こうで生きて行けるよう祈っています^{*23}。

初代杉屋佐助の故郷、岐阜県羽島市の浄土真宗願照寺にある弘化2年の先祖供養の碑には、佐太郎の辞世（じせい）「念仏を杖に二月や死出の旅」の句が入り、父親の初代杉屋佐助に、あの世に行った佐太郎を守ってくれるよう祈っているようです^{*24}。

頼りの番頭さんばかりか、跡取り息子にも先立たれた杉屋佐助の悲しみは深かったはずで、二人の死が杉屋の石造物寄進の強い動機になったのは間違いありません。ただ、極めてプライベートなこれらの事を、はるか遠隔地を含む21もの場所にアピールし、合わせて社会の幸せも願うようになったのはなぜでしょうか。ここで私たちは、杉屋を石造物寄進に駆り立てたもう一つの理由と考えられる、大きな社会的事件があったことに気づきました。それは天保4年から天保10年まで全国を襲った、天保の飢饉です^{*25}。

天保の飢饉は江戸時代の四大飢饉の一つで、天保4（1833）年から天保10（1839）年まで、全国で30万人の餓死者が出たと言います。天保4年の米の作柄は平年の3割～7割、5・6年も不作、7年が最も深刻で3割～4割でした。資料にあるのは、今の名古屋市中川区で天保7年に窮民が泥を食べていたとする絵です^{*26}。

名古屋市史にある当時の米一斗あたりの価格を計算しました。杉屋が寄進を始めた文政初期は、米一斗はおよそ900文、それが飢饉の終わりの天保9年は2.5倍の2400文に値上がりしました。これは当時の貧困層には生死に関わる食糧難です。ですが、杉屋のような延米商は、買った米を売らずに値上がりするのを待つか、より高く売れるよその地に転売するのが仕事です。天保3年の6個の寄進は、通常の延米商売が順調で、これを佐太郎に引き継ごうと思ったのかもしれませんが。ところが翌天保4年から、飢饉で米は大きく値上がりし、餓死者まで出始めました。それでも売り惜しみや転売をする米穀商がいたのです。この天保4年から10年まで、名古屋の餓死者は合計1500人を超えたそうです^{*27}。

資料の絵は旧尾張藩士の小田切春江が、明治18年に弟子に描かせた『凶荒図録』より、天保7年に名古屋で行われた炊き出しの様子です。小田切は文化7年1810年の生まれで、

天保7年当時26歳です。飢饉を直接体験しており、これは単なる想像図ではないと考えられます。ここでは「天保七年の申年は甚だしき凶歳にていずれの市街村落にも餓死行き倒れの非ざるはなかりけり」と述べ、尾張藩が名古屋広小路に施業小屋を設けて窮民に粥と米を施し、市中の慈善家が桜天神で銭を配ったとあります^{※28}。

飢饉が最も深刻だった天保7年、杉屋が入れた石は小さな供養碑一つで、飢饉が続いた天保10年まで寄進は途絶えます。さすがに延べ米で儲けたことを世間に誇示するのをためらったのではないのでしょうか。そこにまるで天罰でも下ったかのように番頭與吉と息子佐太郎が亡くなったのです。二人の菩提と共に、死者が出ても儲けるような商売で豊かになったことへの罪悪感が、天保11年以降の寄進の動機になっていたように思われます^{※29}。

愛知県西尾市岩瀬文庫の、天保七年に桜天神の施しに協力した市民の名簿を見ますと、名古屋の御三家とよばれた延米商、内田忠蔵や、同じく御三家の呉服商で現在の松坂屋百貨店の伊藤次郎左衛門をはじめ、大口・小口の寄付がもれなく書かれています^{※30}。この他、除地衆とよばれた米穀商伊藤忠左衛門、呉服商で現在の丸屋百貨店の丸屋正之助、丸栄百貨店の小出庄五郎の名前もありました。しかし、杉屋佐助・佐太郎の名前は見当たりません。杉屋が過去に名乗った田内・石田・米屋なども探しましたが、見つかりませんでした^{※31}。凶荒図録に、炊き出しを広小路で行ったとありましたが、最も人の往来があった本町筋あたりと考えられます。また、窮民にお金を配ったという桜天神は今もあります。この二つの場所と杉屋佐助の店、佐太郎の店は共に近くにあります。杉屋親子がこれらを知らなかったはずはありません。杉屋は沈黙を貫いたのでしょうか^{※32}。

天保の飢饉では近世で最も多く暴動が起きました。ここで必ず狙われたのが米穀商です。杉屋も危険を感じていたはず^{※33}。天保7年8月の甲斐郡内騒動は幕府直轄領の甲斐で起きた1万人規模の暴動です。翌9月には名古屋の隣の三河でこれを超える加茂一揆が起きました。そして翌天保8年2月、大坂で大塩平八郎の乱が起きます^{※34}。

私たちは昨年度、大阪に行って大阪歴史博物館の学芸員の先生方に杉屋佐助に関する発表をご覧いただき、大塩の乱について指導をいただきました^{※35}。

天保8年の大塩の乱は、大坂町奉行と米穀商が、江戸に米を出荷していたことに反発した大坂町奉行所元与力の大塩平八郎が蜂起した事件です。大坂は名古屋以上に深刻で、ひどい時は毎日150～200名の餓死者が出ていました。大塩は自身が経営する陽明学の塾洗心洞の塾生らと隊列を組み、準備した大砲を市内の豪商の店に打ち込んで行進しました。乱は半日で鎮圧されましたが、天満を中心に大阪市中の5分の1が焼失、7万人が焼け出され、270名が焼死しました^{※36}。博物館では、大塩の乱で焼失した大塩焼けの範囲を示していただきました。ここは堂島米市場をひかえた日本最大の米の集積地です。全国の米が集まるこの地で、餓死者が出るのを承知で米を転売する米穀商や役人たちに大塩の怒りがぶつけられました。先にふれましたが、堂島米市場で決まった米の値段は旗振り通信で杉屋のいる名古屋にも伝わっていました^{※37}。

私たちは博物館を出てから、地元の方の案内で大塩一行が大砲を打ち込みながら行進した経路を歩いてみました^{※38}。日本一長いという天神橋筋商店街も大塩一行が来た所です。天神橋の名の通り、ここは大阪天満宮の賑わいのできた所です。私たちはすぐ隣の天満宮にも連れて行っていただきました。そこでびっくりするものに出会いました^{※39}。

資料をご覧ください。大阪天満宮の一角の、その名も白い米「白米社（しらよねし

ゃ)」に杉屋佐助と佐太郎親子が連名で常夜灯を立てていました。天保11年の物で、当時ここはまだ大塩焼けの焼野原でした^{※40}。

私たちは日を改めて再び現地にうかがい、大阪天満宮文化研究所所長の高島幸次先生に杉屋の研究を見ていただきました。高島先生は、常夜灯は大きな貢献をした見返りに建てられるもので、大塩焼けで焼失した天満宮の再建費用を出したのだらうと言われました。名古屋も大坂も大量の餓死者が出ているのをよそに、米の転売を家業としてきたことへの罪悪感や、堂島米市場のおかげで儲けさせてもらっているこの地で、大塩の乱の犠牲になった人々への供養も兼ねて杉屋は大坂の町の復興を手伝ったのではないのでしょうか^{※41}。

数え切れない餓死者が出る中、番頭与吉・息子佐太郎と共に延べ米で儲けたひけ目、そして飢饉の直後にその二人を失ったことに、杉屋佐助は人の命を踏み台にして財を成すような商売を家業としてきたことの報いを思ったのではないのでしょうか。その後、杉屋は石造物寄進を続けながら、寺院の建立を始めます^{※42}。

明治13年の尾張名所図絵には、清須の浄土宗長谷院（ちょうこくいん）というお寺が描かれています。仁王門、本堂、多宝塔まである、本格的な寺院です^{※43}。尾張名所図会の説明によりますと、長谷院はもともと清須のこの地にありましたが、近世初期の清洲越しという政策で名古屋に移転しました。それが天保3年に尾張徳川家によって清須の元の地に戻されることになりました。ところが地元の資金難から寺が完成できず放置されていました。ここに杉屋佐助が弘化3年に仮堂を建て、安政3年に完成させたとあります^{※44}。

私たちは清須に今もある長谷院に行ってみました。境内には天保11年の杉屋佐太郎による與吉の供養碑もありました。多宝塔も現存しています。この塔は、元々は尾張徳川家の御下屋敷（おしたやしき）にあった庭園の飾りもので、軒瓦に尾張徳川家の三葉葵が入っています。杉屋佐助は清須に移築されたこの塔を使って正式な寺院にしたのです^{※45}。

杉屋がこの寺の再興に着手した弘化3年は、息子佐太郎を失った翌年です。新川町史の史料で、杉屋は「観音堂の再建は、悴の因縁で引き受けた」とはっきり述べています。そして寺が完成できた安政3年、杉屋の寄進も4基の石造物をもって終了します^{※46}。

名古屋寺社記録集の「長谷院再興記」には、「牛は願ひから鼻綱（はなづな）通す」とあり、鼻輪で杭につながれた牛が描かれています。辞典によりますと、これは「鼻輪を通すようなしなくてもいい苦勞を敢えて選び、過酷な生き様を歩む」という意味です。横に長谷院の本堂と多宝塔を眺める杉屋佐助が「我が願ひから寺になる」と述べ、寺を建てる負担を敢えて背負い、延べ米で材を成したことの精一杯の罪滅ぼしをさせてもらった、と言っているようです^{※47}。

長谷院の墓地に、杉屋一族の墓があります。左が杉屋を築いた初代杉屋佐助夫妻の墓、右が息子佐太郎の墓です。よく見ると笠寺で見たものとそっくりの三尊仏を片隅に見つけました^{※48}。

それはやはり与吉さんの供養碑でした。15才から杉屋で働いた与吉さんは、苦樂を共にして杉屋を大規模商家に育てた功勞者と思われ、もはや杉屋にとって家族の一員だったようです。初代が築き、2代目が拡大し、息子と番頭とで大飢饉のリスクを乗り越えました。ここに米穀商杉屋を支えたオールキャストが集まり、飢饉で失われた無数の命を今も供養し続けています^{※49}。

以上で私たちの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました^{※50}。

古墳時代の相馬におけるヤマト政権との関わりについて

福島県立相馬高等学校 郷土部

はじめに

福島県相馬市は人口3万人弱の小都市である。江戸時代には平将門の子孫と称する相馬氏が石高6万石の外様大名として一度の国替えもなく相馬中村藩の統治を行った。観光は勇壮な戦国絵巻を彷彿とさせる相馬野馬追が有名である。2011年の東日本大震災では地震と津波によって甚大な被害を受け、続く原発事故によって漁業は風評被害も含め漁獲高が震災前の25%まで落ち込んでいる。現在も市を中心に復興に向けての活動が行われている。

相馬高校は明治31（1898）年創立の伝統校で、卒業生には日本国憲法制定に関わった鈴木安蔵、交通経済学者の今野源八郎、建築家の遠藤新など多くの人材を輩出してきた。郷土部は昭和21（1946）年に国語教師の岩崎敏夫により創部され、相馬市内外の遺跡や古墳を精力的に発掘調査し、その出土品は本校郷土資料室に保管されている。



【高松1号墳 天井石】



【双龍文環頭大刀柄頭】

2 郷土資料室の現状確認について

令和3、4年の二度にわたり福島県沖地震がおり、相馬市及び近隣の地域で家屋や道路に大きな被害が出た。本校校舎や郷土資料室も大きな被害を受けた。郷土部員が郷土資料室の復旧作業を行う過程で、高松1号墳（前方後円墳）の測量図を発見した。この古墳から出土した遺物が損傷を免れたことを確認すると共に、改めて本校が所蔵している古墳時代の遺物の現状確認を行った。すると、日本史の教科書や図録に掲載されているような金銅製の遺物や勾玉などがあり「なぜこのような遺物が相馬の地から出ているのか」という疑問を抱いた。そこで、高松1号墳と福迫横穴墓群からの出土品を手掛かりに上記の疑問を解明しようと数年に及ぶ調査をはじめた。本発表は、先達の研究を踏まえながら相馬の古代史が中央とどのように結びついていたのかを明らかにするものである。



3 高松1号墳について

福島県相馬市南方の東西に延びる高松丘陵(東西約4km、南北約2km、標高約30~70m)に前方後円墳、数十基の円墳、丘陵の南側と西側に横穴墓群がある。明治31(1898)頃の常磐線敷設工事に際して横穴が発見され、以後、丘陵一帯は盗掘にあった。昭和25(1950)年に、前方後円墳が荒れ果てた状態なのを危惧した相馬高校OBが郷土クラブ(現郷土部)に窮状を訴えたことから、同年8月に郷土クラブが高松古墳群で最大の前方後円墳である高松1号墳の石室内の清掃・調査を実施した。この時の測量によって前方後円墳の規模が把握された。墳丘は東西方向に築かれ、西側に後円部、東側に前方部が位置する。前方部は周辺の墓地造成のために削平されて墓地となっている。墳丘全長が21.5m、後円部径13m、前方部前端幅6.8m、後円部高は2.6mである。後円部は竪穴式石室で、破壊のためか石室がほぼV字形に掘削されて露出している。一昨年と今年3月の郷土部の現地調査でも現状は変わらず、天井石2枚が後円部南端に移動されたままの状態である。埴輪片や土器片から推定される古墳の築造時期は6世紀後半から7世紀初めとされる。

なお、昭和25年の調査では石室内から金銅製椀、馬鈴、管玉、須恵器片、埴輪片、人歯などが出土した。すでに明治時代に出土していた遺物としては、金銅製歩揺付雲珠、金銅製水瓶、金銅製蓋、管玉、切子玉、須恵器、土師器などがある。これらの一部は現東京国立博物館に収められた。この遺物については、明治34(1901)年に発行された『東京人類学会雑誌』には大野雲外がこの時の出土品である金銅製歩揺付雲珠、金銅製蓋などを図示し説明を付している。

4 福迫横穴墓群

福島県の太平洋側を浜通りといい、その北半部が相双地区(相馬・双葉)である。この浜通りは横穴古墳が多いのが特徴であり、相双地区も横穴墓群が数多く分布する。相馬市を東へ流れる宇多川と日下石川に挟まれた高松丘陵の東端に福迫横穴墓群がある。上述の高松1号墳を含む高松古墳群もこの丘陵西側に位置する。30数基の横穴墓が確認されているが、この横穴墓群の大半は玄門が開口しており、明治期からの盗掘にあったと考えられる。昭和43(1968)年、相馬高校郷土クラブ(現郷土部)によって23・24・25号墓の発掘調査を行い、横穴墓の内部構造を明らかにした。また、発掘の時期は不明確ながら、29号墓から双龍文環頭大刀柄頭が出土している。二匹の龍が向かい合う形で玉を加えている。千葉県木更津市の金鈴塚古墳出土のものと同じような形であり、相馬の方は龍の姿が分かりにくく本来の姿から退化・抽象化していることから、7世紀後半に国内で製作されたとも推測されている。さらに、相馬高校には、昭和45年に28号墓を発掘した際に出土した須恵器の大甕が保管されている。もともと一対であったものが、1個のみ復元されている。この形・文様からも7世紀頃に位置づけられる須恵器とされる。これらのことから、福迫横穴墓群は7世紀後半から8世紀の横穴墓群と考えられる。福迫横穴墓群は地域の有力者やその一族の墓もあれば、富裕な有力農民層の墓も混在しているかと郷土部では推測しているが、基本的な発掘資料が不足しているために断定はできない。しかし、高松丘陵に東端に位置することは、西端の高松古墳群とともに、相馬の有力者が埋葬される聖域的な場所であったことは確かであろう。現地の丘陵から見渡す風景は限られた支配者層の空間であることを実感できる。

5 「なぜ相馬の地から」～相馬とヤマト政権のつながり

高松1号墳の金銅製歩揺付雲珠は、群馬県綿貫観音山古墳、福岡県沖ノ島祭祀遺跡、奈良県藤ノ木古墳など全国でもごくわずかな出土例しかない。雲珠は飾り馬の尻におく唐鞍という馬具の飾りで、金銅製水瓶をはじめ東北地方の古墳出土品としては豪華な内容になっている。群馬県綿貫観音山古墳は全長97mの前方後円墳で、群馬県では最大規模の石室を持ち副葬品の豪華さから被葬者は地域の有力豪族の上毛野氏と推定されている。上毛野氏はヤマト政権下で軍事氏族的存在である。ヤマト政権の国内統一戦争において北関東に勢力を拡大した氏族で、『日本書紀』には国内だけではなく上毛野氏は外征に従事した記事がある。「神功皇后四十九年春三月、荒田別・鹿我別を将軍とす。・・・即ち木羅斤資に命じて精兵を率いて倭・百済連合軍を遣わし、新羅を撃ちて破りつ。・・・五十年の春二月荒田別等還れり」。このように朝鮮半島での軍事行動の主体として活躍したことは、綿貫観音山古墳の銅製水瓶が中国製（北齊か）で百済を経て日本に伝わったとする説と密接に関連すると考える。さらに、『国造本紀』に上毛野氏の系譜が記され、上記の鹿我別が浮田国造に任命されたとある。毛野国（群馬）と陸奥の古墳から全国でも稀な金銅製歩揺付雲珠や金銅製水瓶が出土したことは、国外の先進文化を入手できる上毛野氏、ひいては初代浮田国造となった鹿我別の墓が高松1号墳であると結論する。

福迫29号墓は、出土した双龍文環頭大刀柄頭から7世紀後半に築造したものと推定されている。『相馬市史』では、「浮田国造かその一族とするのが妥当」としている。たとえその浮田国造が上毛野氏の血筋かそうでないかは別にしても、当時の相馬地方での有力者の墓であることは間違いない。双龍文環頭大刀柄頭はヤマト政権からの威信財としての下賜品であり、ヤマト政権が勢力を北に伸張するための橋頭保として相馬の地は重要視された。その何よりの証が高松1号墳、福迫29号墓などの豪華な副葬品であろう。また、相馬の地の重要性として忘れてならないのは「浜砂鉄」である。福島県浜通り北部の海岸は良質な浜砂鉄があり、新地町から南相馬市にかけて古墳時代後期から平安時代にかけての製鉄遺跡が発見されている。これらは蝦夷との戦いに使用するための鉄製品の供給地としてヤマト政権が重視していたのであり、鉄製品を陸路および松川浦という天然の良港から海路で運ぶのに最適な地理条件をもった地域であった。

まとめ

6世紀から7世紀はヤマト政権の支配が確立し、地方でも大王権力が強化されて古墳造営に大きな制約が課されていく時期であり、同時に東北地方の太平洋側ではヤマト政権の進出によって蝦夷との抗争が徐々に激しくなっていく頃である。相馬地方も鉄器供給・運輸などヤマト政権の拡大にとって重要な役割を果たした。相馬の2つの古墳から出土した遺物は、かつての統一国家形成の一端が垣間見える大切な郷土の遺産である。相馬と群馬。ともに古来より馬が地域の名産であることも深い縁を感じずにはいられない。故郷の相馬の地が、日本史の教科書に隠れてしまい、地元でも知られざる歴史となっている現状を踏まえ、郷土部は遺跡の保存など後世へ相馬の歴史を伝える役割を果たしていきたい。

- 参考文献 『相馬市史 1 原始・古代・中世』相馬市史編さん室
『高松古墳群第一号墳調査報告書』福島県立相馬高等学校郷土室
『福迫横穴群 I』相馬市教育委員会、相馬高等学校郷土クラブ



青谷上寺地遺跡水田復元の試み

－ 弥生時代水田へのアプローチ －

鳥取県立青谷高等学校

研究グループ 青谷学Ⅱ 弥生文化探究

作成者氏名 岩田侑子 川角雪乃 杉本心音花 松岡永遠

はじめに

今年3月下旬に青谷かみじち史跡公園がオープンした。それにともない史跡公園内に弥生時代の水田を復元することになり、青谷高校も水田をつくることになった。昨年度は違った場所で実験水田をつくっており、その研究成果を今年度の実験水田にいかし、継続して研究をおこなっている。今回は、昨年度の研究成果と現状を報告したい。

I 研究目的

青谷上寺地遺跡水田を復元することにより、当時の景観を再現し、弥生時代に青谷町で暮らした人々の実像にせまることが研究の目的である。実像に迫るために私たちは3つの問いを立てた。1. 弥生時代はどのような稲を栽培していたのか。2. 弥生時代の水田はどのような水田だったのか。3. 弥生時代の水田の収穫量はどのようなものであったのか（どれくらい米を食べていたのか）。これを調べることにした。2については、今回は青谷上寺地遺跡の水田のみを報告する。

II 青谷上寺地遺跡水田跡の概要

青谷上寺地遺跡は鳥取市青谷町青谷・吉川に所在する弥生時代前期から古墳時代前期初頭を中心に営まれた集落遺跡である。これまでの調査で、人々の活動の拠点となった中心域や水田域が確認されている。交易拠点としての港湾集落の側面を持ち、他地域との交流が盛んに行われていたことがわかる遺跡である。青谷上寺地遺跡は良好な保存状態で出土した多種多様な遺物によって、弥生時代の生活の様子を具体的に検討できる重要な遺跡である（報告書「青谷上寺地遺跡9」参照）。

青谷上寺地遺跡水田は調査区二区で検出された遺構である。弥生時代後期の遺構面を掘り下げると畦畔上の高まりが検出され水田面として認識された。畦畔と畦畔の間が約20mある。この面は灰褐色粘土をベースとしており稲のプラントオパールが高密度で検出された。灰褐色粘土中から、端部にキザミを施す甕の口縁部が出土しており、水田がつけられた時代は、弥生時代前期末から中期前葉の時期が考えられている（報告書「青谷上寺地遺跡1」参照）。

III 炭化米と古代米

私たちは青谷上寺地遺跡から出土した炭化米を2024年4月30日（火）の6・7限に青谷町総合支所（支所内に青谷かみじち史跡公園事務所がある）で見学させてもらった。当時、青谷上寺地遺跡を調査された湯村功氏に炭化米について説明してもらった。炭化米と



は、お米が焼けて灰になったものである。今から 2000 年前の弥生時代中期～後期のものが山陰道の近くで見つかった。その炭化米には米以外に木なども混じっており、小屋が燃えるとともに稲殻も燃えて炭化米になったと考えられている。今回炭化米ブロックを見せてもらい、炭化米の粒の方向がそろっていることから高床倉庫で保管されていた稲束がそのまま燃えたとわかった。炭化米ブロックを触らせてもらったところ塊はとても軽かった。青谷上寺地遺跡の報告書（稲村他 2019）には炭化米ブロックを分析しており、炭化米の粒がそろっており形質的に温帯ジャポニカであることが示されている。ただ、妻木晩田遺跡の報告書（佐藤 2000）には形質が温帯ジャポニカであるにもかかわらず、炭化米 DNA は熱帯ジャポニカであった例もあり、形質だけでははっきりとわからないものもある。

私たちが今回、実験水田で稲の栽培に使った稲の品種は古代米の緑米・黒米、赤米の豆靨と宝満である。緑米と黒米は、比較的新しい時期の米の品種だと考えられているが、今回は昨年度との比較から栽培した。赤米の対馬の豆靨と種子島の宝満は神社に奉納されてきた米であり古くから品種改良されていない。豆靨は温帯ジャポニカ、宝満は熱帯ジャポニカといわれており（岡山理科大学の那須浩郎氏よりご教示いただいた）、今回新たに栽培することにした。稲は野生種と栽培種があり、野生種はほぼ赤米であること（猪谷 2019）から弥生時代に赤米が作られていた可能性が高いと考えられる。

IV 実験水田とバケツ栽培

i) 実験水田（昨年度の研究成果）

（研究目的）

植え方の密度の違いにより、収穫量の違いについて調べる。農耕具の木製の鍬と鋤を使用した田起こしでの効果の違いについて調べる。

（研究方法）

2.5m×2m の4つの区画を作り、2種類の古代米（緑米・黒米）の苗を、密度を変えて植える。

（研究結果）

表1 実験水田の米の収穫量と1反あたりの想定収穫量

	5㎡	g (1株)	株(数)		kg	1反(1000㎡)	kg	籾の重さを引く	kg
緑米	普通	67	83	5561	5.561	×200	1112.2	×0.7	778.54
緑米	密	16	148	2368	2.368	×200	473.6	×0.7	331.52
黒米	普通	29	75	2175	2.175	×200	435.0	×0.7	304.50
黒米	密	10	151	1510	1.510	×200	302.0	×0.7	211.40

（考察）

実験水田の研究結果は表1の通りである。緑米は黒米に比べて1反あたりの収穫量が多かった。黒米では密度を2倍にした場合一株あたりの収穫量が3分の1になった。現在の1反あたりの米の収穫量は約500kgであり緑米の778kgはかなり高めに出ているが、それ以外では現在の収穫量の4～6割であった。ただ、一株あたりの収穫量は平均値を取ったものではなく任意に取った一株の収穫量なので、課題として今年度は1㎡あたりの収穫量を調査したいと考えている。木製の農耕具である鍬と鋤を使用した体験では、荒起こしをおこなったが地面が固く、鍬は有効に掘れたが、鋤は掘れなかった。鋤は地面が柔らかい場合は効果的であるが、地面が固い場合は突き刺さらないので今回のような場合は適して

いないと感じた。

ii) バケツ栽培（昨年度の研究成果）

（研究目的）

穂首刈りと根刈りで2番穂（ひこばえ）の収穫量の違いを調べる。これは石包丁の効果を検証するものである。また、一年中湛水させて稲穂から新しい芽が出るかどうか調べる。

（研究方法）

13ℓのバケツを8つ用意する。3種類の古代米（豆酏・宝満・緑米）と現代品種のあきたこまちの苗3株ずつ植える。水田の泥を10ℓ、腐葉土1ℓ。水をバケツいっぱい満たす。穂首刈りと根刈りの2種類の方法で刈る。

（研究結果）

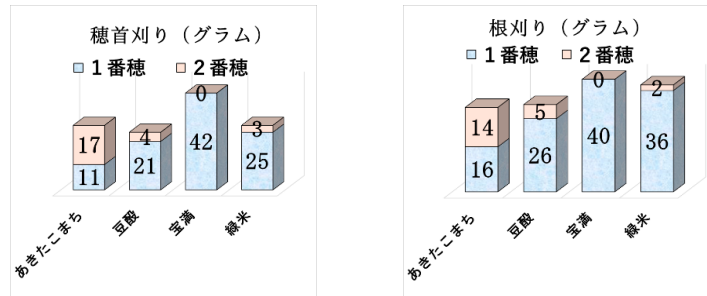


図1 穂首刈りと根刈りの1番穂・2番穂の収穫量

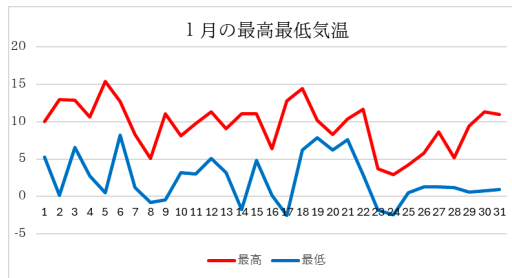


図2 1月の最高最低気温

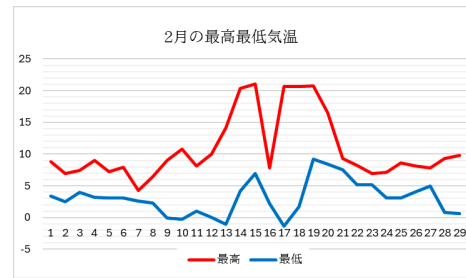


図3 2月の最高最低気温

（図2、3の最高最低気温についてはtenki.jp青谷（アオヤ）のアメダスを参照）

表2 宝満バケツ栽培 水温の変化

日付	1月26日	2月2日	2月8日	2月14日	2月15日	2月24日	2月27日	3月2日	3月7日	3月13日	3月21日
宝満バケツ水温（℃）	1.2	10.9	4.6	15.4	18.2	3.5	3.2	1.1	13.4	5.2	3.7

（考察）

図1にみるように、穂首刈りと根刈りの2番穂の収穫量は、あきたこまちで大きく差異が見られたが、豆酏と緑米ではそれほど大きな差は見られなかった。宝満は晩生であり2番穂がつかなかった。2番穂の収穫量は全体の割合からしても無視できない数値であると分かった。湛水させたバケツ栽培においては、ほぼ芽が出なかった。唯一、5月下旬に宝満の穂首刈りをしたバケツから一部芽が出た。冬期湛水で芽が出るかどうかは冬の気温と水温が大いに関わっていると考えられており（小川 2022）、私たちは11月から3月までの青谷町の気温を調べた。また、水温については毎日ではないが雪が降った日を中心として週に1～2日を記録した。記録した水温では、1月26日の1.2℃と3月2日の1.1℃でかなり低い数値であった。稲の再生ができる限界の水温かもしれない。



V 研究の成果と課題

1. 青谷上寺地遺跡の炭化米は、形質的には温帯ジャポニカであることが分かった。
2. 現在から遡り最も古いといわれている米は赤米であり、今年度は豆靨と宝満を実験水田で植えた。豆靨は温帯ジャポニカ、宝満は熱帯ジャポニカといわれている。
3. 実験水田では、一株あたりの収穫量を想定できたが平均値ではないため、差が大きかった。新しい実験水田では1㎡あたりの収量を求め、反当たりの収穫量を出したい。
4. バケツ栽培では、2番穂の収穫量は穂首刈りと根刈りでは大差はなかったが、今後も継続して調査を進め、石包丁の穂首刈りの有効性を検証していきたい。2番穂の収穫量は全体の量からしても無視できない数値であった。
5. バケツ栽培の冬期湛水では、穂首刈りをした宝満から新しい芽が出た。ただ、それ以外の品種では芽が出なかった。気温や水温とどう関係があるのか今後も調査したい。
6. 史跡公園内の新たな実験水田は、今まで約20年間耕作していなかった土地である。農薬と肥料を使用せず、赤米を栽培することで弥生時代の水田の実像に近づけるのではないかと期待している。新しい実験水田でどれくらいの収穫量が出るのか楽しみである。

(引用・参考文献)

- 猪谷富雄 2019「第3章 赤米・黒米・香り米 変わりものの品種たち」『日本のイネ品種考 木簡からDNAまで』佐藤洋一郎編 臨川書店
- 稲村達也・中尾雅晴・濱田竜彦・絹島歩・岡田憲一 2019「II 青谷上寺地遺跡から発掘された出土米ブロックに含まれる籾の外部形態のX線CT計測による評価」『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報2019』鳥取県とっとり弥生の王国推進課
- 小川誠 2022『稲の多年草化栽培 小規模自給農への新たな道』地湧の杜
- 佐藤洋一郎 2000「IV.妻木晩田遺跡出土イネ種子の分析」『妻木晩田遺跡発掘調査報告IV』大山町埋蔵文化財調査報告書第17集
- 佐藤洋一郎 2002『稲の日本史』角川ソフィア文庫
- 鳥取県埋蔵文化財センター2000『鳥取教育文化財団調査報告書67 青谷上寺地遺跡1』財団法人鳥取県教育文化財団
- 鳥取県埋蔵文化財センター2008『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告21 青谷上寺地遺跡9』鳥取県埋蔵文化財センター
- tenki.jp 青谷（アオヤ）のアメダス <https://tenki.jp/amedas/7/34/69041.html>

(謝辞)

本研究をおこなうにあたって以下の機関・個人により、ご指導やご協力をしていただきました。機関では、青谷かみじち史跡公園、青谷上寺地遺跡史跡保存協議会、個人では岡山理科大学の那須浩郎氏、青谷かみじち史跡公園の濱田竜彦氏、湯村功氏、河合章行氏、青谷上寺地遺跡史跡保存協議会の浅野博氏、ボランティアの方々にお世話になりました。現在も青谷かみじち史跡公園の援助のもとで水田づくりを行っている。記して感謝申し上げます。

※この研究は週に各2時間ある「青谷学II」「弥生文化探究」の授業で行っている内容である。

日光道中と一里塚

～史跡の状態に学ぶ道路の変遷～

栃木県立石橋高等学校歴史研究部

2024年6月28日

作成：有野 早瀬 小林 岡本 富樫 野村

1. 序論

私たちは以前に“江戸時代における下野市の物流”の研究で市内を通る旧日光道中が交通の要所であることを知った。その一方で、国指定史跡の小金井一里塚以外は、日光道中について多くを知らないことに気が付いた。そこで下野市内、延いては栃木県内の街道は現在どのような状況なのか。また、そもそも下野市内の旧日光道中の全容はどのようなものだったのか。これらの疑問を解決すべく、調査を始めた。

2. 本論

1). 日光道中と一里塚

元和3年(1617)徳川家康が日光東照宮に改葬された。それを受け幕府は日光道中を将軍や各大名の東照宮参拝の道として整備した、日本橋から日光東照宮まで約150km、38里の街道である。

また、街道と共に整備されたのが一里塚である。一里塚は慶長9年(1604)の家康公の命により、1里=3.92kmごとに目印として設けられた。『官本当代記』には“一里塚五間四方也”つまり一辺約9mの方形である¹と記されている。塚は道を挟むように設置され、保護のために頂上にはエノキやマツが植えられた。運送の賃金や旅人の目安として役立てられた。



▲小金井一里塚

2). 下野市内の一里塚

街道の研究に当たって、一里塚は大きな存在になると考え、先述の小金井一里塚について調査を行った。

小金井一里塚はその名の通り、栃木県下野市小金井4-23-9付近、国道4号線の傍に位置する一里塚である。江戸から22里の目安として設置され、日光道中の一里塚では唯一の国指定史跡である。東西両塚が風化こそしているものの現存し、広場として整備されている。

整備時の下野市教育委員会による発掘調査では、磁器類や寛永通宝などが発掘され、明治期に改修されたことが判明した。

¹ 下野市公式ホームページを含め、多くのWebサイトでこのように表記されているが、私たちの調査では、『官本当代記』がどのようなものかは分からなかった。なお、当代記は戦国～江戸時代初頭の政治・経済の動きを記したものである。著者は播磨国姫路藩主松平忠明と言われている。

その後、私たちの高校が位置する下野市内の一里塚についても調査を行った。調査は2023年10月～11月に、現地を訪れる形で行った。結果は以下の表のとおりである。

日光道中一里塚の現状【下野市内】 2023年調査

江戸から	名称	位置	現状	補足
22里	小金井	下野市小金井4-23-9付近 国道4号西側	両塚現存 広場	国指定史跡
23里	下石橋	下野市下石橋 (下野市薬師寺3324-10付近)	西塚現存 林中	看板あり
24里	下古山	下野市下古山123-3付近? ² それらしいものは全く見えず	消滅	指標なし

3). 日光道中の発展と消滅

ここで疑問が生じる。日光道中に設置された多くの一里塚は現在、その多くが消滅している。なぜ、江戸時代に活躍した一里塚は、廃れてしまったのだろうか。

私たちはその答えを探るべく調査を進める中で、とある点に気が付いた。現在の国道4号線は旧日光道中を改修したものとされている。しかし、調査を行った小金井一里塚をはじめとする多くの史跡は、国道4号線を挟む形ではなく、道から少し離れた場所に存在している。

その理由を調査したところ、日光道中が発展した点にとどり着いた。

明治期以降、日光道中(奥州道中)の性質は”日光社参の経路”から、”東京～東北、北海道をつなぐ道”へと変化した。それに伴い日光道中(宇都宮以南)は明治6年(1873)、“陸羽街道”と改称され、一級国道に指定³された。

しかし、陸羽街道は「細雨にも泥濘(ぬかり)」と評され、その状態はひどいものであった。そこで栃木県は明治7年(1884)陸羽街道を改修し、新陸羽街道として開通させた。その際、下石橋一里塚付近は、80cmの高低差があることから、高めの土地に移設したと考えられる。以上のことから、日光道中の一里塚の多くが消滅した理由は次のように考えられる。

4). 日光道中の一里塚についての考察

日光道中は明治期の改修により日本の大動脈となり、その後も国道4号線として現在まで栄え、その周辺の整備や近代化が進んでいった。この過程のなかで多くの史跡は、その姿を商業施設等に変えたのではないだろうか。

また下野市内では、道路の移設に伴い一里塚周辺に住む人々などは少なくなり⁴、結果として、小金井一里塚と下石橋一里塚が守られることになったのではないだろうか。

² Google Mapに掲載のもの。現地には、その痕跡は全くと言っていいほど残っていない。

³ 明治6年大蔵省布達「河港道路修築規則」による

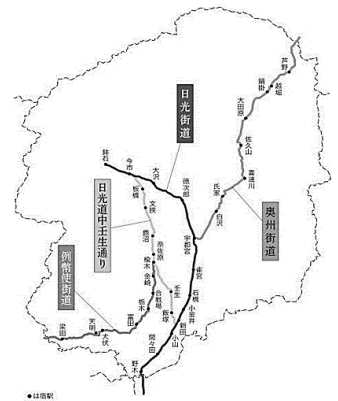
⁴ 実際、下石橋一里塚は保存会が整備するまで、消滅した一里塚と言われていた。

5). 日光道中壬生通り

さらに研究を深めるにあたって、当時日光道中の脇街道とされた、日光道中壬生通りについても調査を行った。日光道中壬生通りは、新田宿で本通りから別れ、壬生を經由し、日光へと至る全長約 47 km = 12 里の街道だ。

一般に脇街道と評されるものの、その成立は本街道⁵より古く、東照宮造営の際には資材を運ぶために利用されたともいわれている。

実際に、江戸期初期の日光社参においては盛んに壬生通りが利用され、3 泊目の宿泊地として、壬生城が利用されていた。



6). 壬生通りの一里塚

名称	指定区分
飯塚一里塚	市指定史跡
壬生一里塚	国指定史跡
稲葉一里塚	町指定史跡
小倉一里塚	日光杉並木の一部として、 国の特別史跡
板橋一里塚	
室瀬一里塚	

一里塚の造りや役割は、壬生通りにおいても日光道中と同様である。

日光道中喜沢追分に近い喜沢一里塚から、壬生通りでは全 11 か所中 9 か所の一里塚が現存し、日光道中に比べて現存する割合が高い。

また、左表のように多くの一里塚が国や県の指定史跡として保全されており、その数は県内では日光道中を上回る。

7). 壬生通りの衰退と現状

壬生通りは日光道中(宇都宮以北)に先駆けて整備され、その道のりは日光道中よりも短いものの、坂や川が多いものとなっている。

将軍の日光社参では帰路に使われることが多かったが、これは上り方面では下り坂が多いほか供物などを降ろした後ということも荷物が少なかったため、川を渡ることになったとしても、近道である壬生通りを使用することが好ましかったためだと思われる。実際、1663 年の四代将軍家綱公までは、復路は壬生通りを使用するのが通例であったようだ。

しかし、その後の 1728 年の八代将軍吉宗公の社参からは壬生通りを使用することは無かった。その理由は家継から吉宗の社参の間の 65 年のブランクにある。この間、複数回の飢饉などにより幕府の財政はひっ迫しており、豪勢な日光社参などを行う資金は無くなっていた。そのため、木造であり 65 年の間に老朽化が進んでいた、壬生城本丸や壬生通りの川に架かる橋を修復するだけの財源はなかったと推測される。そうして、経費削減の影響で壬生通りは使われなくなり、以降衰退の一途を辿ることになる。

以上のことから、壬生通りで一里塚が残った理由は、次のように考えられる。

8). 壬生通りについての考察

壬生通りは幕府の財政難によって使われなくなり、日本の主要な街道としての

⁵ 宇都宮を經由し日光へ向かう道のこと。以下、本街道及び日光道中はこれを指す。

地位を失ったことで衰退していった。そのため大規模な改修や整備が行われることがなく、結果として一里塚が放置され、現在まで残されたのではないだろうか。

3. 結論

江戸時代に将軍の日光社参に用いられた街道は、当初は日光道中と壬生通りの二つがあった。

このうち日光道中は、幕末まで日光社参で使われており、明治期に入ってから日本の一級国道として大規模な改修が行われた。この時の改修が現在の日光道中と国道4号線のずれに繋がる。国道4号線は主要な道路として発展・近代化し多くの史跡が姿を消したが、ずれてしまった日光道中では開発が行われず、衰退の中で一里塚が守られることとなった。

一方壬生通りでは、移動の負荷から当初は日光社参の帰路として栄えたが、幕府の財政難が原因で日光社参の経費も削られることとなり、壬生通りは使われなくなった。それにより主要な街道ではなくなり、以降は大規模な改修等は行われず衰退していく。そのため一里塚にも開発の手が伸びることはなく、その多くが現在に姿を残すことになった。

4. 今後に向けて

ここまで、日光道中や壬生通りには一里塚という重要な史跡が存在することを述べてきた。一里塚は、一里塚保存会など一部の地元有志によって、かろうじて保たれている。しかしながら、整備されていない一里塚、史跡に指定されていない一里塚があるという現状から、保存活動が活発とは言えない。

現在、私たちは一里塚保存会と協力し、地域のホールでの周知活動や史跡の清掃作業に参加している。今後もこの活動を続けるとともに、地域の施設への資料提供などの街道の歴史と現状についての周知に、より一層取り組んでいきたい。

【参考文献】

● 書籍

日光街道ルネッサンス 21 推進委員会. 栃木の日光街道-荘厳なる聖地への道-. 下野新聞社. 2003.

下野市教育委員会. 下野市埋蔵文化財調査報告第1集:小金井一里塚. 下野市教育委員会. 2006.

壬生町立歴史民俗資料館. 壬生城郭・城下町解説書. 壬生町教育委員会. 1995.3.

中島義一. 徳川将軍家御殿の歴史地理的考察-3-日光社参の場合. 駒澤地理/駒澤大学文学部地理学教室,駒澤大学総合教育研究部自然科学部門 編. (通号 15) 1979.03,p.p53~67.

竹内誠. 徳川幕府事典. 東京堂出版. 2003.

自治体史

栃木県史 石橋町史 南河内町史 国分寺町史 日光社参関係史料1 壬生町史 壬生町史 普及版 壬生の歴史(平成20年度改訂版)

Web ページ

旧日光街道の地図|旧街道モバイルマップ(gcy.jp)

小金井一里塚|下野市(shimotsuke.lg.jp)

迅速測図原図(フランス式彩色図)|古地図コレクション(gsi.go.jp)

《協力》

下野市日光街道一里塚保存会

栃木県立文書館

栃木県立図書館

栃木県立博物館

下野市立石橋図書館

壬生町立歴史民俗資料館

茨城と満蒙開拓

土浦日本大学高等学校 時事問題研究会

はじめに

本校時事問題研究会では、長野県阿智村に設立された満蒙開拓平和記念館を、開館以来毎年訪問し、研修を重ねてきた。近年は、長野県松川高等学校ボランティア部の方々の展示ガイドを受け、学びを深めている。満蒙開拓は、戦前の満洲移民であるが、終戦とともに引き揚げてきた人々は、新たな土地を求めて、日本各地へ再移住した。茨城県は、その移住先として最も多い地域であった。平坦な土地が広がり、戦後開拓事業として旧海軍施設が払い下げられたからである。戦後も続く満蒙開拓の歴史を、茨城の戦後開拓地を通じて考察した。

1 満蒙開拓と茨城県

満州事変後に試験的に満州（中国東北部）への移民が始まり、1936年、広田弘毅内閣が「満州農業移民100万戸移住計画」を国策として決定した。全国で約27万人が開拓団を編成して移民し、そのうち約8万人が亡くなったといわれる。茨城県内原には、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所があった。これは、1938年、満洲移民を推進するため、満14～18歳の青少年を対象に組織された満蒙開拓青少年義勇軍の育成機関であった。ここで3か月の訓練を経て、満州へ渡っていった。現在は、その地に日本国民高等学校という農業専門の専修学校がある。戦後の引き揚げと食糧難にともない、原住地に戻ることが難しかった人々は、日本国民高等学校のつながりなどから、茨城県内に入植・開拓が多く行われた。

2 茨城県内の戦後開拓地

戦後、茨城県には、全国の戦後開拓地の4.2%にあたる262か所が建設された。茨城県内の戦後開拓地は、関東ローム層におおわれた県中央部から県南部地域の洪積台地上に分布していた。全国の開拓地の多くが寒冷地や高冷地、地力の低い火山灰土壌の標高500m以下の比較的low標高の地域がほとんどであった。また、入植規模からみると、1～20戸の小規模な開拓地が197か所でもっとも多く、開拓地総数に占める割合は75%であった。一方、入植戸数100戸以上の大規模な開拓地は、霞ヶ浦に1か所、北浦に2か所の計3か所であった。

①つくば

西筑波陸軍飛行場跡に、戦後、緊急開拓事業の対象地区となり、現在のつくば市大穂地区の白水には、長野県佐久郡佐久町大日向などから24戸の農家が移住した。ここは、つくば市において芝の生産が初めて行われた場所である。戦後の大日向からは満州から引き揚げてきた人々を含め、長野県軽井沢町に入植して新たに大日向集落を形成した人々と、白水開拓に入植した人々がいた。入植当初は、サツマイモ・落花生・陸稲や麦類の栽培を試みたが、土地が痩せており、十分な収穫が得られなかった。そこで、少しでも現金収入を得るため、現在の茨城緑化（茎崎町）と契約し、自生していたノシバを採取して出荷した。1957年からのゴルフブームに乗り、芝の需要は増加した。1960年には、同飛行場跡地の南作谷地区でも芝の栽培が始まった。1969年ころから始まった第2次ゴルフブームに乗り、土地条件の似た他の集落でも芝の栽培が行われるようになった。1980年代には、第3次ゴルフブームとともに、米よりも収益の高い作物として再び注目



されるようになった。現在、芝栽培は、つくば市の作物収穫・栽培面積のうち26.7%を占めている（1988年）。畑作物の収穫・栽培面積に限れば、およそ2分の1を芝の栽培が占める。資料「茨城県の芝栽培」

令和3年度 茨城県の品目別産出額順位

全国第1位	13品目	鶏卵, かんしょ, メロン, ピーマン, れんこん, ほしいも, みずな, こまつな, 切り枝, チンゲンサイ, 芝, くり, せり
全国第2位	5品目	レタス, はくさい, みつば, らっかせい, 日本なし
全国第3位	10品目	ねぎ, にら, スイートコーン, もやし, マッシュルーム, みょうが, こんにゃく, ほうれんそう, しそ, そらまめ

出典 茨城県農林水産部『茨城県農林水産業の概況』令和5年6月, 10頁。

②阿見

掩体壕は、引揚げ開拓者の戦後生活史を物語る遺跡である。空襲時に軍用機を画するシェルターとして、戦争期に各地の飛行場に建てられた、かまぼこ型のコンクリート製建築物である。戦後は、農機具庫や倉庫として利用された。

阿見町には民家の敷地内に一つの掩体壕が残されており、町指定文化財となっている。旧海軍霞ヶ浦航空隊跡地が開拓地として払い下げられた土地の一面である。鉄筋コンクリート造りの有蓋掩体壕21基、土手を築いただけの無蓋掩体壕が約80基建造され、現在は有蓋掩体壕1基、無蓋掩体壕2基の遺構が残っている。現存する有蓋掩体壕は零式艦上戦闘機用掩体壕とよばれ、開口部約14メートル、前面幅約22メートルで、民有地に残されている。

③土浦

土浦市は霞ヶ浦沿岸と筑波山麓に連なる北部の都和地区が開拓地として、長野県からの再定住者が入植した。水はけが悪く、稲作には不適な土地が多く、開拓農協が設立されて果樹栽培や酪農が営まれた。

本校周辺の中村・右舂地区には、戦後、海外からの引揚者の寮および住宅が建設され、「土浦引揚寮」には約800世帯3500人が居住した。同地区は、茨城県が同胞援護会に管理を委託する形で運営され、授産所や保育所を開設、陳情の努力が重ねられ、引揚者らの生活環境が次第に整えられた。

④水戸

満蒙開拓青少年義勇軍に応募すると、まずは日本国内の内地訓練所で2ヵ月（のち3ヵ月に延長）の訓練を受け、満州に渡ってから現地で3年の訓練を受けることになる。すべての訓練を修了すると、既存の集団移民に「義勇隊開拓団」として編入された。国内で最初の内地訓練所が、東茨城郡下中妻村内原（水戸市）の内原訓練所だ。45.6ヘクタールの敷地内には、「日輪兵舎」と呼ばれる建物が多数建設されていた。日輪兵舎とは、南信（フランク・ロイド・ライトの弟子）に師事したことがある古賀弘人が、満州開拓の際の住居兼防衛拠点として考案した建築物

のことである。円筒形の外壁に円錐形の屋根がのる構造で、その形状と日本国旗の連想から「日輪」の名がつけられた。建物内部には中心に1本の柱が立ち、傘のように放射状に材が広がって、円錐形の屋根を形成している。非常に簡素なつくりで、40~60人程度の素人の少年であっても、1日がかかりで1棟を建てることができたという。訓練所では訓練生の寄宿舎兼教室として用いられ、1棟あたり60人程度が寝起きをともした。内原訓練と同様の拓殖訓練施設が日本各地に設置されるとともに、日輪兵舎も広まった。日輪兵舎の多くは拓殖訓練のためにつくられたが、大人数を収容できるという特長を生かし、火災からの復興作業のため集まった職人用などにつくられた例もある。そして、当初の目的とおおり、満州でも日輪兵舎が建設されたという記録が残る。1938(昭和13)年から1945(昭和20)年までのあいだに、8万6530名もの訓練生が内原から満州へと渡った。その多くは満州で終戦を迎え、ソビエト軍の侵攻を受けシベアに抑留された。終戦後間もなくして、内原訓練所は閉鎖。日本各地の日輪兵舎の一部は、小中学校の教室代わりや地域の寄り合いの場としてしばらく活用された。現在、内原訓練所跡地には碑文と復元された日輪兵舎が立ち、戦時の様子を現代に伝えている。

『内原町史』によれば、満蒙開拓青少年義勇訓練所河和田分所は、1939(昭和14)年、第1次訓練生募集(1938年)に予定を越える応募者があり、内原訓練所が手狭になったことや、農場の確保のために開設された。内原訓練所の東南4キロ、東茨城郡河和田村にある国有林であった。当地は、内原訓練所と有線がつながることが可能であり、常磐線赤塚駅からも4キロほどで、比較的交通の便がよかった。三河和田分所では、開設と同時に進幹一部の養成訓練が行われたほか、結核など長期休養が必要な訓練生には回復訓練が行われた。

道(茨城県道30号水戸岩間線)北側一帯には大規模な義勇軍農場が開設された。ここでは、水稲・陸稲・トウモロコシ 大豆 馬鈴薯・甘藷・ナス・トマト・南瓜・人参・大根・ネギなど、多くの作物を栽培し、訓練生の食事にあてた。さらに、戦争末期には食糧難対策に、ここで生産した苗を関東・東北地方に出荷した。現在は河和田分所を物語る施設は皆無である。しかし、1992年、水戸市教育委員会により「義勇軍訓練所跡」の石碑が建立された。当時、日輪兵舎が立ち並んでいた土地は荒地となっているが、区画などに当時の面影をわずかに残している。また、農場の多くはそのまま農地となり残っている。

⑤守谷

終戦後、命からがら帰国した開拓民の多くは離散してしまったが、改めて国内で入植先を探し、協同体を維持した団体もあった。その一つが「大八洲(おおやしま)開拓団」である。満洲から逃げ出す時、移民先で召集がかかっていた多くの男性団員は、行き先も生死もわからない状況にあった。当時、団長も抑留されており、団長から指名された者が指導者となって、残された女性や子供たちを引き連れて帰国の途についた。どん底の逃避行のなかでその6割を亡くしながら、生き残った一行70名は昭和21年9月9日、佐世保港に上陸した。行方不明者が戻ってきても受け入れができるよう、1カ所で少なくとも80戸が、まとまって入植できる新天地を見つけたい。その難しい条件を決して諦めず、団員の多くの出身地である山形県ではなく、同年11月より菅生村(現守谷市)に入植。満洲で果たせなかった、百姓で身を立てるという夢に向かって再生させたのが、現在の大八洲開拓農業協同組合だ。利根川と鬼怒川の合流点に近い三角州などで、大規模農業を営んでいる。



3 現代の課題

戦後開拓地に入植した方々の多くは鬼籍に入り、開拓地の様子は大きく変化している。現代に生きる私たちが満蒙開拓の歴史を考えるにあたって重要だと思うことを二点指摘したい。

一つは、残留邦人2世・3世の問題である。終戦直後に引き揚げられた人々は、開拓地に入植して生活の礎を築けた場合もある。しかし、引き揚げが困難であった人びとは、別の困難があった。中国人の養父母に養われたり、中国人と結婚することで、中国に家庭を築いた人々である。子や孫の代になって帰国を果たした人々は、そのルーツをどのように受け止めればよいのか、あるいは我々はどのように受け止めればよいのかという課題がある。中国にルーツをもつという事実をカミングアウトした方々のお話を伺い、外国人に対して残る差別意識や偏見という課題を考えていきたい。(中国残留邦人等への理解を深める集い in 茨城 <https://www.sien-center.or.jp/fukyukeihatu/2023-ibaraki.pdf>)

もう一つは、証言記録を語り継ぐ意味を問う必要である。長野県は最も多くの満蒙開拓団を送り出した県である。戦後開拓で茨城県とも関係が深い。私たちは、毎年、長野県松川高等学校ボランティア部の生徒の皆さんに、展示ガイドをしていただいて理解を深めてきた。また、飯田市が主催する平和ゼミナールに参加し、さまざまな年齢の方々と満蒙開拓や戦争に関する話し合いを行い、多様な意見を交わす機会を得た。直接戦争を知らない世代が、満蒙開拓の証言記録をどのように語り継ぐべきなのかを考えていきたい。

おわりに

長野県を中心に30万人以上の日本人が満州へ移民した歴史は、終戦によって終わるものではない。戦後の引き揚げ後も土地の確保に苦しみ、長野県から茨城県には多くの開拓民が入植した。平地が多く、農業が盛んであった茨城には、旧海軍の基地が多く、点在しており、土地の多くが開拓地として払い下げられた。満蒙開拓の歴史は、戦争によって終わるのではなく、戦後も茨城では続いている。

参考文献

- ①清水亮『「軍都」を生きる 霞ヶ浦の生活史 1919-1968』岩波書店、2023年。
- ②伊藤純郎編『フィールドワーク 茨城県の戦争遺跡』平和文化、2008年。
- ③小野寺・森本・上木原「つくば市を中心とした芝栽培の地域的展開」(筑波大学地球科学系人文地理学研究グループ『地域調査報告』14, 1992年)。
- ④北崎幸之助「日本国民高等学校の農業教育と戦後開拓地」
- ⑤清水康史『茨城のトリセツ』昭文社 2021年
- ⑥万農王国いばらき <https://www.bannou.biz/topics01/tl-south/post-2488.html>
- ⑦満蒙開拓平和記念館「全開拓団データ一覧表」<https://www.manmoukinenkan.com/data/>

満洲国鉄嶺市の生活史

～語りからわかる満洲のようす～

千葉県立木更津高等学校

遠藤 誠士 鈴木 耀一郎 遠山 拓 小間 美鈴

1. はじめに

この研究は、個人の語りから満洲国鉄嶺市における生活実態を明らかにしようとしたものである。

2023年7月、夏休みの課題として、個人の人生の語りを集めた『沖縄の生活史』という本から一人の語りを抜粋し、語り手の略歴をまとめるレポートを作成した。(参考文献①)そこから発表者の一人が、自分でも生活史の聞き取りを行ってみたいと考えたことがきっかけとなり、満洲国に暮らした経験を持つ近親者(以下「K氏」)への聞き取りを行った。満洲国とは、日本によって1932年に建国され1945年まで存在した現在では消滅してしまった国である。このように現在は存在しない国において人々がどのように暮らしたのかを知るためには、実際に暮らした人物の証言が重要だと考えた。そのため、2023年8月～9月にかけてK氏にインタビューを行った結果をもとに「満洲国における人々の生活はどのようなものだったか」というテーマで語りをまとめることにした。

資料は、K氏に対してのインタビュー計3回(約3時間)、K氏による手記、満洲国に関する先行する語りの文献、当時出版された満洲に関する文献とした。それぞれの調査資料を比較検討する形で調査を進めた。

資料の分析方法として、まず3回行ったインタビューを全て文字に起こし、語りの全文を内容ごとのまとまりに分類した。ここから分類した語りを他の文献と比較、個人の語りと歴史的事象の繋がりを検討し、個人の語りから明らかになったことを考察した。

2. 満洲国に渡った日本人についての概略

1931年9月に満鉄線路爆破事件(柳条湖事件)がおきると、関東軍はこれを中国側の仕業だと発表して、満洲各地を占領した(満洲事変)。このことを契機として関東軍は1932年3月、清朝最後の皇帝であった溥儀を執政として満洲国を建国した。名目上は独立国であったが、軍事・外交を始め、主要な権限を日本の軍人や官吏が握っていた。それは事実上、日本の傀儡国家であった。

満洲に渡った人々に関する書籍として、日本から満洲に渡った移住者や開拓団の手記、終戦時の引き揚げに関するものなどがある。(参考文献②③④)当時、日本人が満洲に渡った理由は様々で、その例としてロシアの鉄道建設に関わる移住、軍人を相手に職を得ようとした移住などが挙げられる。文献からは、戦前の人々にとって近隣住民の満洲への移住が珍しいことではなかったことがわかる。しかし、満洲に渡って帰ってこなかった家族がいるという記述もあり、満洲への移住は決して楽なものではなかったことが伺える。特に、終戦時の引き揚げに関しては、暴力の恐怖に晒されながらの帰還となり、様々な問題を後

世に残した。この他にも、中国「残留」孤児問題、残留婦人問題、強制移住者、現地において東亜勸業、満洲拓殖公社などに土地を奪われた人々、満洲国（日本）に協力したことで戦後に中国内から迫害された人々など、満洲国は数多くの問題を現在に残している。

しかし、本研究の対象者である K 氏が暮らした鉄嶺に焦点を当てたものや、引き揚げ以前の生活実態に関する書籍は多くない。そのため、本研究では鉄嶺という地域に限定し、子どもから見た満洲国での生活のようすを明らかにすることに焦点を絞ることにした。

3. 聞き取り対象者の経歴

K 氏は、幼少期に満洲で過ごした経験のある現在 88 歳の男性である。医師であった対象者の父親の勤務の関係で満洲国の鉄嶺で暮らしていた。終戦時に引き揚げ船にて日本に帰国し、その後は岡山県で過ごし東京の大学を卒業、企業に就職し、退職して現在に至っている。

和暦	西暦	年齢	略歴
昭和10年	1935年	0歳	広島県で生まれる。岡山県で過ごす
昭和15年	1940年	5歳	満洲国鉄嶺市に渡る 鉄嶺郊外の松山背の官舎で過ごす
昭和16年	1941年	6歳	小学校に入学するため鉄嶺市内の官舎に祖父と市内に転居
昭和17年	1942年	6歳6か月	鉄嶺尋常高等小学校に入学
昭和20年	1945年	10歳	終戦
昭和21年	1946年	11歳	日本に帰国 鉄嶺駅より貨車でコロ島へ行きLSTで長崎県佐世保港に到着し岡山へ列車で帰郷。帰国後5年生の2学期に編入 岡山の高校を卒業後、東京の大学に進学、その後某鉄鋼会社に入社
平成8年	1998年	63歳	退職
令和5年	2023年	88歳	現在

↑ K 氏の略歴

K 氏は 1935 年に広島県で生まれ、5 歳で満洲国に家族で渡った。10 歳で終戦を

迎えている。また、K 氏が満洲に渡ったのは、1940 年に長期化する戦争に対応するため満洲国国家総動員令が公布された時期と重なっている。

このことなどから、インタビューに先立って戦前戦中の海外での生活は大変厳しいものだったのではないかと、日本の実質的な植民地として満洲国は存在していたため、現地の中国人との関係はよくなかったのではないかなどの仮説を立て、インタビューに臨んだ。

4. 語りと資料の分析結果

K 氏のインタビュー全文を分類すると主に以下の 5 つの観点に分類することができた。

① 満洲国鉄嶺市について

官舎から龍首山のほうに行くと、中国人街があつていろいろなものを売つていた。特に覚えてるのは、タンホーローという赤いサンザシの実を飴で包んだものを串刺しにしたお菓子や、豚饅頭（餃子）などで、豚饅頭はととてもとても美味しかった。それからショートケーキを売っている店もあった。

K 氏は鉄嶺について、山登りや食べ物を買に行つた思い出を中心に語っている。語りからは子どもにとって街で売っているものが非常に魅力的であつたことが伺える。さらに、K 氏が在学した小学校の記念論文集にも、人口は少ないが、街全体が大きな家族のような雰囲気を持つていたこと、満洲という土地の広さを活かした街となつていて、日本よりも解放感があるということが記載されている。日本とは異なつた街並みであつたが、肯定的な意見が多いことが読み取れた。

さらに、1934 年に出版された満洲の各地方についての報告書（参考文献⑤）には、南満洲鉄道の鉄道付属地して開発されていったこと、綿布の生産が盛んな都市であることが記載されている。このことから鉄嶺は商業都市として発展していったと考えられる。

② 中国人との関わりについて

(中国人との会話に関する質問に対して)言語じゃないんだよな。向こうは日本語できないし、僕も中国語できないから、なんかジェスチャーとか何とかでやり取りしてたんじゃないのかなー。でもとにかく遊べるんだよね。

文献調査では日本人が一方的に中国人に差別的な印象を持っていたと書かれていたものもあったが(参考文献⑥)、K氏が幼少期であったからか、語りからは差別の状況を感じさせるものはなかった。言語は通じなかったが、ジェスチャーを使って意思疎通を取り、コミュニケーションをとっていたことがわかる。

③ 満洲の気候・風土について

それより一番心に焼き付いてるのはね、見渡す限り平野なんだよね。龍首山って小さな山があったけど、それ以外は全部平野にコーリャンが植えてるわけ。中国の人がね。コーリャン畑のはるか水平線から朝日が昇って、そしてだーっと夕方になったらまた、地平線に夕日が沈むの。もうすごい見渡す限り、平野。それが僕は印象的だったよ。

満洲の気候はかなり寒く、K氏は小学校でスケートが出来たと述べたりもしているが、子どもの目に何よりも印象的だったのは日本と違い、どこまでも広がる大地だったようである。この風景はK氏にとって強く印象づけられている。

④ 鉄嶺小学校について

不思議なことに最初に登校した時のことはまだ覚えている。薄暗い下駄箱に靴を入れて教室に入ると、担任の先生はT先生という女性の先生だった。黒板の前で先生が、『1たす1は?』と生徒に質問した。みんな口々に『はい、2です』と言っていたが、僕は、『はてなんのことだろう?』と考えていた。他の子どもたちは幼稚園に通っていたのでそんなことは常識だったらしい。

鉄嶺小学校は満洲国建国以前から南満洲鉄道によって経営されていた学校だった。幼稚園が併設され、学習レベルが高く、日本に帰ってきたあとに編入した岡山県の学校よりも遥かに教育において優れていたとK氏は述べていた。文献調査によると満洲では学校が三種類あり、関東都督府が管轄する関東州の学校、南満洲鉄道が管轄する満鉄附属地の学校、領事館が管轄する開放地の学校が存在していた。(参考文献⑥)この中でK氏は満鉄経営の学校に通っており、他の学校より先進的な内容を取り入れていたといえるかもしれない。

⑤ 終戦時の満洲について

一番大変だったことはやっぱりね、終戦になってさ、うん。終戦になって、苦勞したこと、うん。ロシア兵、いやソ連兵がさ、うちに入ってきたときが怖かった。それはやっぱり無事に日本に帰ってこれるまでが一番大変だったよ、でもね無事に帰ってくれたから、親に感謝してるよ。

K氏は、終戦時の満洲における苦勞について語っている。特に、満洲からの引き上げには大きな困難があったようで、ソ連兵からの略奪など、暴力を目撃することもあった。住んでいた場所にソ連兵が攻め込み乱暴を働いたり、中国人によって官舎の近隣に住んでい

た元刑務所長の人が銃殺されたり、暴動を起こし略奪したりすることもあった。その後も戦闘機に襲撃されたりしたが、終戦から約一年後、語り手は日本に帰ることが出来た。他の文献からもわかるとおり、満洲国が滅びたあとにソ連軍が攻め込み、多くの命が失われることになった。

5. 語りに関する評価と結論

K氏の語りからは満洲での生活について、次のようなことがわかった。満洲から帰国する際は、他の文献で書かれているように、非常に多くの苦労があったが、満洲での生活については、私たちが想像していたよりも明るい内容が多くあった。さらに、満洲での教育内容については、当時としては先進的な内容が行われていた。

現在では満洲国に関して二つの立場がある。一つには、傀儡国家として満洲国を評価する立場だ。これは満洲に住む中国の人々に主体性がなく、満洲国の支配を実質的に日本人が独占していたことを根拠としている。もう一つは、満洲国を理想国家として捉える立場だ、これは満洲国をユートピア実現の試みとして民族協和、王道楽土を実現しようとしたと捉えるものである。(参考文献⑦) 上記を踏まえ、この結果をどのように解釈したらいいだろうか。

満洲国を傀儡国家として評価する考えと理想国家として評価する考えがあり、論争となっているが、今回のK氏の語りを根拠にどちらかに結論づけることはできないと考える。それよりもK氏の語りからは子どもたちの満洲での生活の実態が伝わってくる。ここから、一般の人々は、戦争が行われていたり、慣れない外地で暮らしていかなければならない状況であっても、日々の生活を楽しむ工夫をしたり、子どもの幸せのために精一杯の暮らしを行っていく意思があったのだということを今回の結論にした。また、今後の展望について、今回の調査は、医師の息子であったK氏の立場から明らかになったことで、当時満洲の移民は33万人もの数がいたため、さまざまな社会階層から調査を進めていく必要がある。

インタビュー以外の調査資料

- ・『鉄嶺小学校記念文集』1976（卒業生が書いた文章が掲載されている）
- ・満洲国大同学院満洲国地方事情編纂会編『満洲国地方事情第1巻(概説篇)』,大同印書館1934（当時の満洲国の地方事情について書かれた書籍）
- ・西嶋東洲『大満洲国事情,』地歴教育研究会,1933（小学生の教育用に出版された書籍）

主な参考文献

- ①岸政彦編『沖縄の生活史』みすず書房 2023
- ②坂本龍彦『孫に語り伝える「満洲」』岩波ジュニア新書 1998
- ③澤地久枝『14歳「フォーティーン」：満洲開拓村からの帰還』集英社新書 2015
- ④二松啓紀『移民たちの「満洲」：満蒙開拓団の虚と実』平凡社新書 2015
- ⑤満洲国大同学院満洲国地方事情編纂会編『満洲国地方事情第1巻(概説篇)』大同印書館1934
- ⑥塚瀬進『満洲の日本人』吉川弘文館 2004
- ⑦山室信一『キメラ：満洲国の肖像』中公新書 1993

野戦重砲兵連隊と三島

日本大学三島高等学校
地理・歴史部

赤池諒 浦田剛 内田裕之 内海瑛太 堤彰人

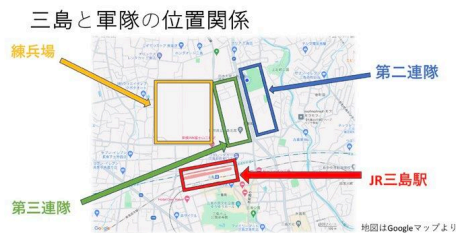
1 はじめに

かつて三島に存在した野戦重砲兵連隊という旧日本陸軍の部隊についてご存知だろうか？

三島には軍隊のイメージは無いかもしれないが、意外にも軍隊が三島の街に移設してきたことにより三島は軍都となり発展を遂げてきた。そもそも野戦重砲兵とは一体何なんだろうか？

2 三島重砲兵連隊

上記のマップで色が囲まれている場所が当時野戦重砲兵が位置していた場所だ。青色で囲まれているのが横須賀から移転してきた野戦重砲兵第二連隊だ。1919年11月に三島に移転してきた。一方緑色で囲まれているのは和歌山から移転してきたのは野戦重砲兵第三連隊だ。こちらは第二連隊が移転した翌年1920年11月に三島に移転した。



また、黄色は練兵場で演習をする際に使用していた。こうしてみると多くの土地が連隊に使用されていた事が分かる。

3 調べたきっかけ

野戦重砲兵連隊をなぜ調べるに至ったかと言うと、私たちが通っている日大三島高校が旧陸軍の跡地に建てられたことを知ったのがきっかけだった。そこからここに駐屯していた軍隊が戦地でどのような作戦に参加し活躍したのか、また軍隊が三島に来たことにより、三島の街にどのような影響を与えたのか、なぜ三島に軍隊が移転してきたのか、そして戦後その連隊の土地はどうなっていったのかと、このような疑問や興味が湧き、今回調べるに至った。





4 三島の野戦重砲兵連隊の活躍

三島の野戦重砲兵の初陣となったのは上海事変だった。第二連隊の1個大隊が江湾鎮、白楊村に出動した。第三連隊は日中戦争前夜天津へ派遣された。そして日中・太平洋戦争へ参加することになる。

三島の野戦重砲兵は南京攻略戦やマレー作戦など有名な戦いに参戦することになる。しかしガダルカナル作戦では、三島の野戦重砲兵第二連隊の1500名の内855名の戦病死者を出す戦いとなった。

インパール作戦では、野戦重砲兵第三連隊が1944年3月タムやテクノパールという場所に攻撃するも敵の反撃も激しく、雨季の到来もあったため、戦線は膠着し、七月より撤退行動に移った。最終的な戦死者は884人と多大な死者を出した。

5 陸軍が三島に移転したわけ

そんな戦いを繰り広げた連隊だが、なぜ三島という地に軍隊が移転してきたのだろうか。三島の街の歴史を紐解いていくとその理由が見えてくる。

江戸時代末期まで、三島は東海道11番目の宿場町であった。当時、70軒から80軒の旅籠があり、街は栄えていた。しかし1889年、現在の御殿場線である東海道本線が三島を避けて開通したことにより、三島は宿場町時代の活気を失ってしまった。そこで、町おこしとして軍隊の誘致運動が盛んに行われた。人々は、生産作物の大量買い上げなど軍隊が来ることによる経済的な利益を期待したのだ。

6 陸軍が三島に与えた影響

このようにして、野戦重砲兵第一旅団が移転した。加えて、国立病院である三島衛戍病院も開設した。また、道路も整備され交通事情も改善された。一方、現在の日大通りには、桜と銀杏が植えられた。しかし桜は寿命が短いため、現存するのは銀杏のみである。街には軍人相手の店が増加し、多くの商店、飲食店、娯楽施設が数千の軍人とその家族により利用され繁栄した。その後、1934年には熱海経由のルート of 東海道本線が開業し、三島駅も設置され、街は以前の活気を取り戻した。

7 沼津・三島における空襲の歴史

我々は調査を進めていくうちに三島には大きな空襲が無かったことが分かった。ではなぜ三島には軍隊が来たにも関わらず大きな空襲が無かったのかとなりの沼津市と比較してみることにした。

沼津市では日中戦争の長期化よりの産業構造に大きな変化をもたらし、それまでの繊維関係工場に加え、重工業部門の工場が進出した。そして、それらの工場は、戦争の激化とともに軍需工場に指定された。軍需工場が集中したため、沼津市はアメリカ軍の中小地方都市空襲の標的となり、7月17日未明「沼津大空襲」と称される空襲があった。

一方、三島では野戦重砲兵連隊が三島に移転してきた後、軍需品を製造する中島飛行機、電業社、明治ゴム、共立水産などの工場が進出した。庶民の生活必需品も戦況の悪化に伴いだんだん欠乏してきたが、三島は農村地帯だったので比較的食糧事情はよかったそうだった。

1945年になると、アメリカ軍による空襲によって空襲警報が鳴り響くこともあり、市内数カ所で機銃掃射、市外の水田に焼夷弾の落下などがあったが、大きな空襲は受けずにすんだ。これはおそらく沼津の軍事工場の方がアメリカ軍にとって優先すべき目標だったためだと考えられる。

8 三島の戦後

第二次世界大戦終結後第二連隊基地跡地は日本大学や三島市立第二中学校(現三島市立北中学校)が設置された。また、日本大学のキャンパス内には1958年に私たちが通ってる日本大学三島高校が設立された。

第三連隊基地跡地は1949年に三島市立北小学校が設置され、後に北幼稚園も開園した。また、1957年には静岡県立三島第一高校(現県立三島北高校)が移転した。

かつて軍隊の街だった文教町は、現在、教育の街に変貌を遂げた。しかし、両連隊基地の痕跡が全く残っていないわけではない。野戦重砲兵第二連隊は私たちの日大三島のキャンパスに将校集会所が移築されていた。また、立哨小屋という守衛の待機場所が三島北中学校正門前に石碑と共に残されていた。

第三連隊の痕跡は、三島北幼稚園正門前に第三連隊正門跡と立哨小屋、石碑が残されていた。そして両連隊が移転してきた際に植えられた銀杏並木の葉は今でも美しく色をつけている



9 さいごに

改めて野戦重砲兵連隊が三島に移転してきたことによって宿場町時代の活気が失われ、寂れてしまった三島が軍都として生まれ変わり商店や飲食店などの施設が多く利用され、また交通事情の改善など三島の発展に貢献した。そして戦後連隊の跡地の多くが学校に転用されたということから我々は今の三島を形作っているのは連隊の移転がその一因ではないかと考えた。

しかし、今回我々が調べたのはまだほんの一部に過ぎない。今後もこの三島と軍隊の関係について深掘りし、新たな事実や関係を発見していきたいと思う。



参考文献

『三島と戦争 終戦 50 年企画展』三島市郷土館／編

『三島にも戦争があった 2』三島市平和委員会／編

『三島市談』(中巻)

『沼津市談』(中巻)

沼津市ホームページ

三島市観光 Web

総務省ホームページ

Wikipedia

重砲兵連隊の跡

野戦重砲兵第二連隊:第三連隊

伊豆山権現の繁栄と衰退

～伊豆山権現の歴史と、復興への道を探る～

サレジオ学院高等学校 文芸部歴史班
3年 角田北穂 2年 山川丈人

第一章 プロローグ

僕が所属する文芸部歴史班では、有志で研究を行うことがある。先輩の研究である「相模大山の神仏分離」という研究を見て僕は山岳信仰に興味を持ち、身近なものを調べてみると、小さい頃から親しんでいた、地元の「伊豆山神社」という小さな神社が、昔は「伊豆山権現」と呼ばれた、巨大な山岳信仰地帯であったということを知った。しかし、現在では繁栄を感じられず、地元民であった僕ですら知らないほど衰えていた。今回、伊豆山権現の繁栄の歴史と衰退の過程、また、復興への道を考察していく。

第二章 伊豆山権現繁栄の歴史

まずは伊豆山権現繁栄の歴史について説明していく。開基の時期には諸説が有り、走湯山によって編纂された「走湯山縁起」によれば、594年に走湯権現の神号を賜り、699年に、修験道の開祖である役小角が走湯温泉を開拓したとされているが歴史資料としての信憑性は薄いため、疑問は残る。確実な歴史資料で初めて出てくるのは、平安時代の延喜式神名帳で、「火牟須比命神社」と記されているのが、伊豆山権現とする説がある。経塚の遺跡も伊豆山から見つかっており、少なくとも平安時代から温泉霊場として信仰されていたと考えられ、非常に古い歴史があることが分かる。

奈良時代や平安時代には、伊豆山についての歌が多く詠まれた。万葉集に「伊豆の高嶺」と詠んだ歌があり、これは伊豆山のことだと言われている。また梁塵秘抄には、静岡の富士山や鳥取の大山など7つの霊験所とともに、全国の高名な霊験所として「走り湯」と挙げられており、伊豆山の繁栄と高名さが伺える。さらに、伊豆山権現境内にある「ここの森」も古代から和歌に多く詠まれた。枕草子や拾遺和歌集には清原元輔や、藤原顕光という高名な人物が詠んだ歌が収録されていて、古来から伊豆山が全国に知られていたことが伺える。また伊豆山は、湯が「出ず」ということから、「伊豆」の地名の由来とする説もある。

さらに、伊豆山権現は源頼朝にも深い関わりがある。頼朝が伊豆で旗揚げした際、伊豆山権現は頼朝に兵を貸したり、北条政子を匿うなどの協力をし、恩賞として荘園を与えられたそうだ。つまり、伊豆山権現が頼朝の旗揚げに協力をしたと言える。このことから、伊豆山権現は熱海全体を支配するような巨大な勢力だったことが伺える。また、伊豆山権現は箱根権現とともに頼朝など鎌倉幕府の将軍が行列を以て参詣する二所詣が鎌倉時代に何度も行われ、「関八州総鎮護」と謳われ鎌倉時代から室町時代にかけて大いに繁栄した。

しかし、豊臣秀吉による小田原征伐で伊豆山権現は北条氏に味方し、加藤清正らに包囲され一山炎上した。また荘園制を否定して寺社勢力に打撃を与えた太閤検地により伊豆山権現も力を失った。戦国時代のこの2つの打撃で非常に困難な状況に陥った伊豆山権現だが、その後熱海を湯治場として愛した徳川家康によって再建され繁栄を取り戻し、伊豆山権現も多くの参拝客が訪れた。伊豆山権現の伊豆修験の活動も行われ、伊豆山権現を出発して伊豆半島を一周して戻ってくる、「伊豆峯の遍路」という修行が行われ、修験者も伊豆山権現の布教に大きく貢献した。

このように伊豆山権現は江戸時代まで大いに栄えた、長い歴史と由緒を持つ巨大霊場であった。では、それがなぜ現代では衰退してしまったのか。次章では、明治時代以降の衰退の歴史について説明していく。

第三章 伊豆山権現の衰退の過程

・神仏習合、神仏分離令について

伊豆山の山岳信仰は、伊豆山権現と伊豆修験の大きなふたつの要素がある。右の像は、伊豆山権現の御神体、木造伊豆山権現立像である。この像には面白い特徴があり、宝鉢を持つ神像でありながら、袈裟をかけ、数珠を持つ僧侶の格好をしている。また「権現」という名前は、神が仏が権（かり）に姿を変えこの世に現れたものであるという思想、「本地垂迹説」に基づき、姿を変えた仏のことを指す。このように伊豆山の山岳信仰の形態は、神仏習合であることがわかる。



ところが、明治政府が樹立すると、政府は神道を国教化するため、神仏分離令が発令した。これにより神社は寺院からの独立を強要され、廃仏毀釈が全国で行われ、多くの寺院・仏像などが破壊された。伊豆山権現もその打撃を受け、神仏混淆である修験道は廃止、伊豆山権現は「伊豆山神社」への社号の変更が強制され、また仏教的要素の強いものの破却が行われた。別当坊であった般若院だけが破却を免れたので、伊豆山神社と般若院の2つに分離されたと言えるだろう。

・江戸時代の伊豆山権現の再現

それでは、伊豆山権現が、神仏分離令により実際にどのような打撃を受け、現在に至ったのか。それを知るために古地図や測量記などを参考に江戸時代の伊豆山権現の様子を地図に再現し、実際に現地に赴き、神仏分離令によって破却、移動などどのようなことが行われたかを考察した。まずは、江戸時代の伊豆山権現の再現を行う。江戸時代、熱海では多くの絵図が発行され、その多くが現在でも残っている。一般的な城下町などは、絵図の作成の目的が町の区画の監督などをするためであり、頻繁には作られず、発行され出回ること、軍備の面からほとんどなかった。そのため、現在まで残っているものが少ないことがほとんどである。しかし、熱海の絵図は、書かれているものを見るとわかるように、宣伝や街の案内が目的である。そのため、熱海では絵図が頻繁に作られ、大量にすられて全国に出回っている。そしてその多くが現代まで残り、江戸時代の熱海について知る際に非常に参考になる。

今回は主に3つの絵図を参考にした。これからそれぞれの絵図の特徴や、どのような点を参考にしたのかを説明する。

1つ目の元禄文化を代表する菱川師宣の「豆州熱海之絵図」は、天和元年（1681年）に作られた最古の熱海の絵図であり、正確でない箇所も多くあり、また伊豆山の部分はあまり詳細に描かれていない。ただ、伊豆山が描かれていることから、上方の町人の熱海への湯治の目的の一つに、伊豆山権現への参拝があったということは読み取れるだろう。2つ目の「豆州熱海湯治道知辺」は、元禄8年（1695年）に作られたもので、発行元は熱海の大湯（当時の熱海温泉の中心だった温泉）を経営する宿屋であることから、熱海を中心街は詳しく描かれているが、伊豆山部分はあまり詳しくない。三枚目の「熱海之絵図」は宝暦八年（1758年）に書かれた絵図。伊豆山部分が非常に詳しく描かれており、今回の研究では非常に参考になった。また、伊能忠敬が書いた「伊能忠敬測量日記」にも、伊豆山権現の境内の様子が詳しく書かれている。記載がある建造物の数が最も多く、位置関係も詳細である。これらの資料をもとに、江戸時代の伊豆山権現の様子を現代の地図上で再現した。その地図が右のものである。現代と比べると、非常に建物が多く、繁栄していたことがわかるだろう。

・伊豆山権現の神仏分離

では、神仏分離令によって、伊豆山権現は具体的にどのような被害を受けたのか。調査の結果を参道

の下から順番に紹介していく。

①走り湯

「走湯権現」の名前の由来である、温泉が湧き出る洞窟。元禄8年の絵図により、実際に温泉として使用されていたことがわかる。現在は洞窟のみが残っている。破却されず、観光用に整備されたことが分かる。

②役行者堂（えんのぎょうじゃどう）

走湯山が開祖と謳う、修験道の開祖、「役行者」（役小角）を祀るお堂。神仏分離令の際に走り湯の近くか、伊豆山神社境内に移動したようだ。

③薬師堂と観音堂

この2つは、かつて「下の権現社」と呼ばれた重要な建物である。この2つも破却されたようだ。

④地藏堂と常行堂

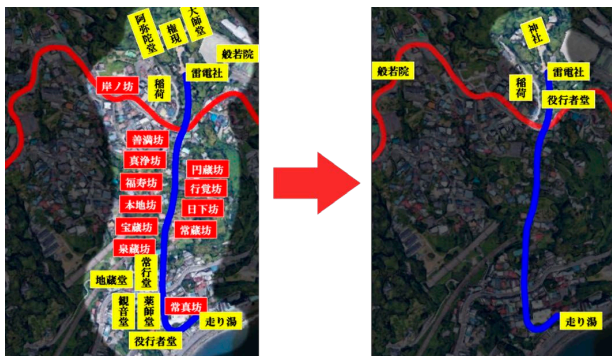
この場所には、現在は逢初地藏堂（あいぞめじぞうどう）→が残っており、地藏堂が破却を免かれ、常行堂は破却された。

⑤12坊

伊豆山権現境内にあった12個の坊で、旅人や権現の従者等が利用していた。宝暦八年の絵図によると、この参道の両脇に社坊がいくつも並んでいたようだ。12坊は全て、破却されている。

⑥伊豆山神社境内

こちらは権現社の両脇にあった阿弥陀堂と大師堂が破却され、伊豆山権現は伊豆山神社にかわり本殿は残っている。境内にあった別当坊般若院は破却を免れ、境内から移動したようだ。



これが、具体的な神仏分離令と廃仏毀釈による被害である。こうしてみると、山全体が境内だった巨大な伊豆山権現が、神社付近の小さな境内を、走り湯から長い階段で結ばれただけの小さな神社になってしまったということがよく分かる。

ここで、伊豆山権現の盛衰の様子を一旦まとめる。開基→和歌に詠まれるなど高名に→中世の荘園制で莫大な権力を手に入れる→頼朝を助け武士からも信仰を集める→太閤検地で権威失墜→小田原攻めで炎上→家康が再建→熱海とともに多くの人が訪れ

繁栄→神仏分離で大打撃

このように、伊豆山権現は、多くの紆余曲折を受けながらも、時代の移り変わりとともに様々な形で約1000年もの間繁栄を続けていたことが分かる。ここで僕は、神仏分離で大打撃を受けた明治時代での状態は、小田原攻めで炎上した戦国時代の状態と類似していることに気付いた。では、なぜ江戸時代には繁栄を取り戻し、現代では繁栄を取り戻すことができなかつたのか。近代の伊豆山神社を見ていく。

第四章 伊豆山神社復興への道

・来宮神社について

熱海の有名な神社といえば、来宮神社を思い浮かべる人が多いであろう。来宮神社は、全国2位の大きさを誇る、樹齢2000年を超えるご神木である「大楠」が有名な神社である。現在来宮神社には年間約72万人の観光客が訪れ、熱海への観光客の訪問先第一位で、熱海に来た人の43%の人が訪れる

非常に人気の神社で、熱海の観光業を牽引している。また、例大祭である「こがし祭り」は熱海の夏の風物詩であり、観光の目玉ともなっている。現代では非常に栄えている来宮神社だが、伊豆山権現の方が圧倒的に古く、由緒があると言えるだろう。それなのに、なぜ来宮神社はここまで栄えているのか。伊豆山神社との違いを、地理的要因と来宮神社の戦略から考察していき、来宮神社がここまで栄えた要因を参考にすることで伊豆山神社を復興する手段を考察する。

・地理的要因

僕は、熱海に来る「手段」の変遷が大きく関わっているのではないかと考察した。

まず、江戸時代、湯治客が熱海に来る手段は小田原街道が主流であり、元和元年の絵図(→)を見ると、湯治場の中心街に行くのに、湯治客は必ず伊豆山権現の境内を通ることがわかる。熱海へ入る人と出る人が、ついでに立ち寄って参詣することができるため、多くの参拝客で賑わったことだろう。しかし、この絵図で来宮神社は町の外れにあり、湯治客がわざわざ歩かなければたどり着けない。来宮神社は、昭和10年に来宮駅が開業し、徒歩3分程度で来宮神社まで行けるようになったことで、地理的に有利となり、現代、栄えているのだろう。しかし、来宮神社は当時無名の神社であり、行きやすくなっただけでここまでの発展を遂げたとは考えにくい。僕は来宮神社にはなにか戦略があったのではないかと考察し、調査した。

・来宮神社の戦略

熱海市は、約10年前から、若者をターゲットにしたPRを行っており、各観光地のリニューアルなどで、低迷していた観光客数のV字回復に成功した。来宮神社もこれに乗り、SNS用の写真撮影がしやすい台やおしゃれなオープンカフェ、散策案内所の設置などを行う改革で、参拝者数を10年で4倍以上に増やすという大成功を挙げている。

・伊豆山神社復興への道

まずは地理的な不利を解決することが最も有効的であると思われるが、東海道線に伊豆山駅を作ることにはあまり現実的ではない。そこで熱海の観光バス一日乗車券のルートに伊豆山を組み込み利便性を高めることによって参拝客を増やすという戦略を考えた。また、熱海の観光の中心街は熱海駅の西側に集中しているので、熱海市の伊豆山地区全体が協力して、かつて12坊があった伊豆山神社の参道の両側の空き地を利用して、来宮神社のようなおしゃれなカフェなどが立ち並ぶ商店街を作る、来宮神社のように若者が喜ぶ仕掛けを伊豆山神社にも作るなど、熱海の観光客で最も多い若者を呼び込む工夫をするべきである。既に現在、伊豆山神社では頼朝と政子が愛を育んだ場所として恋愛成就のご利益をアピールしており、若い世代の参拝客を増やす取り組みを行っている。

・まとめ

令和3年7月に起こった熱海市伊豆山土石流災害では、土石流が伊豆山地区を襲い、多くの人が被害を受けた。伊豆山神社は、かつての地蔵堂である逢初地蔵堂が被害を受けたが、中の仏像は幸いにも無事だったようだ。その後、被害を受けた伊豆山地区は地域の人達の協力もあり、復興への道を歩んでいるようだ。かつては栄華を極めた伊豆山神社は、様々な逆境に遭いながらも、地域の人達の協力により現在まで残っている。現在では決して有名ではないが、伊豆山神社は確実に地元の人達から愛され続けている熱海の宝である。これからも、人々が守り抜いてきた物を、僕たちも守っていくべきだと思った。

現在の伊豆山神社は、温泉史跡の走り湯や相模湾を一望する絶景、また郷土資料館など、歴史好きの方々にはぜひおすすめしたい魅力がたくさんある。もし、次に熱海を訪れた際は、熱海駅から東へ向かい、伊豆山神社に足を運んでみてほしい。

下総国葛飾郡深輪村のれきし

一名主関口家文書を読み解く

昌平中学・高等学校 井出 匠

はじめに-深輪村と関口家-

本稿は、下総国葛飾郡深輪村(現：埼玉県北葛飾郡杉戸町深輪)の名主関口家に伝来した『宗門人別改帳』、以下『人別帳』(貞享4～元治元(1687～1864)年)と、「小作関係帳簿」(元文2～文政6(1737～1823)年)を通して、江戸時代中期・後期の深輪村の「れきし」について分析したものである。

深輪村は江戸時代初期には深輪新田と呼ばれていた。元禄2年(1689)には戸数55戸、人口312人であった。その後、元禄3(1690)年～13(1700)年の間に旗本松井家他の相給村となった。相給とは一村を複数の領主が分割知行することで、深輪村は以後、三つの領主に分給された。明治4年(1871)に分割された深輪村が合わさり、戸数41戸、人口267人となった。

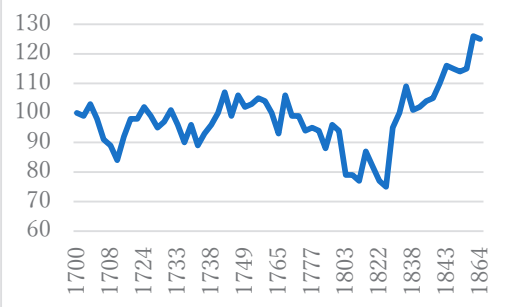
関口家は、元禄2(1689)年の『巳歳下総国庄内領深輪村人別判形帳』によれば、弥五右衛門が深輪村名主4人の内の1人として名を連ね、石高77石余、下男・下女11名を抱えていた。石高では名主又市郎の37石、下男・下女は組頭又右衛門の3人が村内で2番目となるので、関口家が破格であったことがわかる。分給後は旗本松井家知行地の名主を代々勤めた。また、寛延4(1750)年には、8間×5間から17間×6間半という壮大な母屋に建てかえた。さらに、天保12(1841)年、「関口」の苗字が『人別帳』に記される。この頃、苗字公称が許可されたと推測される。なお、明治期関口弥五が埼玉県唯一の多額納税者議員になるなど、近代になっても巨大な経済力を持っていることがうかがえる。

1 深輪村の人口について

ここでは相給後の松井家知行地深輪村の人口推移について分析する。図1をみると、17世紀前期から中期にかけて、人口は比較的安定的で18戸100人前後となっている。しかし安永9(1780)年から天明5(1785)年にかけて戸数が5戸も減っている。原因として考えられるのが、天明の飢饉である。人口は飢饉発生期より数年遅れて減少しはじめ、文政7(1824)年に『人別帳』最低の

75人を記録している。飢饉の影響は長期的に深輪村に残ったようで、減少した人口はなかなか回復しなかった。しかし文政年間に入ると飢饉前の水準を超えるほどまで人口は急激に増加し、天保7(1836)年には109人を記録した。その背景には飢饉により人口が激減したのだから、気候が安定したことによる作物収穫量の増加が考えられる。話を戻すと、天保期に人口増加は止まり、若干の減少がみられるが、これは天保の飢饉の影響と考える。ただ、影響は天明の飢饉ほど大きくはなく、天保の後半ごろには、また人口は増加に転じた。その結果、最後の『人別帳』元治元(1864)年における松井家知行地深輪村は、

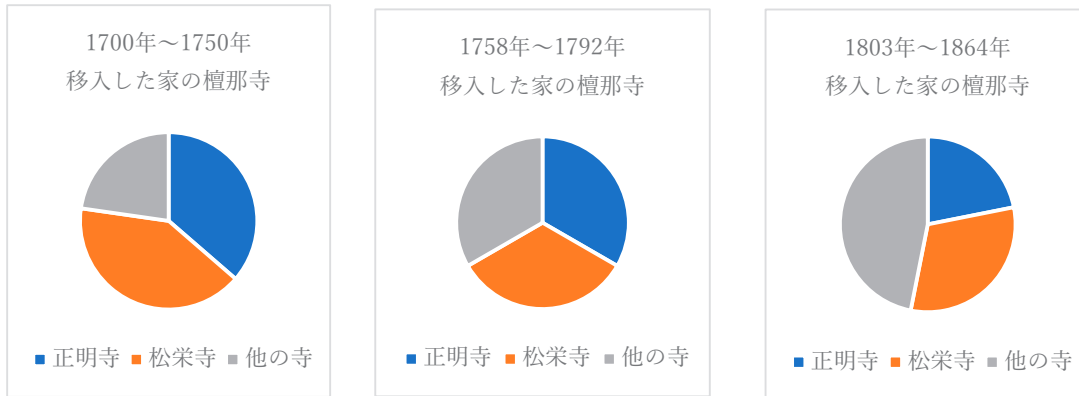
図1 松井家知行地深輪村の人口推



人口 125 人、戸数 19 軒であった。以上、松井家知行地深輪村の人口は、18 世紀中期の安定、天明期の激減、19 世紀後半幕末期に急激な増加をみせたことがわかる。

2 深輪村の家ごとの動き

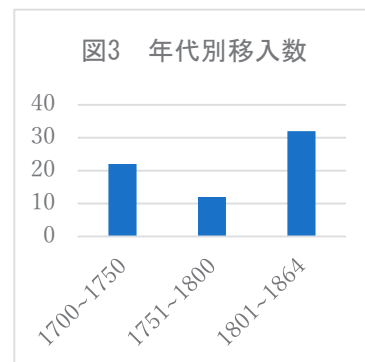
図2 『人別帳』で新たに加わった家(移入した家)の檀那寺



まず、深輪村に移入した家の檀那寺に注目する。深輪村には大きな寺院が無く、相給前の深輪村各戸（全 55 戸）の檀那寺の割合は、深輪村の東隣鷺巣村の正明寺が 6 割、西隣椿村の松栄寺が 3 割、その他が 1 割であった。相給後の 12 戸では、関口家を含めた正明寺 5 戸、松栄寺 5 戸、その他 2 戸の割合となった。関口家は、深輪村の西部にあり松栄寺に近い。檀那寺の割合からみると、当初、松井家知行地深輪村の村民は、深輪村西部の家を中心に設定された可能性がうかがえる。

図2より、1700年～1750年に移入した家の檀那寺をみると、正明寺と松栄寺の割合が拮抗しており、『人別帳』に新たに記載された家は、地域性を保っていたと思われる。次の、1758年～1792年も同じ傾向がみられるが、次第に松栄寺の割合が大きくなり、明和年間では、正明寺 6 戸、松栄寺 10 戸、その他 3 戸の割合となる。当初の傾向がより強まり、関口家の周辺に住む人々が松井家深輪村に編成されたのではないだろうか。最後の 1803年～1864年をみると、正明寺の割合は減少し、松栄寺とともに、その他の寺の割合が増加する。『人別帳』には、近隣村から引っ越して来たとの記述がみられる。

次に、深輪村への移入に関連して、移入の時期を年代別に分析する。図3をみると、1700年～1750年に、22戸が移入している。対して、1751年～1800年は12戸のみである。しかし19世紀中ごろには急増して33戸も引っ越してきている。この変化の理由は何か。天明・天保の飢饉前後で移入した軒数の傾向に変わりはないため、飢饉や気候は移入に影響しないようだ。ここで19世紀は関東農村部が江戸の経済圏に巻き込まれていった年代であり、幕末の混乱期であることを考えると18世紀は時代を経るごとに幕藩体制が安定したことで移入件数が減少し、逆に19世紀になると、経済圏に巻き込まれていくという変化や幕藩体制の動揺によって地域の流動性



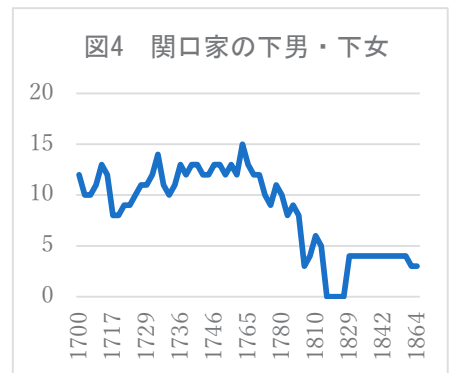
が高まったことがわかる。

最後に、『人別帳』で確認できる家の継続性に注目する。元禄 13(1700)年～元治元(1864)年の『人別帳』には 78 家が現れる。そのうち継続年数 50 年以上の家は 20 家のみとなる。一方で、継続年数 10 年未満は 35 家と、半数余りの家の継続年数が短い。家の継続年数調査から、深輪村における家ごとの動きは激しく、深輪村では、多くの家が断絶するか、引っ越してしまっていることが分かった。

3 深輪村の経済実態

本章では、関口家を中心に江戸時代の深輪村の経済実態について分析する。最初に、江戸時代の豪農経営について整理しておく。豪農は地主として、①零細農民を年季奉公人などとして使役する地主手作をおこない、②手持ちの資金を困窮した百姓に利貸して質に取った田畑を集め、小作人に貸して小作料を取り立てた。

このような豪農経営は、関口家にあてはまるのか、まず、①地主手作りについて検討する。図 4 は、関口家が抱えた下男・下女の総数の推移である。18 世紀後半のはじめまで、10 人以上抱えており、家事を行うだけにしては過剰であり、彼らは農地の耕作に充てられていたと考える。次に②小作経営であるが、関口家には、「小作関係帳簿」が 18 世紀中期より伝存している。この帳簿によれば、関口家は小作人の中で家守・地守を任命し、彼らに複数の小作人を束ねさせていた。この利根川流域独特の小作経営は、豪農の抱えていた小作人の数が多いことに由来する。以上のことから、関口家は豪農経営をしていたと考えられる。



ここまでは関口家の経営実態について分析してきたが、次に松井家深輪村における他家の経営方法についてもみていきたい。これらの家は共通して、元禄 2 年の記録からおおよそ 10 石程度の田地を持っていることが推測でき、下男・下女や小作人を保有していない。このような特徴からこれらの家は、基本的に農作業は直系家族が行いながら農繁期などは人を雇う小農家経営を行っていたと考えられる。

しかし時代を経るごとに少しずつこれら経営方法も変わっていくことが分かった。豪農の関口家が 18 世紀の間に多くの小作人を抱えるようになったのは、上記で書いた通りだが、関口家に伝存する小作関係帳簿からも確認できる。具体例を挙げると、1737 年には 38 人だった小作人が 1761 年には 61 人に増えている。その後の 18 世紀後半も関口家は松井家深輪村の家の多くを小作人として抱えていることが『人別帳』から確認できる。小農家経営を行っていた家は次第に関口家の小作人に転落し、18 世紀初期には松井家深輪村の家の 2 割程度しかいなかった小作人が 18 世紀後半になると 6 割越えとなっている。その一方で図 4 をみると関口家の下男・下女の総数は 18 世紀後半から減少し、19 世紀に入る



と0人を記録したこともある。これらのことから関口家は下男・下女による自作地の経営をしないで縮小・廃止し、小作人を抱え込む経営に変わっていったようだ。その背景として、奉公人、つまり下男・下女の賃金の上昇があげられる。江戸時代における貨幣経済の進展は結果として物価上昇を引き起こし、それに伴い賃金も上昇せざるを得なかった。すると18世紀後半には、下男・下女に自作地を管理させるよりその土地を小作に出したほうが利益率は高くなった。そのため地主が自営地を小作にだすケースは急増した。関口家もこの流れの中にいたことが推測できる。以上より松井家深輪村は貨幣経済に飲み込まれていくことで、豪農・小作人の経営方法が変わっていった。

その後19世紀に入ると人口増加に代表されるように気候が安定化し、豊作の年が多くなる。それにより小作料によって借金返済が完了した、関口家の小作人ではなくなった自立農民が増加するようになった。文政12年(1829)には松井家深輪村の約18%のみが関口家の小作人であった。その背景には1章で説明した人口が急増した文政年間の気候安定があると思われる。そのため関口家は一時力を弱めたように思えるが、その後の天保の飢饉や幕末の混乱の中で結果的には元治元年、松井家深輪村の約6割が関口家の小作人の状態であった。時代を経るごとに、深輪村の人々が関口家の経営に組み込まれていく様子が見えてくる。

4 まとめ

ここまで、深輪村を人口、家ごとの動き、経済の面から分析してきた。以上のことを総合的にみると以下のような結論が出るのではないかな。

深輪村全体の人口推移をみると深輪村の社会は気候に大きく左右された社会であるといえる。しかし旦那寺をみると18世紀を通して松井家深輪村に関口家周辺の家が編入されていき、19世紀には近隣村から多くの家が引っ越してきた。19世紀の流動性の高さは、移入軒数から読み取れる、大都市江戸の経済に飲み込まれたことによる混乱や幕末の不安定さによって説明できる。また貨幣経済の浸透など経済上の混乱の中で、関口家は経営方法を巧みに変えて力を増していったが、他家はその経営に巻き込まれていく中で力を失い、格差が拡大した。つまり松井家深輪村ではしだいに地域的にも経済的にも関口家によって支配されていった。このように深輪村の社会は日本全体の経済動向や社会変動にも影響を受けていた。

今回の深輪村の調査から上のことが深輪村について言えると考えた。江戸時代の深輪村は近世の村の一つの例として今後取り扱っていただけるだろう。

[参考文献]

- 鬼頭宏. 人口から読む日本の歴史. 講談社学術文庫. 2021
 - 水本邦彦. 村 百姓たちの近世 シリーズ日本近世史②. 岩波新書. 2018
- 研究に際し先輩方がまとめたデータを一部利用した

明治の館「室木家」が所蔵する「博愛」扁額の調査

石川県立七尾高等学校郷土研究部
 3年 一花 綾哩（いっかあやり）
 前田 暖夢（まえだ あゆ）
 佐竹十和子（さたけとわこ）

I. 調査の動機・目標

昨年度、私たちは石川県七尾市中島町にある、「明治の館－室木家」を調査対象に選び、明治期の近代建築物の研究を進める予定でした。しかし御承知のように、今年1月1日、「能登半島大地震」が発災し、甚大な被害を受けました。室木家も半壊状態となり所蔵品を緊急避難させることになりました。この中で以前から気になっていた孫文のサイン入り色紙が無事だったことが判り、これを機に調査対象を孫文のこの額とすることにしました。



室木家の全景



孫文の博愛扁額

II. 調査の方法・手順

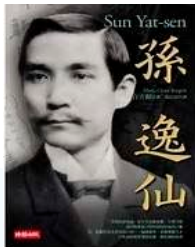
行政機関、研究者の方々にさえ、ほとんどこの孫文の「博愛」扁額の存在を知らない。さらに手掛かりとなる調査記録も報告書も無いという状況でした。つまり私たちが初めて調査に着手した研究者ということになります。調査は以下のような手順を進めました。

- ①とにかく実物から可能な限りの情報を抽出する。（いつ、どこ、だれ、なに、なぜ）
- ②次に全国的な規模で類例を探す。（部員で分担して、徹底的なインターネット検索）
- ③収集した類例をパターンごとに分類・分析する。→ 規則性を見つけ出す。

（1）博愛額に書かれた人物は？

① 「孫文」とは？

孫文の経歴（孫逸仙・孫中山）



以前 → 辛亥革命 → 以後

1886（慶応02）～ 1925（大正14）

孫逸仙（孫文） 孫中山

② 「室木先生」とは？

室木家の系譜（室木弥八郎・室木弥次郎）



室木弥八郎 → 室木弥次郎

1853（嘉永06） 1882（明治15）

～1903（明治36） ～1973（昭和48）

(2) 博愛額が書かれたのはいつか？

まず、両者が接した時期が必ずあるはずです。この点について考察します。

今回の調査では両者の活動について、様々な文献記録を整理して年表を作成し、時系列を対比することで可能性のある時期を限定する方法を採りましたが、前者（孫文）はとにかく移動が激しく把握が困難で、後者（室木家）は逆に記録が少なく推定が困難でした。

(3) 博愛額が書かれたのはどこか？

次に、両者が接した場所が必ずあるはずです。この点について考察します。

今回の調査では室木家直系の子孫である、室木勝彌（むろきかつや）氏（名古屋市在住）への聞き取り調査を実施しました。多くの貴重な情報を聞き取ることができましたが、特に注目すべきは「孫文が自宅に来たらしい」という話です。この点も検証してみます。

① 「孫文」(滞在時期)(滞在场所)・・・略年表

- 慶応 02 年 (1866) 広東省翠亨村に生まれる
- 明治 28 年 (1895) 日清講和条約、孫文来日
- 明治 38 年 (1905) 日露講和条約、中国同盟会結成
- 明治 44 年 (1911) 辛亥革命、翌年臨時大總統に就任
- 大正 02 年 (1913) 孫文来日、第二革命、日本へ亡命
- 大正 14 年 (1925) 北京にて死去



孫文記念館 蔣海波氏

② 「室木弥次郎」(活動時期)(滞在场所)・・・略年表

- 明治 15 年 (1882) 鹿島郡外村に生まれる
- 明治 38 年 (1905) 京都帝国大学法科大学卒業
- 明治 40 年 (1907) 大阪地方裁判所判事
- 大正 04 年 (1915) 石川県郡部選挙区衆議院議員に当選
- 大正 13 年 (1924) 石川県第四選挙区衆議院議員に当選
- 昭和 48 年 (1973) 鹿島郡中島町字外で死去



室木家 子孫 室木勝彌氏

③ 「孫文」と「室木弥次郎」の重なる時期と場所・・・結論？

時期 → 弥次郎が衆議院議員だった、大正 4 年(1915) 前後の頃と推定される。

場所 → 弥次郎が衆議院議員として居住した東京の何処かである可能性が高い。

(4) 博愛額とは何なのか？(感謝状・御礼状)・・・種類・枚数

孫文が、経済的、政治的、その他、の理由で支援を受けた相手に贈った礼状である。

- ① 自分の名前だけのもの(相当な数があり、しかも贋作が多く含まれている)。
- ② 相手の名前入りのもの(中国人宛 45 点、日本人宛 30 点確認)に大別できる。

(5) 博愛額とは何故書かれたのか？（政治支援・経済支援）…… 発見した支援者達

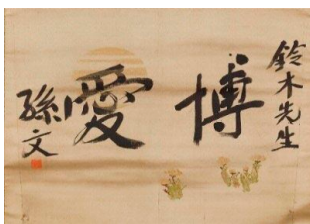
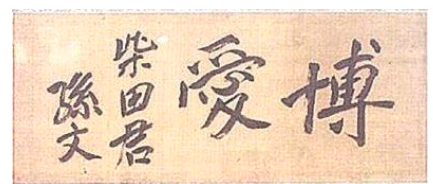
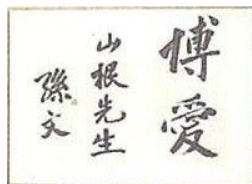
今回の調査で確認できた「相手の名前入り作品」は全部で75点です。(かなり徹底した調査結果です。ただし個人蔵で未確認の作品がまだ存在する可能性はあります。)この中で日本人宛そして所在と由来とが判明している作品は現時点で以下の10点のみです。

- | | | | | |
|-----------|--------|--------------------|----------|-------------|
| ①. 「伊藤先生」 | 静岡県磐田市 | 伊藤八太郎 | 皇宮警察官 | 孫文記念館所蔵 |
| ②. 「山根先生」 | 兵庫県 | 山根 重武 | 船長 1913年 | 孫文記念館所蔵 |
| ③. 「柴田 君」 | 兵庫県 | 柴田善兵衛 | 警官 1913年 | 孫文記念館所蔵 |
| ④. 「卜部先生」 | 新潟県 | (高橋是清 → 北村家) | | 孫文記念館所蔵 |
| ⑤. 「山崎先生」 | 東京都四谷区 | (頭山 満 → 山崎家) 1914年 | | (山崎家)個人所蔵 |
| ⑥. 「鈴木先生」 | 群馬県高崎市 | 鈴木久五郎 | 相場師・実業家 | 東京国立博物館所蔵 |
| ⑦. 「室木先生」 | 石川県七尾市 | 室木弥次郎 | 政治家・実業家 | 明治の館室木家所蔵 |
| ⑧. 「櫻内先生」 | 島根県安来市 | 櫻内 幸雄 | 政治家・実業家 | 広瀬町顕彰館所蔵 |
| ⑨. 「林 先生」 | 山口県下関市 | 林 平四郎 | 政治家・実業家 | (林芳正氏)個人所蔵 |
| ⑩. 「高田先生」 | 三重県菰野町 | 高田隆平? | 政治家・実業家 | (岡田克也氏)個人所蔵 |

※補足※ ④、⑤については、まだ検討・確認が必要なので、保留とします。

⑨については、今回、特別に実物を拝見させていただきました。

⑩については、所有者が代わったようですが写真の提供を受けました。



III. 調査の成果・総括 …… (発表時のスライドを参照して下さい)

IV. 今後の課題について

(1) 未確認の博愛額の保護 …… 捜索 (国内・国外) 急ぐ必要があります

☆堀井先生 (孫中山記念館 南京市)、松本先生 (国立孫文記念館 台北市)

★天野先生、井上先生、上野先生、大内先生、岡安先生、尾川先生、勝田先生、小泉 兄、鈴木先生、辻 先生、遠山先生、吉田先生、野口先生、福田先生、松崎先生、名古屋先生、宮崎先生、山田先生 (以上オークションサイトで発見)

(2) 歴史的な文化財の保護 …… 災害 (天災・人災) 自分たちに出来ること



(3) 日中交流史の再発見 …… 友好・協力 (中国・日本) 先人達に学ぶ

① 「孫文」の支援者 (政治)

・宮崎 滔天



熊本県荒尾市



② 「孫文」の支援者 (経済)

・梅屋 庄吉



長崎県長崎市



③ 「孫文」の支援者 (学問)

・南方熊楠



和歌山県田辺市



< 調査協力 >

- ・林芳正様、岡田克也様、西田昭二様、近藤和也様 (以上衆議院議員)
清水真一路様 (県会議員)、山崎智之様 (市会議員)
- ・室木勝彌様および「明治の館室木家」周辺住民の皆様
- ・蔣海波様および「孫文記念館移情閣」職員の皆様
- ・七尾市教育委員会スポーツ・文化課職員の皆様

< 参考文献 >

- ・『旧室木家総合調査報告書』(石川県七尾市教育委員会 2020年)
- ・『石川県中島町史 (資料編)』(中島町役場 1966年)
- ・『重要文化財移情閣 孫文記念館』(公益財団法人孫中山記念会 2018年)
- ・『孫文と神戸を歩こう』(移情館孫文記念館友の会 2023年)
- ・『孫文と日本～革命いまだ成らず～』(アジア歴史資料センター 2010年)

東美濃戦国史の研究

～国衆の動向を中心に～

岐阜県立関高等学校地域研究部

森翔吾 渡辺俊太 岩原知哉 佐藤孝亮 土本徳哉 神山諒成

はじめに 天下布武をめざす織田信長は、元亀年間（1570～73）、近江・畿内を転戦し、朝倉や浅井、延暦寺、本願寺などの敵対勢力と戦い続けた。ともに戦った斎藤新五や佐藤方秀は、馬廻衆すなわち信長・信忠父子の親衛隊であり、同時に、東美濃と呼ばれた中濃地方を統治する国衆でもあった。これに対し、東美濃の北方に位置する郡上の国衆遠藤慶隆は、表向きは織田に臣従しながらも、武田や朝倉、浅井、本願寺と内通していた。

我々は、郷土の戦国武将である斎藤新五、佐藤方秀・方政父子、遠藤慶隆の動向に注目し、織田から豊臣、徳川へと天下の情勢がめまぐるしく変動する中、地域を率いた国衆やその一門が、生き残りを賭けてたちまわる様を文献から追った。同時に、遺跡や寺社、古道等の踏査をもとに、地域社会の変容についても考えてみた。

1 天下布武と新五、方秀

（1）祖師野八幡宮棟札の調査より（右写真） 斎藤新五の所領をめぐり歩く中で、下呂市金山に所在する祖師野八幡宮の元亀元年棟札の存在を知った。この棟札には、地頭・代官の武運長久や、国王の安穩を願う文言が書かれている。地頭は領主の新五のこと、代官は沙汰人（地侍の代表）の田口氏のことをさすと考えられる。前述の通り、元亀元年、信長は、新五や方秀とともに、朝倉・浅井・延暦寺と、近江を舞台に激しい戦いを続けていた。敵の抵抗に手を焼いた信長は、幕府や朝廷に斡旋を願い出て、ようやく和議にこぎつけた。棟札の日付は12月吉日。正親町天皇の綸旨発給は12月9日、和睦は12月13日のことであった。天長地久・国王安穩は、朝廷・幕府の安寧、天下布武の実現を願っての文言であると考えられる。



今回の棟札調査によって、国衆の領内統治の一端を知ることができた。また、畿内・近江をめぐる政治情勢が、棟札の願文にもあらわれていることに新鮮な驚きを感じた。

（2）織田家の危機と東美濃三カ所城 元亀3（1572）年10月、武田信玄は、信長との盟約を一方的に破棄し、遠江・三河・東濃への侵入を開始した。浅井・朝倉や一向一揆に加え、背後から信玄の襲撃を受けた信長は、絶体絶命の危機を迎えた（元亀争乱）。

この頃、郡上の遠藤慶隆は、信長に臣従しつつ信玄をはじめとする反信長勢力と内通していた。慶隆が武田・朝倉に味方した場合、織田は北方に強大な敵を抱えることになる。事態を恐れた信長は、新五や方秀に慶隆を厳しく監視するよう命じたと考えられる。馬廻衆は、攻めの要であると同時に守りの要でもあった。

新五や方秀は、敵にとって厄介な存在であった。その間の事情を伝える史料が、越中勝興寺宛・浅井長政書状である。長政は書状の中で、「加治田、津保、鉈尾山、東美濃三カ所

城が、信長を裏切り、信玄に内通した」と書き記している。三カ所城は、いずれも新五や方秀の城である。彼らが信長を裏切った形跡はなく、その後も主君に従い戦い続けた。長政書状は、信長陣営を分断し、反信長陣営の結束を固めるための虚報であったとみなしたい。

(3) 東美濃三カ所城に関わる山城と城下町の踏査 東美濃三カ所城がどのような立地にあり、いかなる構造を有していたのか。確認のための調査を行った。



新五の拠点（根城）、加治田城は、曲輪、虎口、堅堀などの施設で固めた堅固な山城である。城下の2カ所の城館のうち、西城館の土塁は残りがよく、高さ2m以上の土盛りが100mほど、その姿を残している。東城館は、高さ約2mの高台に位置する。『信長公記』には、堂洞合戦勝利の晩、信長自らが城館を訪れ、酒宴を催し宿泊したとの記載がある。興味深いことに、山城や城館の立地は、『信長公記』や江戸期の古地図の記載とほぼ一致する。

加治田の出城、津保城は、河川合流点、街道分岐点にある交通の要衝で、郡上街道側に堅堀が5本も築かれている（津保城石垣の測量、上写真）。慶隆への警戒を怠らなかった証拠であろう。津保城主でもあった新五は、天正6（1578）年、信長の命を受け、飛騨街道を北上し越中で上杉勢を破る。津保城は軍事拠点としての役割を十分果たしたと言える。

長良川沿いにある鉦尾山城は、峻険な山に築かれた堅固な城である。佐藤氏3代の城下町は川べりの低地にあり、丘陵上には、城館や市場、武家屋敷、町屋敷が次々と築かれた。岐阜城まで船で3時間という立地を生かし、上有知の開発に成功したといえる。

(4) 遠藤慶隆の謀反とその後

天正元（元亀4、1573）年4月の信玄死去に伴い、勢いを得た信長は浅井・朝倉を次々と滅ぼしたが、早くも翌年、ふたたび危機を迎えた。武田家を継いだ勝頼が、遠江や東濃に侵攻し、本願寺や伊勢長島一向一揆とともに、信長を挟み撃ちにする作戦を開始したのである。



この企てに加わった慶隆は、信長が、新五や方秀を率いて、伊勢長島一向一揆鎮圧のために出陣した隙を突き、加治田領の神戸城（関市上之保）、船野城（下呂市金山町）を襲撃した（船野城の堀切、左写真）。この間の事情は、

一次史料や『信長公記』に記載がないが、郡上藩家伝（『遠藤記』『慶隆御一世間書』）に、寄手の武将の名や攻め口など、具体的な記述が残されている。郡上勢は、神戸城、船野城を相次いで占領したが、その後、伊勢長島一向一揆が、織田の攻撃で全滅すると、形勢不利とみて攻撃を中止したようである。郡上藩重臣の家伝『粥川由緒書』によれば、慶隆は、信長の激しい怒りを買ったものの、捨て身の謝罪が受け入れられたようである。領地削減などの厳罰が下された形跡はない。翌年5月の長篠の戦いに参陣した慶隆は、鳶ノ巣山占領で大いに活躍し、さらに7月の越前攻めでは凄惨な一向宗殲滅戦に参加している。伊勢長島の全滅を機に、武田や本願寺と手を切り、信長に忠誠を誓ったと考えられる。

(5) 本能寺の変と三カ所城のその後

天正10（1582）年3月、信長は勝頼を滅ぼしたが、3か月後、明智光秀の謀反により自身も本能寺で滅ぼされた。この時、信忠の下にいた新五も討死している。京都阿弥陀寺にある新五の墓石には、無念の想いを語るかのように「美

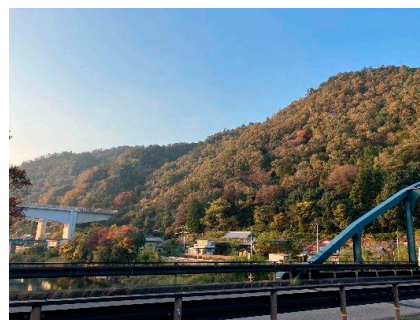
濃国加治田の城主、斎藤新五三十一歳、岐阜信長父子の御供なり」と刻まれている（新五墓石の3D撮影ソリッド画像、右）。その後、加治田城は廃城となったが、まちは江戸期以降も商業地として繁栄した。新五の墓石は、その形態から見て江戸前期の所産と考えられる。江戸期になっても、加治田では新五が軍記や伝承に登場する。墓の施主も、新五を慕った加治田の人々であったかも知れない。



新五の支配地では、楽市や土地開発、木材資源開発などの産業振興が盛んであった。永禄10（1565）年12月、信長は、関の商人長谷川三郎兵衛に、飛騨川から関にかけての木材加工・販売の特権を与えた。この年、信長は稲葉山城を占領し、城下町や居館の整備に着手した。文書や棟札からは、飛騨川から陸揚げされた木材が、現在の美濃加茂付近で建築材に加工され、盛んに活用された経緯がうかがわれる。飛騨川流域から岐阜城下に、大量の建築材が運び込まれたのであろう。美濃加茂の中心地、太田は、江戸期以降、中山道の宿場、木曾川水運の拠点として栄えた。上有知に同じく、すでに戦国期、繁栄の基礎が築かれていたと考えられる。

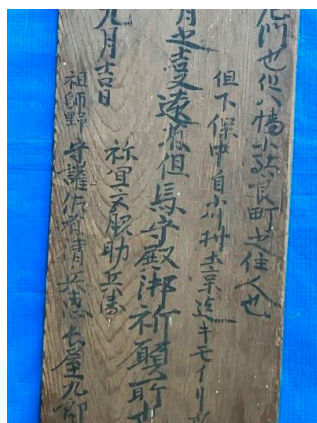
2 豊臣政権と上有知の繁栄、遠藤氏の郡上追放

方秀の子、方政は、上有知の整備に尽力した。低地から小倉山に拠点を移し、付近に町屋敷を設け、北方の曾代、南方の段、東方の口野々に武家屋敷を置いた。商業振興を図ると同時に守りを固めたのかもしれない。



江戸期以降、上有知は美濃国屈指の商業地として繁栄した。小倉山城や上有知と言えば、江戸初期の金森氏統治のイメージと重なるが、その基礎は、すでに方秀・方政の時代にできたといっても過言ではない。

慶隆は、本能寺の変直後、織田信孝・柴田勝家に味方したため秀吉側に攻められ、美濃立花に籠城したが孤立無援のなか降伏した（立花山、上写真）。一旦は許されたが、秀吉の怒りは解けず郡上から追放された。のち美濃白川に領地を与えられた。



3 関ヶ原の戦いと遠藤氏復権

関ヶ原の戦いで、西軍についた方政は改易処分となった。その後、関ヶ原直後に自決したとも（地域の伝承）、大坂の陣で戦死したとも伝えられる（『佐藤金森由緒書』）。佐藤家家臣の中には、新領主金森家に仕えた者もいた。地元には、今も家系図や位牌が大切に保管されている。大名としての佐藤氏は滅んだが、上有知の繁栄の基礎を築いた功績は大きい。

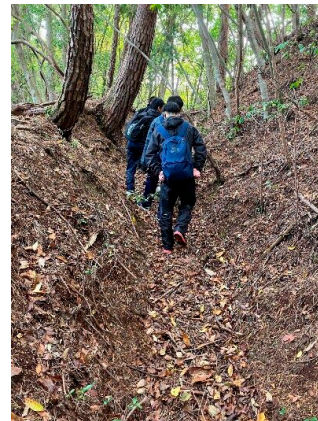
慶隆ほど、浮き沈みの多い武将は、珍しいのではないか。くわえて、三代将軍家光に仕えたほど長寿であった。八幡城下町発展に尽くし、郡上繁栄の基礎を築いた人物と言えよう。左写真は、今回の祖師野八幡宮の調査で確認した未発表資料、元和三年棟札である。遠藤但馬守殿（慶隆）の祈願所と明記されており、郡上を奪回した喜びが伝わってくるかのようなのである。

まとめとして 信長・信忠親子の本陣を守り、戦場で戦った馬廻衆は、同時に、地域とと

もに生きた国衆でもあった。動乱の時代に生きた美濃の国衆やその一門は、波乱の生涯を送っている。

新五は本能寺で討死。方政は関ヶ原で改易。慶隆は郡上追放に遭い、のち郡上を奪還。今回、地元の武将の生き様を追ってみて、それぞれの運命に驚きつつも、一方で、中世の人々が、後世に残した数々の遺産の素晴らしさに気づいた。城や城下町のような史跡、和紙や刀剣、木工のような産業など、いたるところでその足跡を見出すことができる。

交通網整備も彼らの功績である。川筋や大きな街道はもちろん、産業や生活の著しく変化する中、忘れ去られようとしている尾根道や峠道の中には、中世にさかのぼるものも多いはずである（美濃市上河和から関市富之保に向かう峠道の踏査、上写真）。



今回の調査で、我々は、未発表資料や一般に知られていない資料に出会った。写真はその一例、関市下之保天正寺の開山、燈外宗晋の頂相彫刻である（頂相彫刻の調査、下写真）。燈外は、飛騨安国寺在職中、武田の兵火で伽藍を焼かれる苦難に遭ったのち、天正元年、天正寺開山となった人物と伝えられる。当時の下之保の領主は新五であった。天正寺の寺名や、燈外が飛騨の事情に通じていることなどから考え、越中攻略を企てた信長の意向により、この地に建立されたのではないかと我々は想像する。現在、天正寺の協力の下、頂相彫刻の科学分析を進めているところである。

謎解きが進むと、新たな謎（課題）に直面する。

今、我々の関心は、中世の美濃国において、武家と深いつながりをもった神社や寺院の歴史に向かいつつある。今後も地域の方々と協力し、地道に郷土史研究を続けていきたい。



【引用・参考文献】

- ・『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第3号』（2020.6）
- ・『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第4号』（2021.3）
- ・『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第7号』（2023.3）
- ・『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第9号』（2024.4）
- ・鴨川達夫「武田信玄の西上作戦を研究する」『東京大学史料編纂所紀要 25』（2015）
- ・小笠原春香「武田・織田間の抗争と東美濃一元亀・天正年間を笠原中心に一」『武田氏研究』53（2016）
- ・『東海の名城を歩く 岐阜編』（2019）
- ・木下聡著『斎藤氏四代』（2020）
- ・『富之保村誌』（1925）
- ・『上之保村誌』（1937）
- ・『郡上八幡町史 上』（1960）
- ・『美濃市史 通史編』（1979）
- ・『美濃市史 史料編』（1979）
- ・『富加町史 史料編』『富加町史 通史編』（1980）
- ・『武儀町史』（1992）
- ・『郷土の偉人マンガ斎藤新五利治』（2023）
- ・江戸期の地誌（『新撰美濃志』『濃州徇行記』『濃陽志略』『美濃明細記』）

【お世話になった方々、団体】

島田崇正氏・山内正明氏（富加町教育委員会） 森島一貴氏（関市文化課）
 祖師野八幡宮 天正寺 龍福寺 半布里文化遺産活用協議会 関市文化財保護センター
 株式会社パレオ・ラボ SeaLandSky EARTHSHIP

豊かで安全な社会づくりのために ～鳥取を守る地元企業～

鳥取城北高等学校 アントレプレナー部

0. はじめに

昨今、地震、津波、気象災害等、甚大な災害が起こるケースが増えている。また、南海トラフ巨大地震も注目され、防災、減災に関する取り組みの重要性が高まっている。一方、身近な防災。例えば公共施設の電気、通信、消防設備の設置、保守、点検なども地域社会を守るためにとても重要な要素で、それらは地域の中小企業によって支えられているが、その業種ならではの課題をかかえている。今回、その企業の悩みを聞き、現地を見学して、それらの課題の解決につながる高校生目線のアイデアを提案した。

1. 企業の現状と課題

今回協力していただいたのは、鳥取市にある「株式会社吉備総合電設」様で、電気設備工事、電気通信設備工事、消防設備工事・保守点検、防災商品の販売などを行っている。県立文化会館や県立中央病院、市役所などの公共施設も担当している企業である。従業員数は、本社、支社を合わせて69名で、そのうち女性はわずか7名しかいない。設備、保守、点検が必要な現場の中には、女性専用のフィットネスジムや婦人科など、女性社員の方が好まれるところもあり、そのニーズに応えられないという現状がある。「女性社員が不足している」これが企業の抱える課題である。

2. 本校女性教職員アンケート

なぜ女性社員が少ないのか。どうすれば解決できるか。そのヒントを探るため本校の女性教職員にアンケートを実施した。アンケートの内容と回答は図の通りで、ひと言で言うと男性の職場（女性が働くイメージがわきにくい）という認識が強い傾向があるといえる

アンケートの内容
▶年齢
▶吉備総合電設という企業を知っているか
▶吉備総合電設についてどのようなイメージがあるか
▶吉備総合電設の宣伝を見てどう思ったか
▶女性が働きやすい職場とはどのような職場か
▶どのような条件であれば現場仕事で働きたいと思うか
▶職業を選択する上で大切にしていること
▶就職先（職場）を選ぶ上で大切にしていること

現在の企業イメージ
電気工事の専門業者
防災、電気設備の点検をしている
男性中心の仕事
理系の仕事
見かけるだけで、何のイメージもない

吉備総合電設の宣伝について
女性が活躍する業界イメージがつかない
こういう現場は女性が少ないと感じた
女性の中でも特に体力がある人材を求めている

これら、アンケートの結果を踏まえて、高校生らしい視点での解決策を提案していく。

3. 解決策の提案①「企業イメージを変える」

まず1つ目の提案は、わかりやすい見た目を変えることだ。社用車や作業着など、多くの人の目に触れるものを、おしゃれで女性受けしやすいデザインに変えることで、これから働こうと思っている若い女性層のイメージを変えていくことができると考える。



さらに、社内の日常の雰囲気や取り扱っている防災食を食レポする動画などをSNSで配信し、企業に対する堅いイメージを払拭していきたいと考える。



4. 解決策の提案②「地域イベントを開催する」

2つ目の提案は、体験型のコンテンツを重視した、イベントを開催することだ。

アンケート結果から、「スイーツ」は女性向けイベントでも人気があり、「café とのコラボ」や「防災食スイーツコンテスト」は効果的だと考えた。

また、若い女性に人気の「推し活」に着目し、イベント参加者だけに、推し色に染まった防災バッグを配布する。自分のお気に入りのバッグにしてもいい、楽しみながら災害への備えをしてもらいたい。

さらに、VRで災害を体験できるブースや実際の仕事を体験できるブースを用意し、防災や防災に関わる

仕事。そして会社に興味を持ってもらい、「この仕事を通して地域を守りたい、誰かを助けたい」という思いを持ってもらえたら、「吉備総合電設」という会社が就職先としての候補に挙がりやすくなるのではないかと考える。



5. イベントの実施

昨年秋に実施された防災イベントに、早速私たちの提案を取り入れてもらった。若い方や年配の方。家族連



れなど幅広い年齢層の方が来場し、終始楽しんでいる様子が印象深く、企業や防災について楽しく理解を深めていただけたと感じている。

6. おわりに

今回「女性社員が少ない」という企業の課題に取り組んだが、女性社員が増えることは、女性でも活躍できる場所、分野であるということを経験した人に認識してもらい、企業のことを知ってもらいと同時に防災についてより多くの人に知ってもらうことに繋がるものと考えている。

また、イベントに関して話し合いをしていく中で、初めは女性社員を増やすことに着目してイベントを考えていたが、実は地域の子供やお年寄りの方々にも防災について考えてもらうきっかけとなり、将来の地域の防災の担い手を育てることのできるよい機会になることに気づいた。

これらの取り組みが継続的に行われれば、地域の防災意識の向上につながり、災害に強い地域社会を作っていくことができるものと考えている。

吉備総合電設さんと協働し、課題解決の方策を考えたことにより、私たち自身の防災に対する意識を高まった。

今回ご協力いただいたすべての方に、感謝申し上げます。

宮川と共に生きる

一 昼田水害伝承碑と水制遺構「百間バネ」一

三重県立松阪高等学校 2年 清水綾乃 余谷莉瑚

【研究概要】 三重県の地理院地図掲載の自然災害伝承碑（以下伝承碑）を調査し、伝承碑空白地域であった宮川流域から、地理院地図未登録の伝承碑を確認した。その伝承碑および伝承碑の立地する地域に残る水制遺構の「百間バネ」(水刳堤)を紹介する。また古老から聞き取った「水害と戦い、しかし宮川と共に生きてきた地域の暮らし」や、町役場での取材を基に、伝承碑や水制遺構の生かし方について考察・提案する。

【三重県の伝承碑分布の特徴】 図1は三重県の伝承碑の分布を災害別に分類したものである。分類の結果、伝承碑が伝える災害種別の特徴は、以下の通りであった。ゾーンB・C・Dの南部の熊野灘沿岸および志摩半島沿岸は地震による津波、ゾーンAの北部伊勢湾岸は伊勢湾台風による高潮、ゾーンEの内陸の伊賀地方は台風または豪雨による土砂災害・洪水、地震による地盤沈下が多くみられた。またゾーンDの内陸部には近年の紀伊半島豪雨災害の伝承碑が多くみられた。

【分布の空白域である宮川流域】 図1をみても、三重県中部地方のほとんどは伝承碑の空白地域となっているが、災害が少なかったわけではなく中部地方にも様々な災害の記録が残っている。特に奈良県境から伊勢湾へと流れる県下最大の河川である宮川流域は水害の記録が多く残されている。宮川は堤防を作っては破られることが繰り返され、周辺の地域は多大な被害を被ってきた。そのため宮川下流部に4つの水刳堤を造ることになったが、難工事でもようやく四つ目の浅間堤が完成するときに、「松井孫右衛門が自ら申し出て人柱となった」という伝説もあり、宮川下流の堤防付近に碑が建立されている。

【伝承碑の「発見」】 流域の災害史の調査を行う過程で、『玉城町寺院案内記』（私家版）に、宮川河畔の集落である度会郡玉城町昼田地区に災害伝承碑があることがわかり、昨年度より調査にあたった。この伝承碑は明治18年(1885年)7月1日の水害に関するものであった。なお調査を進めていくと、この伝承碑は『三重県玉城町史（上巻）』に記録されており地元ではある程度知られていたが、国土地理院が登録を呼びかけている自然災害伝承碑に該当すると意識されていなかったことが判明した。

【明治18年7月1日の水害の全国状況】 図3は明治18年7月1日の天気図である。これを見ると、台風が中心が紀伊半島にあり、勢力を保ち伊勢湾台風とよく似たコースで来襲していることがわかる。夏の時期の台風なので雨量が多かったと予想される。この台風は



図1 三重県災害伝承碑の分布



図2 松井孫右衛門の碑

大阪府淀川で大水害を引き起こしたほか、高知県、岐阜県、福井県などで災害を引き起こしている。

大阪府淀川付近には、明治18年の水害による自然災害伝承碑で地理院地図に登録されているものは3つある。その碑には、6月上旬から続く降雨により淀川の水位が上昇し、さらに暴風雨の影響で広範囲にわたって堤防が決壊、2万6千戸以上が流失、約290人が亡くなったということが記されている。図4は、そのうち



図4 枚方市の伝承碑

枚方市のもので、市の指定文化財である。市川紀一によれば、この水害は「国の治水政策を大きく転換せざるを得なくなった水害であった」とされている。〔土木史研究第18号〕

【三重県の被害状況】三重県令が内務卿・山県有朋に災害復旧の上申書を提出した際の被害状況調査表によると、この水害の三重県の死者は44人で、そのうちの19人は度会郡（昼田）が占めており、三重県の各地区の中では犠牲者が最多であったことがわかる。この時、内務省より管轄分の被害額の6分の1として14,484円が災害復旧費として補助されている。

【昼田の特徴】昼田地区は伊勢神宮の牧として栄えてきた。しかし明治18年の水害の以前、幕末期にも堤防が決壊した記録があり水害の被害を多く被ってきた地域でもある。地理院地図を確認すると、昼田の対岸集落（宮川右岸）は10mの等高線より上に立地しているが、左岸の昼田に記されている標高点は9mで、集落の立地位置は左岸側がやや低いことがわかる。

【昼田地区の災害伝承碑】文政4年（1821）戸数22戸、人口122人、馬6匹であった昼田村は、明治18年（1885）の大洪水で堤防240間が決壊して壊滅的打撃をうけた。当時の惨状を書きとめた記念碑が、地区の薬師堂境内に建っている（図7）。土地の古老である山本勇さんからお聞きしたところ、昭和30年頃には堤防道路上にあったが、交通量の増加に伴い危険であるということで、昭和30年代後半頃に現在の位置に移されたということである。

伝承碑の文を引用すると、「明治十八年六月二十九日雨潦降越七月一日河水漲溢衝決堤防。」（1885年6月29日、大雨（長雨）が降り7月1日河の水が堤防を突き破った。）とある。また、『昼田村宮川堤防潰決之実地景況』には、「本月（7月）一日ノ強雨洪水ハ同村（昼田村）宮川一時ニ水嵩ミ、堤ヨリ一尺余上ヘ水越シ、同日午後三時頃」から堤防が決壊したとある。碑文には8戸20棟の建物が流され、死者19人と記録されている。また地元からの要請で堤防が、9680円余の費用で、翌年3月に修復されたことも記載されている。



図7 昼田の災害（水害）伝承碑

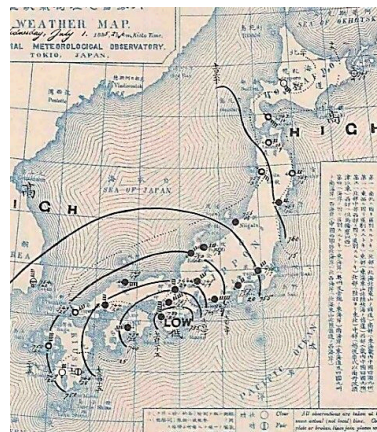


図3 明治18年7月1日の天気図

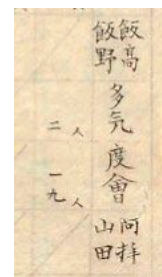


図5 公文録の被害状況（一部）



図6 宮川左岸に立地する昼田地区

この昼田災害伝承碑は、松阪高校より写真や碑文内容を添え国土地理院担当者に照会したところ「災害伝承碑とした地理院地図に掲載する価値のあるものである」との回答を得た。現在、玉城町役場担当部署に依頼し、登録の手続きを進めてもらっているところである。

【水制の遺構「百間バネ」について】 水害の後、二度と堤防が決壊しないようにとの思いから、堤防の内側に水刳堤が造られた。水刳堤は、大きな川で直接堤防に川の水があたることを防ぐために内側に造られる堤防である。村の人々が力を合わせて造ったこの水刳堤は百間バネとよばれ、増水時には今も宮川の強い水の流れをはね除け続けている。玉城町の水辺の楽校(後述)のパンフレットに記載されている百間バネの場所には石積のようなものが見られるが(図8)、この場所は百間バネではない。前出の山本勇さんの話によると、この場所は、昭和40年代頃、川砂利を採集する業者が川を荒らしたため、抗議して石を積んでもらった場所であり、本当はもっと上流にあるということである。百間バネは昭和20年代にはすでに土砂に埋もれていて、実際の百間バネの全容は山本さんも見ることがなく、山本さんが祖父から聞いた話によると、城の石垣のような立派なものだったという。また、最後の石を取り外さない限り他の石が取れないような仕組みになっていたという。今は、雑木林の中に埋もれてしまっているが、宮川の導水管橋が通っている下のところから百間バネの10mくらいの段差が見え、玉城町役場で調査が進められている。図9



図9 手斧猿尾

は岐阜県の木曽川に見られる手斧猿尾と呼ばれる水刳堤である。百間バネも、土砂を取り除けばこのような立派な石積であることが期待される。



図8 パンフレットの百間バネの位置の現状

【玉城町の取組み】 玉城町は、昼田地区に

「自然体験、環境学習」を目的として、国土交通省との共同事業で「たまき水辺の楽校」を整備している。玉城町役場での聞き取り調査では、担当部の方々だけでなく、辻村修一町長にもお話を伺い、そのお考えを伺うことができた。その際の概要は以下のとおりである。

○「たまき水辺の楽校」は今、キャンプ場のように使われているが、元来は水と親しむことで自然体験、環境学習をする場である。その中に、防災や百間バネを知ってもらうという目的も含んでいる。「たまき水辺の楽校」を、今後も防災学習の場として整備していくつもりである。百間バネや伝承碑を利用していきたいと考えているが、「たまき水辺の楽校」事業は国土交通省と共同事業で、1級河川である宮川は国交省の直轄管理のため、玉城町の意向だけでは進められない。申請などして活用を考えたい。



図10 水辺の楽校

○百間バネなどは、歴史遺産の保存の原則に従って現状維持を目的として守っていききたい。ただ百間バネは、まだ覆っている土砂などを取り除いて確認していないので、どこまで現状保存できるか、専門家に相談する必要がある。

○「水辺の楽校」は国交省の管理下にあり、百間バネの活用については国交省と相談していく。例えば、百間バネに船着き場を作る、看板を立てるなど、これから利用法を考えていく。

○百間バネを治水歴史遺産として登録していきたい。文化庁の委員会や、玉城町教育委員会と相談していきたい。



図11 辻村修一町長のお話を伺う

○地理院地図への登録について、地理院地図に登録の価値あるものであると言われており、登録申請の準備中。ただ、伝承碑の裏面の文字が摩耗して読めず、碑の正確な建立時期が判然としない。三重県沿岸部には津波や高潮の伝承碑が多いが、内陸はほとんど無いため、昼田の伝承碑登録は意義がある。

○昼田の前区長さんは、百間バネを文化財として残したいという考えだった。百間バネは昼田の水との戦いの象徴である。



井家」となっている場所に、「旅館住吉屋」があるのが確認できた。また、2023年5月21日付の下野新聞の記事に「「あゝ上野駅」を作曲した矢板出身の作曲家・荒井英一は、旅館住吉屋の長男として生まれた」との記述が、その裏付けとなった。これらのことから、「住吉屋」が矢板宿における宿屋だったと言えるだろう。それ以外にも、図2に記載されている屋号からは、酒屋、紙屋、米屋、塩屋といった屋号を持つ店が軒を連ねて日用品・食料品などの販売が行われており、石屋や左官屋などの生活に欠かせない商売も営まれていたことや、物資運送の必要上問屋もおかれていたことが類推でき、人々が生活を行ううえで一定の機能が集まった場所であったことがわかった。

現内川	西坂巻家	松本家	根本家	中村家村役人	(武)坂巻家	奈良屋中村家	問屋坂巻家	安沢屋中村家	吉見屋阿久津家	高屋阿久津家	富屋高田家	石橋福島家	トナリ福島家	塩屋川島家	酒屋坂巻家	中村家	松屋大買家	亀屋坂巻家	角屋齊藤家	紙屋小野崎家	小野崎家	下堂端大谷津家	上堂端大谷津家	現塚原川
現内川	中屋中村家	玉屋中村家	小松屋小口家	鍋屋大谷津家	江戸屋大谷津家	大谷津家	住吉屋荒井家	丸屋宮崎家	宮崎家	関屋大島家	新屋川島家	左官屋福田家	柏屋宮崎家	いろは屋小田部家	宮崎家	鍛冶家宮崎家	米屋大谷津家	青山家	福田屋福田家	釜屋川島家	石屋川島家			現塚原川

図2 「江戸時代末期の矢板村宿割図」(『矢板市史』より作成)

3. 「矢板宿」の移り変わり

では、その「矢板宿」が、現代に至るまでどのような変遷を遂げてきたのか。私たちは『ゼンリン住宅地図』の各年度版を数年おきに参照し、土地利用の推移を調査した。その際、土地利用の種類を「個人商店」「事業所」「公共施設」「民家」「空き地・空き家・駐車場」に分類し、それぞれの数の移り変わりを図3のようにまとめた。

	個人商店	事業所	公共施設	民家	空き地・空き家・駐車場
1981年	5 2	8	0	1 2	2
1986年	4 9	5	0	1 2	5
1991年	4 1	6	0	2 1	4
1997年	3 5	6	1	2 4	8
2001年	2 7	8	2	2 7	9
2005年	2 3	6	2	3 4	7
2013年	1 9	7	2	3 4	9

図3 (『ゼンリン住宅地図』より作成)

これによると、個人商店の数は大きく減少し、民家を中心とした土地利用が増えていることがわかる。特にその変化が大きい時期として1991年から2001年にかけての時期が目につく。この時代背景を調べていく中で、私たちは「大店法(大規模小売店舗法)※1974年施行」の存在が影響を与えているのではないかと考えた。大店法は、対象となる店舗の新増設に関して、営業開始に先立って、店舗面積・開店日・営業時間・休業日などの届出を行うものであり、中小小売業の事業活動の保護を目的としていた法律だった。これが、1994年の大店法運用緩和通達により1000㎡未満の出店の原則自由化が認められるようになり、さらに「まちづくり3法」と呼ばれる大規模小売店舗立地法、改正都市計画法、中心市街地活性化法の施行により、大規模小売店の出店が抑制されなくなった。実際、先述の「ベイシア矢板店」「ヨークベニマル矢板店」が出店した年を調べると、それぞれ1994年・1996年となっており、個人商店が大きくその数を減らした時期と重なる。またこの時期は、国

民の自動車保有台数および保有率が大きく上昇した時期でもあり、モータリゼーションの進展に伴う店舗の郊外化、すなわち広大な駐車場を備えた店舗への消費者の移動が見られるようになったことも、個人商店の減少の一因になっていると考えられる。

4. 現在の「矢板宿」と現代に残る屋号

では、そのような変遷を見せてきた「矢板宿」は現在どうなっているのか。実際に街を歩くとともに、住宅地図やインターネット上の地図と照らし合わせながら、その土地利用の様子をまとめた(図4)。すると、やはり個人商店の数は多いとは言えず、中小規模の事業所や閉店した店舗、民家が数多く見られることがわかった。しかし店名に着目すると、現在も店名に屋号を冠していると思われる個人商店が三つあり(図4中の「★」)、そのうちの一つは図2の屋号とも一致していることが伺えた。私たちは、この三つの店舗は矢板宿の変遷を間近で見ているのではないかと考え、それぞれの店主にお話を伺った。

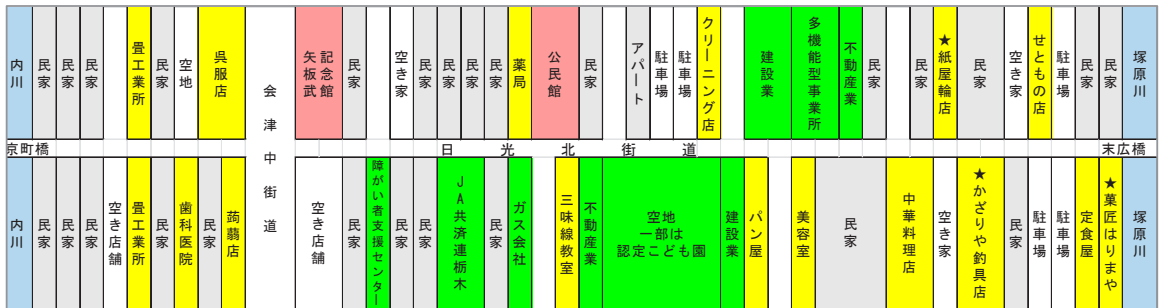


図4

① 紙屋輪店(図5)

紙屋輪店は店主が現在と異なり、昔は小野崎姓の地主が紙屋を営んでいたが、紙屋では生活を送ることが困難になったため、それまで鍛冶屋を営んでいた現店主の祖先を矢板に呼び、新しい事業として自転車屋を開業させたということが分かった。図4と図2の位置関係を比較すると、現在紙屋輪店がある場所に「紙屋 小野崎」とあり、その時代には既にこの地に店を構えており、当時から矢板を見守ってきたのだろうと考えられる。

② かざりや釣具店(図6)

かざりや釣具店は、店主の祖先がキセルや装飾品を作る職人であり、およそ100年前に現栃木県足利市から矢板に来て商売を始めたとのことだった。「かざりや」という屋号は、装飾品の職人であったことの名残として用い、キセルの需要が紙たばこに移ったこと、当時娯楽となるものが少なかったことなどから、現在の釣具屋を始めたらしい。

③ 菓匠はりまや(図7)

「はりまや」という店名(屋号)は、店主の祖先が歌舞伎役者であり、播磨屋(はりまや)一門に所属して活動していたことが由来であるらしい。その一座は会津まで巡業をしていたらしく、矢板宿を通過していた会津中街道が住民の生活に関わっていたことも確認できた。夫の収入だけでは食べていけなかった祖先の奥さんが饅頭を売りだしたことが、今の和菓子屋の元になったようだ。

いずれの店主も、昔は空き家などが多くなく、商店で溢れており、現在のように閑散としていなかったということを共通して言っていたのが印象的だった。



図 5



図 6



図 7

5. まとめ

矢板宿の今昔を比較してみて、かつて矢板宿は諸機能を備えた地域の中心だったと言えるかもしれないが、現在はそうとは言い難いと感じた。そうなった背景として、「ベシア（1994年開店）」、「ヨークベニマル（1996年開店）」などのスーパーができたことによって、商業の需要や消費者行動が変化していったことが挙げられるのではないかと考える。一方、地域の個人商店への聞き取り調査を通して、現在も屋号が残っている店舗はどれも事業を転換しており、世の中のニーズに合わせて柔軟に事業を変えていくことで、歴史ある屋号を今日まで残してきたことが分かった。

最後に。今回の研究を通して、私たちの「“まち”を見る目」が大きく変わったことを実感している。何気なく通り過ぎていた商店街の店舗や店名、屋号などに目が自然と向くようになり、その地域や店舗の歴史などに思いを巡らせるような習慣がついてしまった。この研究に触れてくださった方々の「“まち”を見る目」が、私たちのように少しでも今までと違うものになればいいなと、ひそかに願っている。

【参考文献】

- ・今昔マップ on the web (2024.6.9 閲覧) ・地理院地図 (2024.6.9 閲覧)
- ・Yahoo!マップ (2024.6.9 閲覧) ・総務省統計局ホームページ (2024.6.25 閲覧)
- ・日本自動車整備振興会連合会ホームページ (2024.6.25 閲覧)
- ・矢板市史編集委員会編『矢板市史』矢板市 1981年
- ・矢板市教育委員会編『ふるさと矢板のあゆみ』矢板市 1988年
- ・奥田久 監修『栃木の街道』栃木県文化協会 1978年
- ・矢板市教育委員会編『矢板市の古道』2012年
- ・満園勇『日本流通史 小売業の近現代』有斐閣 2021年
- ・田口浪三編『栃木県営業便覧』全国営業便覧発行所 1907年
- ・株式会社ゼンリン『ゼンリン住宅地図 栃木県矢板市』1981年・1986年・1991年・1997年・2001年・2005年・2013年
- ・「石碑で歴史再発見 目を引くピアノの形 「あゝ上野駅」作曲・荒井英一」
下野新聞 2023年5月21日 朝刊 p26

亜熱帯果樹アボカドの栽培について

～気候変動に具体的な対策と廃棄園芸資材の活用～

岐阜農林高等学校 3 年生物工学科 山本大翔 小川瑠偉 伊藤瑠璃子 河口琴子

1 はじめに

現在、地球温暖化の影響で岐阜地域でも平均気温が上昇しており、50 年後には平均気温が 4℃ 上昇するといわれている。そこで私たちは、気温が上昇した後の気候に適した新たな農作物として亜熱帯果樹であるアボカドの導入を考え、岐阜県農業技術センターと栽培における技術について情報交換し共同研究を行っている。今年度は主に「園芸廃棄資材の活用」を重点に研究を行うことで、SDGs 13「気候変動に具体的な対策を」と、SDGs 12「つくる責任 つかう責任」のゴールを設定し取り組んでいく。

2 研究計画

- (1) 日本熱帯果樹協会 会員交流会への参加
- (2) 園芸廃棄資材を活用した露地栽培試験
- (3) 苗木生産技術の確立（接ぎ木・挿し木・組織培養）
- (4) 外部機関との交流
 - a) 共同研究（岐阜大学・岐阜県農業技術センター）
 - b) 情報交換（琉球大学・鹿児島大学・静岡大学）

3 実施内容（令和 5 年～6 年）

- (1) 日本熱帯果樹協会会員交流会への参加

静岡県での視察

日時：令和 5 年 1 月 4 日（土）

場所：農業組合法人 大富農園（静岡県伊豆の国市）

内容：昨年度、静岡県大富農園を視察した際、鉄パイプを重石として用い、天井からの枝の誘引がされていた。今年度、流通科学科のポット柿園のハウスの一部お借用し、視察で得た先端的な技術を導入し、結実させたいと考えている。



図 1 巨大温室前

図 2 ポット栽培

図 3 地面誘引

図 4 天井誘引

この他にも、令和 5 年 7 月 15 日（土）～16 日（日）に鹿児島県ゆすむら農園他、令和 5 年 12 月 9 日（土）～10 日（日）に愛媛県アボカドラウンジ有田他、令和 6 年 1 月 6 日（土）に和歌山県橋爪農園を視察している。アボカドは日本における栽培技術が十分確立されているとは言い難く、最新の情報をこの交流会で入手して実践していく必要がある。

(2) 園芸廃棄資材を活用した露地栽培試験

a) 図書情報棟南花壇での露地栽培試験



図5 廃パイプ等で組み立てた囲い



図6 100Lポリポット栽培

令和5年の取り組みで、園芸科学科で廃棄されたビニールハウス側窓用パイプを5mに切断し囲いとして組み立てた後、使用済みの防虫ネットを防風用に西・南2面に囲った。上には直射日光を遮るための寒冷紗を付けた。

駐輪場の横で人通りも多いため、強風で倒れないよう側溝で下を固定し、上は誘引ひもで水道管に固定した。冬は園芸科学科で廃棄されるビニールハウス用端材のビニールで囲うことで、霜の被害もなく順調に生育している。ハウス栽培と比較すると以下の通り。

利点：冬はビニールを張り、夏は防虫ネットと寒冷紗に張り替えることで、苗の環境が整い、大きなハウス栽培よりも生育が良い。ビニールハウスでは防虫ネットへの張り替えは容易でないため、通年ビニールを張って管理することから猛暑で温度が高温となった場合枯れる場合もある。また、寒冷紗により夏に日焼けすることがなくなった。

欠点：一定の大きさの苗までしか栽培することができない。

b) 耕作放棄された柿畑での露地栽培試験



図7 廃材ポットによる栽培



図8 耕作放棄された柿畑



耕作放棄された柿畑の利用としてのモデルケースとなるようアボカド苗を移植して栽培試験を行っている。廃棄された戸襖を用いた900Lの鉢と廃棄された卓球台の板を8枚で囲った2000Lの鉢を用意。土は廃棄された園芸用培土で配合は以下の通り。水は雨水を溜めて、それを灌水する。令和6年からの栽培試験であることから現段階では検証結果は得られていない。

園芸廃棄培土の配合割合 (%)

ピートモス	55.8	ココピート	16.7	パーライト	9.3
山土	9.3	鹿沼土	4.2	バーミキュライト	4.7
※添加してある肥料		苦土石灰	1kg	ハイコントロールロング	100日 2kg

(3) 苗木生産技術の確立

アボカドの苗木は1本、4千円～1万円で高価であるため、アグリビジネスとして軌道に乗せるためには苗木生産を自前でできることが必須条件と考えられる。だが、アボカドは難発根性の植物であるため、他の樹木と比較して接ぎ木・挿し木共に難しいとされており苗木を鹿児島県ゆすむら農園で購入する農家が多いのが実情である。本校でも、接ぎ木においては台木と穂木がしっかりと接合するよう輪ゴムでしばったり、ビニールテープでしばったり、瞬間接着剤で固定するなど試験を行っているのだが全て枯れてしまっている。挿し木もホルモン剤の種類を変えて比較するなど行っているが枯れてしまい苗木の生産につながっていない。唯一、種による実生苗の生産は水耕栽培をしてから土に移植する形で確実に発芽させて生長させることができているが、実生苗のままでは花が咲かないため、接ぎ木の台木としての利用にとどまっている。



図9 人工気象器



図10 廃材を使った挿し木箱



図11 挿し木（鹿沼土を利用）

昨年度は、人工気象器を用いて湿度70% 温度25℃で管理したが1ヶ月たらずで枯死してしまったため、今年度は廃材を利用して挿し木を囲う箱を作り湿度を80℃以上に保ち挿し木を行っているが、温度が制御できないため最高最低温度計で計測すると最高温度が40℃に達している。現在、細い枝は枯れやすいことが分かり、1cmある太い径の枝の先をオキシペロンに5秒浸漬して挿し木を行っている。挿し木ができる農家は全国的に限られているが橋爪農園で、根が付くのは1年と言われているため現在の3年生は卒業前に確認することができない。

また組織培養で令和4年度に葉からカルスを誘導することに成功し、令和5年度では仮根と葉の再分化に成功した。しかし、これを鹿沼土に移植したら枯れてしまい、順化につながっていない。

(4) 外部機関との交流

a) 共同研究 (岐阜大学・岐阜県農業技術センター)

岐阜大学応用生物科学部園芸学研究室では、アボカドの葉から DNA を抽出し、苗の耐寒性などの判断に遺伝子解析を応用できないかを検証しており、令和3年から夏休みを中心に実験に参加している。岐阜県農業技術センターには、令和2年から栽培についての情報交換を行っていて、栽培の課題解決につながっている。



図12 左：農業技術センター研究員 図13 岐阜県農業技術センターアボカド農園

b) 情報交換 (鹿児島大学・静岡大学)

本校生物工学科は大学進学率が高く、本ゼミ生に至っては令和3年度4名・令和4年度2名・令和5年度3名が国立大学へ進学した。共同研究として位置付けている岐阜大学の他にも鹿児島大学・静岡大学ともアボカドに関する研究について情報交換を行っていることが、進路支援につながっている。



図14 鹿児島大学
園場 (香西直子氏)



図15 静岡大学
左：農学部 松本和浩 教授



図16 岐阜大学
左上：山田邦夫 教授

4 今後の課題と展望

岐阜県農業技術センター・岐阜大学、琉球大学・鹿児島大学・静岡大学とも情報等行いながら、日本熱帯果樹協会会員交流会等へ積極的に参加し、栽培技術について確立させる。現在、実生苗の生産について確実にいえるので、接ぎ木・挿し木についても確実にいえるよう栽培技術を高めていく。また、組織培養して得たカルスからの苗生産についても順化を成功させて実現する。

今年は2年目となるが花が咲き、一部人工授粉を行ったが結実しなかった。自然にいる虫などによる受粉は期待できないため、無加温のビニールハウスに苗を入れて、ミツバチによる受粉でアボカドを結実させたい。



図17 カルスから分化した葉 (左)



図18 アボカドの花 (右)



図19 アボカドの実
(岐阜県農業技術センター)

建長寺と幻の処刑場地獄谷

鎌倉学園高等学校

鈴木涼介 金丸大二朗

我々は、建長寺の隣にある鎌倉学園高校で学園生活を送っている。そして、高校一年生のある日、当時の担任であった山本先生が、「鎌倉時代、この場所は処刑場であり、プールを建設しようとして土地を掘り起こしたとき、大量の骨が出てきた。」と証言しており、我々はその処刑場に大いに興味を持ち、調べたところ、現在建長寺が建っているところに地獄谷処刑場が実在していたことがわかった。

では、建長寺について説明をしようと思う。建長寺は、建長寺派、鎌倉五山第一位であり、正式名称は巨福山建長寺国禅寺という。この寺は、慶長七年（1255年）に当時の執権であった北条時頼が、中国から渡来した蘭溪道隆を開山に迎えて後述する処刑場が存在した場所付近に建立させたとされている寺である。

次に、我々の研究の主題とも言える地獄谷処刑場について述べようと思う。この処刑場は、鎌倉時代の頃に建長寺周辺に存在していたと考えられている処刑場であり、この処刑場での死者を供養するために建長寺を建立させたとされている。

では、当時の処刑場がどのようなものであったのかを様々な面から推測し、考察していこうと思う。残念なことに、当時の処刑場を直接的に思わせるような資料や絵は殆ど残っていなかったため、当時の時代背景や周辺の遺跡、また、発見された数少ない関連していると思われる資料から、地獄谷について紐解くことにした。

まず、我々はこの地獄谷の位置関係や時代背景から読み取っていった。方言修金草姪鎌倉江ノ島廻りによると、北条時頼の時代、地蔵菩薩を信仰していた罪人齊田が処刑されようとしたところ、何回やっても刀が折れてしまったので、原因を調べたところ、首にかけていた地蔵が身を守っていた事がわかり、彼の信仰心に免じて処刑が中止されたという逸話が存在し、このときの地蔵が後に建長寺の本尊となったと述べられている。

このことから少なくとも、時頼の時代には、地獄谷が存在していたということが考えられるため、鎌倉時代中期には存在していたと考察することができる。

そして次に、この鎌倉という位置関係、または周辺の処刑場から地獄谷について見ていこうと思う。当時、鎌倉は日本の中心地とも呼べる存在であり、地獄谷以外にも処刑場が数カ所確認されている。

それでは、それらの処刑場についてそれぞれ見ていこうと思う。現在の片瀬周辺にあったとされている龍ノ口処刑場、現在の由比ヶ浜周辺にあったとされている由比ヶ浜処刑場、現在の化粧坂周辺にあったとされている葛原ヶ丘処刑場の3つが我々が知っている限りではある。これらの処刑場について詳しく見ていこうと思う。

まずは、龍ノ口処刑場から見ていこう。これは、鎌倉時代から室町時代の間が存在したといわれており、現在の龍口寺に石碑がたっている。しかし、当時処刑場がどこにあった

かというのは詳しくわかってはおらず、謎に包まれている。また、この処刑場では当時幕府を批判した日蓮宗の開祖である日蓮が処刑されようとしたときに、落雷が発生するなどの怪奇現象が連続して発生したため、処刑が中止されたという逸話が残っていることでも有名である。

次に、由比ヶ浜処刑場を見ていこうと思う。この場所は、現在海水浴で有名な場所であるが、鎌倉時代ではこの場所は多くの人々が殺された処刑場として有名である。また、この場所では御家人同士での殺し合いが頻発したことから、火葬場が近くにあったとされている。実際、遺跡調査の際に、遺骨が5000以上も発見され、それらの死者を弔うために六地藏が作られたと言われている。

続いては、葛原ヶ丘処刑場を見ていこうと思う。この処刑場では、後醍醐天皇の側近であった日野俊基が処刑され、彼を弔うべく葛原ヶ丘神社が建立されたと伝えられている。

最後に、厳密には処刑場ではないのだが、当時の墓地として有名なまんだら堂やぐら群についても触れていこうと思う。この墓地は、鎌倉七口の一つでもある名越切通に位置している。中世最大規模のやぐら群である。このやぐら群には、150穴のやぐらが残されており、これほどのやぐらは珍しいとされている。このやぐらは、本来非公開であり、入ることはできないのだが、4月後半から5月前半にかけて限定公開されたので、我々もここを訪れた。そしたら、そこには火葬したあとや、遺構から斬首されたと思われる頭蓋骨などが掘り出されたりしたことから、処刑場で処刑された者の遺体がこのやぐら群まで運ばれ、そこで火葬を施し、埋葬をしたのではないかとということが考えられる。

このように、当時の日本の中心地であった鎌倉に多くの処刑場があったことから、それほど罪を犯す者が多かった、もしくは、先述した日蓮のような幕府側に不都合な政敵が多かったということが考えられ、当時の処刑場は色んな意味で国の治安を守る一種の行政機関だったのではないかと考えられる。また、これらの処刑場は共通点として、大都市であった鎌倉からは離れた場所に位置しているというのがある。例えば、先述したまんだら堂やぐら群は、名越切通という逗子と鎌倉の境界付近に位置し、龍口寺も片瀬という海周辺に位置していたとされている。ましてや、我々の建長寺も鶴岡八幡宮から登ったところにある。これらの狙いとしては、汚れを土地に持ち込むことを不吉と考えたためであろう。更に、これらの処刑場の大半は建長寺のように犠牲者を弔うべく、後に寺が建立されており、建長寺は北、龍口寺は南に位置させ、鎌倉を義経や奥州藤原氏、処刑人達の怨霊から守る役割があったのではないかと考えられる。

では、次に鎌倉時代の処刑方法について考察していこうと思う。鎌倉時代の刑罰は、1232年に北条泰時が制定した御成敗式目に基づいて行われていた。主な刑罰としては、死罪、流罪、拘禁刑、財産刑が見受けられる。また、殺人を犯した者には斬首が課された。このことより、地獄谷処刑場しかり、他の処刑場においても、主に斬首で行っていたと思われる。このことは、先述したまんだら堂で発見された頭蓋骨からも推測することができる。

それでは、どのあたりに地獄谷が存在したのかについてより詳しく考察していこうと思う。江戸時代に延宝6年(1768年)に書かれた建長寺境内図によると、地獄谷の近くには、回春庵という寺がある事がわかった。そして、その回春庵は現在回春院として現存している。その回春院は普段、非公開であり入ることができないのだが、今回、調査のため

に特別に中に入ることができた。では、そもそも回春院とは一体何なのかを述べていこうと思う。回春院は、第二一世玉山徳旋の塔所として建立された。本尊は、文殊菩薩である。本尊の前にある池には、大亀がいるという伝説があり、別名亀池と名付けられている。話を戻して、我々は回収員にて地獄谷周辺を考察しながら探索することにした。地図によると、回春院から北西の方向に進んでいくと、「地獄谷埋残」と書いてあった。埋残は、おそらく処刑人を埋めた場所であったと考えられ、このあたりが処刑場であったのではないかと考えられる。そして、この回春院を進んでいくと、地獄谷埋残の地だと思われる場所を発見した。その入口は薄気味悪く、松の木が数本だけ生えていて、荒廃したかのようにになっていた。また、この周辺は蜂や蠅がかなりの数存在するため、少し薄気味悪かったというのを覚えている。しかし、道だけはある程度整備されており、刑場への道だったのではないかと考えられる。

次に、当時の地獄谷と、現在の建長寺を比較し、地理的關係を読み解いていこうと思う。すると、非常に衝撃的な事実が発覚した。なんと、江戸時代に書かれた地図に載っていた地獄谷の場所を現代の地図と合わせると、当時の地獄谷は現在鎌倉学園の野球部など運動部が普段使っている第二グラウンドという場所に重なるのだった。つまり、我が校の運動部は屍の上で部活を行っているということになる。

また、我々はその後の調査によって今まで謎に包まれていた建長寺付近で発掘された人骨について判明したことがいくつかある。「甦る鎌倉」－遺跡発掘の成果と伝世の名品－によると、一番最初に触れた1993年6月に実施された鎌倉学園体育館建築工事の際に、井戸、土壙、やぐらなどが発掘された。また、その井戸の中から骨壺や柿経という経文が書かれた木の板が見つかったそうだ。その骨壺の中身は残念ながら空であったそうだが、その中には当時住職であった僧の骨が入っていたのではないかと考えることができる。また、当時の建長寺には玉雲庵という寺があったことが見受けられるが、この骨壺や柿経の存在によって、玉雲庵が存在していたことは確定と見ていいだろう。しかし、処刑場との関連はあまり見受けられなかった。

今回の研究を通して、我々の周りにはかつて多くの処刑場が存在していたことから、数多くの亡霊に囲まれて学んでいるということを実感し、少し恐怖を覚えた。しかし、先述した体育館の下で発掘された骨や柿経と処刑場の関連はあまり詰めることができなかったので、どこかの機会により詰めていきたいと思う。

参考文献 <https://www.google.com/url?sa=i&url=https%3A%2F%2Ftanosii-kamakura.jp%2F%3Fp%3D65&psig=AOvVaw2gSuhBbQ1Kj9cARtythmF0&ust=1699670563833000&source=images&cd=vfe&opi=89978449&ved=0CBEQjRxqFwoTCLilirS0uIIDFQAAAAAdAAAAABAD>
<https://www.yoritomo-japan.com/tera-kentyotatyyu-kaishunin.htm>
https://kamakura8.blogspot.com/2014/11/blog-post_25.html
<https://www.kenchoji.com/about/ww.yoritomo-japan.com/nitirentatunokuti.htm>

<https://www.moj.go.jp/content/000080178.pdf>

<https://ameblo.jp/hananokotoba0131/entry-12595037636.html>

<https://4travel.jp/travelogue/11415937>

<http://www.tamagawa.ac.jp/sisetu/kyouken/kamakura/goseibaishikimoku><https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BB%BA%E9%95%B7%E5%AF%BA>

<https://dot.asahi.com/dot/2019091300037.html?page=1>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E6%AD%BB%E5%88%91>

https://kamakura8.blogspot.com/2014/11/blog-post_25.html

<http://tmkzogw.moe-nifty.com/walking/2021/05/post-c83314.html>



消えた徳山村と観光資源

～徳山民俗資料収蔵庫の再生と活用～

鶯谷高等学校

片桐 大吾

1.概要

このテーマを設定した発端は、昨年の冠山峠道路及びクラウンロードの開通に従い、沿線施設に興味を抱いたことである。調べる中で、沿線にある徳山民俗資料収蔵庫という施設が危機に瀕していることを知った。この論文では、この徳山民俗資料収蔵庫が抱える問題を明らかにし、それに対して解決策を提言していきたい。

2.冠山峠道路と徳山村について

冠山峠道路は昨年(2023年)11月19日に開通した道路で、岐阜県大垣市から福井県南条郡南越前町に至る国道417号線の一部である。従来、冠山峠付近は417号線の通行不能区間であったため、代替路として狭隘な林道を通らねばならず事故も多発していた。また、林道付近は豪雪地帯で、年間200日の通行止めが実施されていたため、両県の交通ネットワークは脆弱であった。だが冠山峠道路の開通により、所要時間の大幅な短縮や年間通しての通行が可能となった。特に岐阜県揖斐川町から福井県池田町に至るまでの道路はクラウンロードという愛称が付けられ、ドライブやツーリングのコースとして注目が集まっている。沿線の揖斐川町歴史民俗資料館の職員の方によると、両県間の往来は実に1.8倍になったという。クラウンロードは、これからの両県の交流を語る上でまさに欠かすことのできない道路である。

3.徳山村について

クラウンロード沿線には、かつて徳山村と呼ばれる村が位置した。徳山村は岐阜県の西濃北部に位置し(図1)、徳山、上開田(かみかいでん)、下開田(しもかいでん)、山手(やまて)、櫛原(はぜはら)、塚、戸入(とにゅう)、門入(かどにゅう)の八つの集落からなる村だった。村内面積の9割以上をブナやトチノキの樹林が占めており、古くからこれらの木々を用いた生活がなされてきた。村内では旧石器時代から縄文、弥生時代の遺跡が数多く発掘されており、数万年もの昔から人々がこの地の豊かな森林を利用しながら生活していたことが伺い知れる。しかし1957年、徳山村を丸ごと沈めてダムを建設するという事業が計画され、住民の反対もむなしく、1971年にダムは着工、徳山村の廃村に従い村民は移転を余儀なくされた。2008年、徳山ダムは日本最大の6億6000万立方メートルの総貯水量を誇るダムとして竣工した。この結果として数万年にわたって人々の営みが続けられてきた徳山という地が失われてしまったのは大変惜しい。



図1 徳山村の場所

4.徳山民俗資料収蔵庫について

1)概説

クラウンロード沿線の「道の駅 星のふる里ふじはし」の構内には徳山民俗資料収蔵庫という建物が建っており、当時の徳山村で用いられていた民具が収蔵されている。ここでいう民具とは、民俗学者の渋沢敬三が提唱した用語であり、端的に言えば日用品を指す言葉である。しかしこれは近代以降の大量生産社会におけるそれとは異なり、地域の風土や文化に応じて発展していった品々を指している。当収蔵庫は徳山村の廃村に際して、村の人々の生活の証を保存すべく建てられたものであり、収蔵されている民具 5890 点の全てが国の重要有形民俗文化財に指定されている。収蔵されている民具はどれも素朴でありながら、徳山という地の風土や文化によって形成されたものであって、まさにその地域を象徴するにふさわしい代物である。こうした民具は材料、成立過程等が様々であるが、ここでは 2 つの民具を例に挙げて紹介する。

一つ目はキリバン(図 2)である。見ただけではその用途が理解しにくいですが、用途はまな板と同じである。しかし、一般的なまな板の下に受け皿が付いたような形状をしており、一木から削り出されている。この受け皿の用途としては、切った食材を受けるため、あるいは食材から滲み出た水分を受けるためなど、様々な説がある。いずれにせよ他の地域では見られない独特の形状であり、先人達の創意工夫が窺える。

二つ目はツチブネ(図 3)である。これは名前の通り田圃の土を移動するのに用いられた民具である。これについて注目すべきは、その材料だ。ツチブネは、トチノキが朽ちてウロとなった物を切り出して活用している。先述の通り徳山村はトチノキの樹林に囲まれており、これらを古くから様々な形で利用してきた。ツチブネはその利用方法の一つだが、収蔵庫内にはこれ以外にもトチノキを材料に作られた民具が数多く存在する。また、トチノキの板材を切り出すのに用いた鋸も残されている。それらはダイギリやオガと呼ばれ、子供の背丈を超えるほど大きい。こうした民具達は、徳山村の樹林の豊かさ、そしてそれらをどんなふうに入者が利用してきたかを色濃く伝えてくれる。

このように徳山民俗資料収蔵庫に収蔵されている民具は、人々が徳山村の自然と工夫を重ねて生活を続けてきたことを今に伝える貴重な証なのである。

2)現状

だが徳山民俗資料収蔵庫は、現状二つの大きな問題を抱えている。まず一つは、5890 点の民具全てがむき出しの状態で開催されている点である(図 4)。収蔵庫内に入ると、入った人々は皆 5890 点という物量に圧倒されるのであるが、裏を返せばそれは展示



図 3 ツチブネ

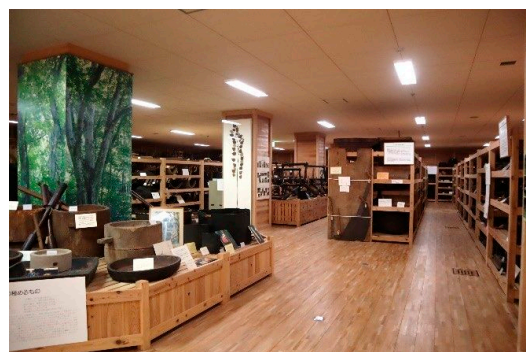


図 4 収蔵庫内

スペースとしては手狭ということである。また、むき出しの状態で置かれているために、観覧客が誤って民具に触れ、破壊してしまう懸念もある。実際、藁製品の中にはちぎれてしまっているものもある。

もう一つは、人手不足である。現在、収蔵庫の受付は三人が一日交代で番に当たっていらっしゃるのだが、受付の人が解説に回る事もあり、その際は監視の目が手薄になってしまう。収蔵庫で保管されているような民具はやはり貴重な物が多いため、こうして目の届かない内に盗まれてしまうこともあり得る。まして先述のようにむき出しの状態となつてはなおさら盗難リスクは高い。二つの問題について共通していえる課題は、「保存」と「公開」をいかに両立するかという点にある。

そもそも徳山民俗資料収蔵庫は名前の通り「収蔵庫」として、すなわち「保存」を目的として建てられた施設である。計画当初の予定にはないものの、最終的に一般公開するという運びとなったのは、ただ、開設当初の体制は今と異なり、土日祝日のみの公開で、高校生以上 300 円、小中学生 150 円という料金設定をしていた。だが現在では平日も公開する事となり、高校生以上 110 円、小中学生 50 円という料金に引き下げられている。これは人々により広く「公開」することにより、徳山村が存在したと言う事実を後世に長く語り伝えるという役割を果たすためである。しかしながら、「公開」が「保存」によからぬ影響を与えているのを見ると、今一度そのバランスを見直すべきではないかと思う。現状のままでは、徳山村そのものを徳山村やそこで生活を営んでいた人々の存在した証たる民具が後世に残っていないおそれがある。

3) 解決策

以上の問題を解決するため、まず一つ考えられる方法としては、「保存」のみを重視し、「収蔵庫」としてのみ運用することで民具を徹底的に守ることである。しかし、ここに新たな問題が生じる。本論中では何度も言及しているが、そもそもこの収蔵庫が建てられた理由は、民具を残していくことにとどまらず、民具を生み出し、それらを使用してきた徳山村の人々の生活の証を残すことである。こうした民具達が人の目に入らなくなってしまうと、その根本的な目的を達成する事ができない。ゆえに「保存」のみを重視するのは不適當である。先程も述べたように、この施設に必要なのは「保存」と「公開」の両立である。そこで考えられるのは、公開する民具を代表的な物に留め、それ以外の物は人の手に触れないようにするという方法だ。これならば、民具の崩壊の懸念及び盗難の危険性は格段に減り、展示スペースの拡大も期待される。問題は展示する民具としない民具をどのように分割するかである。収蔵庫内は空調設備によって空気が循環しているため、安易に庫内を分割したり、衝立を建てたりしたら、その分空調の効きが悪くなってしまう。愚案ながら、私がこれらに比べて理想的だと考えるのは網による区分けだ。こうすれば部屋中の空気の循環を妨げることなく、かつ人と民具との接触を抑えられる。

5. まとめ

これまで、徳山民俗資料収蔵庫が抱える問題、解決策について述べてきた。新たに開通し、注目が集まるクラウンロードの沿線にあることを考えると、更に多くの人々が来ることが期待できる。しかしながら現状の「公開」の体制は民具の崩壊、盗難などの危機を招く。私はこのままでは民具が崩壊することを懸念し、これを打破すべく解決策を提示した。この提言によって収蔵庫の保存性が向上すれば、より安全に多くの人々を呼び込む事が出来るだろう。

しかしながら、現状は休日でも 2~30 人ほどが来館するばかりで、お世辞にも多くの人々が来場しているとは言いがたい。今よりもっと多くの人に民具の魅力を知ってもらうためにも、私はもう一つ提言をしたい。それは、収蔵庫で保存されている民具（再現した製品）を道の駅で公開することであ



る。民具は使ってこそ長持ちするという。加えて、魅力を伝えるには実際に使ってもらうことほど手っ取り早いことは無い。独創性の高い民具、例えば先程挙げたキリバンなどは、今商品化しても実用性には申し分ないように思う。

以上2つの提言をまとめると、

- ① 民具の保存に資するため、展示スペースと保存スペースを網により区分けする
- ② 独創性に富んだ民具を再現し、道の駅で販売する

この提言をきっかけに、徳山民俗資料収蔵庫が「保存」と「公開」さらに「観光」を両立させたよりよい施設として生まれ変わり、今より大勢の人を呼び込む事ができれば、徳山村の民具の魅力は県内外に広まるであろう。こうして徳山村の民具が、そこに人々が生きたことの証として未来永劫残っていく事を切に願う。

最後に、この執筆にあたっては様々な方からのご協力を賜った。情報提供や収蔵庫内の撮影許可などを賜った揖斐川町歴史民俗資料館の小谷一一氏、収蔵庫において民具の解説を賜った中村一一氏に対して、心から感謝の意を表する。

<参考資料>

国土交通省近畿地方整備局、福井河川国道事務所(2023). 「国道 417 号 冠山峠道路 令和 5 年 1 1 月 1 9 日 (日) に開通します ～県境を結ぶ冬期の安定的な交通が確保されます～」. 国土交通省近畿地方整備局. <https://www.kkr.mlit.go.jp/fukui/press/r05/pdf/2023092901.pdf>, (参照 2024-06-01)

北陸新幹線の敦賀延伸と在来線や地方の在り方

石川県立金沢泉丘高等学校

森田 智也 粟田 貴大 秋田 陽平 安田 健能 小林 慶宣 石山 勝大 川崎 正照 藤本 真広

■イントロダクション

我々は、「北陸新幹線の敦賀延伸と在来線や地方の在り方」というテーマで研究を進めてきた。2024年3月の北陸新幹線の敦賀延伸から既に5ヶ月が経過した。この延伸により、北陸地方の交通の便がさらに向上した。それに伴い、並行在来線や北陸を訪れる観光客に影響が出ることが予想される。そこで私たちは、今回の敦賀延伸によってどのような影響が出るのか調べることにした。

本論文では、以下の流れで内容を進めていく。

1. 優等種別の変化
2. 在来線の変化
3. 新幹線の需要と石川県との関連
4. 開業後の在来線の運行
5. まとめ・提言

第1章 優等種別の変化

北陸から関東方面においては、北陸新幹線が2015年に延伸開業し、金沢～東京間を最速2時間25分で結んできた。敦賀延伸に伴い、金沢～東京間を直通する24往復の列車のうち14往復が敦賀まで延長運転される。

一方、関西方面へは特急サンダーバード号、名古屋方面へは特急しらさぎ号がそれぞれ運転され、各方面への長距離輸送を担ってきた。敦賀延伸後は新幹線つるぎ号が特急の役目を引き継ぎ、一部を除いて敦賀～富田で運転される。敦賀以南ではサンダーバード号及びしらさぎ号が引き続き運転される。敦賀ではつるぎ号の全列車がサンダーバード号に、また一部列車がしらさぎ号にも接続している。

■乗換に関する利便性の変化

大阪から観光地である能登地方の和倉温泉まで、延伸前は特定の特急サンダーバード号を利用すれば乗換なく移動することができた。現在は特急・新幹線・特急と少なくとも2回の乗換が必要である。また、移動手段に新幹線を利用すると以前よりも料金が高くなる場合がある。

第2章 在来線の変化

金沢から滋賀県の米原までは北陸本線としてJR西日本が経営し、当該区間の列車の運行なども同社が行ってきた。北陸新幹線敦賀延伸により、この区間のうち金沢～敦賀がJR西日本から切り離された。現在は、金沢から大聖寺までを「IR いしかわ鉄道」が、大聖寺から敦賀までを「ハピラインふくい」が分割してそれぞれ経営している。

特急列車がなくなったため、普通列車は待ち合わせの必要がなくなった。このため、敦賀～金沢間

で普通列車の所要時間が短縮された。また、敦賀～福井間では新たに快速列車の運転が始まった（後述）。これには特急料金なしで乗車できるため、利便性が向上したといえる。

第3章 新幹線の需要と石川県との関連

北陸新幹線の敦賀延伸により、北陸地方へのアクセスが一段と向上し、首都圏や関西圏からの観光客の増加が期待される。北陸新幹線の金沢開業以降、石川県への来訪者数は飛躍的に増加した。

■観光客数の増加と経済効果

石川県への来訪者数は、2010年比で2016年には135%に達し、観光客数が約35%増加した。これには、「日本の美は北陸にあり」というキャンペーンや、全国の駅へのポスター掲示、プレゼントキャンペーンの実施、企画商品の販売などの積極的なプロモーション活動が大きく寄与していると考えられる。

敦賀延伸による具体的な経済効果としては、首都圏・関西圏からのアクセス性向上により、石川県への来訪者が年間で69万人増加することが予測されている。これに伴い、宿泊・飲食などの消費が増加し、石川県全体で年間279億円の経済効果が見込まれている。

第4章 開業後の在来線の運行

北陸新幹線敦賀延伸後、在来線の運行形態にも大きな変化が生じた。特急列車の廃止により、普通列車が速達化される一方で、新たに快速列車が運行されるなど、地域の鉄道網が再編成された。

■普通列車の速達化

特急列車が廃止されたことで、普通列車が速達化され、所要時間が短縮された。

■運賃の値上がり

一方で、運賃は全体的に値上げされている。これは、特急利用客が新幹線や高速バスに移るために減少する運賃収入を補うため、と考えられる。特急料金が不要な快速列車を除いても、普通運賃が引き上げられており、地域住民にとっては経済的な負担が増す可能性がある。

■福井県内の事例

北陸新幹線の延伸に伴い、福井県の敦賀～福井間（54km）では快速運転が始まった。この区間は関ヶ原～名古屋間や明石～大阪間とほぼ同じ距離であり、比較的遠い。

以前は特急しらさぎ号や特急サンダーバード号などが長、中距離、普通列車が中、短距離の旅客輸送を担ってきた。ところが、北陸新幹線敦賀延伸に伴い敦賀～金沢間の特急列車が廃止された。

他方、福井県内のハピラインふくい線では朝夕に快速列車が新たに設定された。停車駅は敦賀、武生、鯖江、福井とかつての特急停車駅が選定され、県内の都市間輸送に貢献している。また、今庄、南条が新たに停車駅に加わった。両駅は特急停車駅ではなかったが、中距離利用者を快速に分散させることで福井市近郊の普通列車の混雑緩和に貢献している。

■石川県内では

上記の他、金沢～富山間でも有料快速が設定されている。一方、福井～金沢間（76.6km）はさらに長い距離でありながら快速は運行されていない。なぜか。IR いしかわ鉄道の代表取締役を務める七野氏は福井新聞の報道インタビューに答えている。主な理由は普通列車の利便性低下と赤字による運行コスト圧迫の必要性である。

特急が走っていた頃、普通列車は特急の待ち合わせに多くの時間を割いた。快速を運転すれば、同じように所要時間が延びかねないという懸念があるのだ。また、IR いしかわ鉄道は10年で45億円にものぼる赤字を見込んでいる。赤字を少しでも抑えるため、車輛や人員は必要最低限であるので、快速を運転する余裕がない、とのことだった。

第5章 まとめ・提言

■まとめ

北陸新幹線の延伸により、長距離移動が速達化した。しかし、乗換や値上がりなど、不便な点も生じた。在来線は特急列車が廃止されたことにより速達化するが、運賃が値上げされる。また、延伸後も新幹線の需要は高く、観光客の増加などの要因で大きな経済効果が期待される。また、IR いしかわ鉄道は、快速の運転にあまり前向きとは言えない。

■提言: 快速列車の運行とインフラ整備

私たちは、福井～金沢間に快速列車を設定することを提案したい。金沢への全体の通勤・通学客の約4割は金沢以南、つまり、福井と金沢の間の地域から来ており、通勤通学客にとって、快速の速達性は大きな利益になると考えられる。通勤・通学客の移動が効率化され、観光客の増加による経済効果も期待される。

一方で、福井～金沢間で快速列車を設定する際、主軸を担うIR いしかわ鉄道にとっての懸念点は、普通列車の所要時間増加に伴う利便性低下と、コスト増加による赤字拡大であった。しかし前者は、緩急接続の実施やパーク＆ライドの整備を進め、地域全体の交通網を効率化することで、打破することができると思う。

緩急接続は、快速などの速い列車と各駅停車のような遅い列車を隣合わせで停車させることで乗り換えやすくすることで、通過駅利用者の利便性を高めるものである。

パーク＆ライドは、駅周辺に駐車場を整備し、車から公共交通への乗り換えを促進するものであり、既に石川県内での例も存在している。これにより、車社会と言われる石川県でも公共交通の利用を促進することが容易となると考える。

結論

北陸新幹線の敦賀延伸により、北陸地方での遠距離移動における利便性が向上した。しかし一方で、運賃の値上げや特急列車の廃止による不便さも発生した。しかし、快速列車の導入やそのためのシステムの構築によって、これらのデメリットを克服し、地域全体の利便性と経済効果を向上させることが可能である。今後も地域の発展と住民の生活改善に向けて、継続的な調査と具体的な施策の実行が求められる。



参考文献

- ”北陸新幹線”. Wikipedia. <https://ja.wikipedia.org/wiki/北陸新幹線>, 令和 6 年 5 月 5 日参照。
- 「北陸新幹線時刻表」『北國新聞』2024 年（令和 6 年）3 月 16 日、北國新聞社
- “Yahoo!乗換案内”. Yahoo!Japan. <https://transit.yahoo.co.jp/>, 令和 6 年 5 月 5 日参照。
- JR 編成表、配置表.”特急おはよう・おやすみ EXP 料金表”. FC2WIKI.
<https://sirasagi683kei.wiki.fc2.com/wiki/特急おはよう・おやすみ EXP 料金表>, (参照 令和 5 年 11 月 5 日)
- “金沢駅 | 時刻表・運賃”. IR いしかわ鉄道株式会社. http://www.ishikawa-railway.jp/timetable/station/kanazawa_fare_t.html, (参照 令和 5 年 11 月 5 日)
- “あいの風ライナー”. Wikipedia. <https://ja.wikipedia.org/wiki/あいの風ライナー>, (参照 令和 5 年 11 月 5 日)
- “【全線時刻表】2023 あいの風とやま鉄道運行ダイヤ”. あいの風とやま鉄道株式会社.
<https://ainokaze.co.jp/wp-content/uploads/2023/03/8faba8dd1b8dce943776d3d9ee581a72.pdf>, (参照 令和 5 年 11 月 5 日)
- ”北陸新幹線開業後の沿線で宿泊者数推移に明暗変化、富山は開業前以下のレベルに減少 一日銀分析”. トラベルボイス. <https://www.travelvoice.jp/20161027-74280>, (参照 令和 5 年 11 月 21 日)
- ”北陸新幹線の特急料金の認可申請について”. 西日本旅客鉄道株式会社.
https://www.westjr.co.jp/press/article/items/230922_00_press_hokurikushinkansennotokkyuu_1.pdf, (参照 令和 5 年 11 月 20 日)
- “ハピラインふくい線”. Wikipedia. <https://ja.wikipedia.org/wiki/ハピラインふくい線>, 令和 6 年 5 月 5 日参照。
- “IR いしかわ鉄道、金沢以西を引き継ぎ「経営厳しくなる」 七野利明社長、イベント列車でハピラインふくいと連携へ”. 福井新聞. <https://www.fukuishimbun.co.jp/articles/-/1922822?page=2>, (参照 令和 6 年 5 月 5 日)
- “金沢駅 | 時刻表・運賃”. IR いしかわ鉄道株式会社. http://www.ishikawa-railway.jp/timetable/station/kanazawa_fare_t.html, (参照 令和 5 年 11 月 5 日)
- “よくあるご質問”. 株式会社ハピラインふくい. <https://www.hapi-line.co.jp/guide/faq/>, (参照 令和 5 年 11 月 5 日)
- “K パーク（金沢都市圏パーク・アンド・ライドシステム）”. 金沢市公共政策課.
<https://www4.city.kanazawa.lg.jp/soshikikarasagasu/kotsuseisakuka/gyomuannai/1/4/8015.html>, (参照 令和 5 年 11 月 5 日)

真・解釈長沼事件

～荒海村の古文書にみる問題解決へのアプローチ～

成田高等学校 社会科研究部 芝優太

はじめに

本件は長沼(現千葉県成田市)にて発生したひょうたん型の長沼の漁業権を巡る近隣諸村との争いである。そして、地租改正を発端とする官有地の下戻騒動までに至る様々な性格をはらんだ一連の出来事を指す。この長沼事件に関して通説(注1)では「長沼村の代表であった小川武平が福沢諭吉の『学問のすゝめ』を読み、福沢に助けを求め、福沢が長沼村の村民たちに手を貸すことで、明治9年、長沼村に沼の借地権が認められ、明治30年には排他的な利用権が認められる結果となった」と言われている。

これは「長沼村が主人公の物語」のように思える。しかし、本稿ではこういった一般的な事件の取り上げ方ではなく、長沼村に反対する村々の史料を用いながら長沼村と周辺諸村との争点を明らかにし、これまであまり取り上げられてこなかった事件の姿を示す。

1. 地租改正以前の長沼の利用について

なぜ、「長沼」が争点となったのか。これについては、双方の沼の利用方法の違いに尽きる。長沼村は沼を独占的に利用することで、沼での漁業や藻草の採取で生計を立てていた。一方で、周辺の村は自村を流れる川(根木名川・十日川 等)のはけ口としての遊水池の役割を大きく担っていた。関係する村々は、長沼に集まる川でつながっていて、長沼の流れがよどんでしまえば、自村の田に水がたまりやすくなり、悪水になってしまう。

つまり、長沼村にとっては沼がなければ生活がままならず、しかも他村に沼の利用を許しては「漁業や藻草の採取までされてしまうのではないか」という不信感も浮かび上がる。一方で、他村にとっては沼を長沼村に独占されては、思い通りに排水が進まず、自村の農業に差し支えるようになる。こういった理由が挙げられるのではないだろうか。この双方の思惑が対立することとなり、やがて激化する原因となったのは先述した地租改正である。

地租改正以前、古くから長沼村がその時々々の領主に対し年貢を納める事で、伝統的に長沼の独占的な利用権を得ており、周辺の村々は長沼村に下猟金を払う形で入猟していた。しかし、長沼村に下猟金を払いたくない村々は、度々長沼の入会地化を求めて訴訟を起こしていた(注2)。長沼を巡る一連の入会地騒動の流れは次のようになっている。

- ・宝永5年(1708) 長沼が長沼村の請地となり、漁猟採藻権(利用権)は長沼村に。
 - ・明和6年(1769)～安永6年(1777) 北羽鳥村農民が長沼の入会権を求めて奉行所へ訴え出る→北羽鳥村の敗訴
 - ・寛政2年(1790) 荒海村が長沼の入会を奉行所に訴える→沼縁りの村々も同様の行動に
 - ・寛政5年(1793)2月 長沼の入会権が認められる→6月 長沼利用権は再び長沼村へ
- 長沼村と周辺他村との長沼を巡るこの争いであったが、寛政5年(1793)には長沼村が一度敗北し長沼が入会地となるも、同年6月には長沼村の元へ帰ることとなった。つまりこれ

以降長沼村は江戸幕府から認められることとなり、一時の間長沼の占有という平和を手にすることができた。

2.再燃した長沼をめぐる対立

明治5年(1872)に長沼村は長沼の悪水路ざらいを千葉県庁から命ぜられるも、長沼村の力だけで到底できないとこれを断り、代わりに周辺の村々15か村が合同で作業を行なった。総勢1万4,234人であった(注3)。このことは、沼が長沼村の専有とは言い切れないという印象を、世間に示すこととなった。さらに、ここで周辺の村々に長沼の利用が可能となるチャンスが巡ってきた。同年に各地で地券が交付され、その後、地租改正が行われたが、これをきっかけに、明治7年(1874)12月には、長沼村の小川武平ほか2人が長沼村の専有権を県令柴原和に訴え、地租を納めることで専有権を得ようとした(注4)。

また、同年中に長沼村の村民らが沼の川船に乗って鼓を鳴らし、手には棍棒を持って下福田・宝田村の村民たちに向かって来襲してきたのだ。(時期は不明)(注3)

これは、これまで見られた農民一揆の典型的な例であり、いわゆる「脅し」や「威嚇」に近いものとなっている。後述するように、このようなことは全国各地で見られた。

・明治8年(1875)6月16日 長沼村の大木清三郎・小川武平らが、千葉県令柴原和へ、明治5年8月に行なわれた沼の悪水路浚いを、長沼村が断った理由を説明し、沼周辺の村々が協力し合って沼の浚いを行なったのは、単に水の通りをよくすることだけでなく、漁業や藻草の刈り取りができるよう狙っているとの疑念を示す(注5)。

・同年12月太政官布告第195号、太政官達第215号により長沼はすべて官有となり、長沼村が保有していた漁業権が消滅。漁業をするものはあらたに出願する義務が発生した。

これは明らかに長沼村にとって不利な状況に陥ったことが読み取れる。

・明治9年(1876)3月28日 長沼村が長沼の独占的な借用を求めて千葉県令柴原和に訴える文書(注6)を提出

その主張内容は大筋4つに要約できる。

(1)長沼は以前より長沼村が独占的に利用していて、旧領主へ税を納めていた。明治維新後も年貢米を上納していた。(2)明治6年の悪水路浚いについて長沼周辺の村々と紛糾し、この年の4月に年貢の免除が命じられた。それに対して、長沼村単独での負担を申し出た。(3)明治8年の第195号布告により、これは聞き届けられなかったが、長年にわたって沼に依存して生活をしてきたことから、村人の生活が成り立たなくなってしまう。そこで改めて今後長く長沼を拝借したい。(4)明治6年以来訴えを繰り返してきたのは、長沼が他村との入会になってしまうのではないかと恐れていたことで、この度沼の拝借を許されたならば、長沼村の村民は安心して生活できるようになる。

・同年3月31日 千葉県令柴原和から内務卿大久保利通へ「海面所用処分之儀ニ付伺」提出(注7)。提出内容は長沼をめぐる周辺村々の対立について千葉県は対応に苦慮しており、これに対し内務卿大久保利通は従来 of 慣行を尊重することを指示している。

・同年4月21日 荒海村が千葉県へ沼の借用出願(「借地追願」より)

・同年7月10日 長沼は官有地に編入されるが、5年ごとの契約で長沼村への貸与が認められ、漁業権の旧慣が尊重される形に**(事実上の官有宣言撤回か)**

・同年7月太政官達第74号では官有地の借用を届け出る制度の撤回が宣告された。

・同年8月 下福田村・宝田村・荒海村が千葉県令柴原和に「借地追願」を提出

借地追願にある主張内容は大きく分けて5つである。

(1) 沼が長沼村のものであるならば出願する必要はないはずなのに、出願したのは長沼村のものとは言いきれないとの認識を長沼村の人々は思っているからだ。

(2) もともと各村の地形は凹形であるため、もともと水はけが悪く、悪水がたまりやすい地形なのに、長沼村が長沼を利用するためにこれまで周辺村々へ妨害を繰り返したことは県庁もよく理解していることである。それは、明治5年までの長沼村の主張であり、最近では明治7年に起きた長沼村民による下福田・宝田両村へ対する妨害行為である。

「長沼村為ニ夥太ノ妨害ヲ被シハ官庁ノ公認セラルト如シ、遠クハ明治五年以前ノ拒障アリ、近クハ同七年ノ暴動アリ（長沼村民乗艦鳴鼓手提槍棒来襲、下福田・宝田両村人浚沼処）」（「借地追願」より）

(3) 周辺村々が求める治水は農業には利益があるが長沼村の人々の生活には不利になる一方、長沼村の主張に従うと周辺村々の農業には害が発生してしまう。

「之ヲ案スルニ治水ハ長沼村ノ営業ニ不利ニシテ外数村ノ農事ニ利アリ、之ニ反対（動）スレハ長沼村ニ利アツテ数ヶ村ニ害アリ」（「借地追願」より）

(4) 宝田村、下福田村、荒海村の農民たちが望むことは、1つは沼の排水をよくして自然災害を避け、2つに土地を改良して地味を良くすることである。それゆえに、肥料となる水草を採集して土地を肥やすことを求めている。同時に長沼村の暮らしを害することは望んでいない。だから、各村の権利を守りながら、互いに利益を享受するために沼を自由に利用できるようにするべきである。

「元来我々之期望スル処ハ、一ニ水利ヲ開通シテ天災ヲ避け、二ニ培糧ヲ究整シテ地害を怨ント欲ス、故ニ側ラ撮藻ヲ励務シ耕畝ノ豪肥妖饒ヲ要ス、又前ニ捕魚利ヲ害シ、且ツ長沼村ノ漁業ヲ妨クルヲ好マス、然トモ上頭ノ如キハ不得已ノ因情ニ起■（シカ）出願ニ及ヘリ、故ニ沼地一件ハ各村ノ権利ヲ保有シ互ニ其幾分ヲ配受シテ産業双方ノ自由ニ委ス可キヲ信ス」（「借地追願」より）

(5) 長沼は広大でとても長沼村だけでは管理できない。そのため、水草が堆積して腐り、沼の恵みが無駄になっている。沼面の半分を長沼に貸与するだけで十分である。

「該沼實際ニ就テ長沼村ノ得失ヲ視ニ、従前営業ノ位置ハ過大超闊ニシテ隻村ノ手ニ余レリ、故ニ藻草ノ類堆積シテ槩ニ腐朽セリ、其上長沼村ニ剩残アツテ他■（ノカ）村ニ闕乏ナル者ニシテ天ニ権衡ヲ失ヘリ、若シ沼地半面ヲ割テ長沼村ニ貸与スルモ決シテ営業ニ支間ナシ」（「借地追願」より）

3.ここまでの整理

ここまでの経緯をまとめると、明治8年12月太政官布告195号の長沼の官有地化の混乱に乗じて、周辺他村は県に長沼の借用を願い出ること、その利用ができるよう求めた。しかし、結果として明治9年に一旦沼は5年ごとの契約で長沼村に貸与されることとなった。沼は官有地であることには変わらないが、長沼村が持つ沼に対する従来からの権益を、県による長沼村への貸与の形で認められることになったのである。ところで、この長沼を巡る一連の出来事は長沼周辺の村だけに限った話ではないと思われる(注8)。今回取り上げた時代背景として地租改正が進められていく中で、全国各地で入会地をめぐる対立が起きていた。長沼事件と名づけられたこの争いは、実は全国的に巻き起こっていた問題の一例に過ぎないのではないだろうか。



4.歴史地理学的にみる「長沼事件」

成田市立図書館に所蔵されている『捕魚採藻之図』がある。この図については明治15年に制作されたもので翌年の第一回水産博覧会に出展された(注9)。作者や製作意図等是不明であるが、この図を見ると様々な情報が長沼村を中心にして示すように描かれている。略図という作者の意が出やすい性質上、この図は長沼と周辺の村の所在や長沼での漁業を紹介する地図としての役割を持ちながら、巧妙に「長沼村が長沼を自分たちのものであると主張する」ことを示唆した図であると推察できる。長沼村にはこういった争いを有利に運ぶ為の戦略性というものがうかがえる。これは福沢登場以前の長沼村には見られなかったことである。長沼村民らのこのような戦略の合理性が強まってきたのは、福澤の指導や指南によるものであるのは明らかである。とすると、長沼村に関係が深い人物が描いたのではないかと考察することができるのではないか。

歴史地理学的にみるとこういった事件の側面も浮かび上がらせることができる。

おわりに～問題解決へのアプローチとは～

長沼事件以降、この問題は再々燃することなく、各村の関係も「改善」された。しかし、「解決」したのかといえばそうではないのではないだろうか。事件発生周辺の地域で生まれ育った筆者にとってはこの事件のしこりやしがらみは完全には消え去っていないと感じている。現に福沢はこのぎくしゃくした関係に対し、対策を講じたことが明らかになっている(注10)。筆者の親族の話では、幼少期に長沼の人々と、対岸に位置する荒海の人々で長沼事件を話題にしながら泥団子を投げ合ったという話も残っている。

本研究を通じて、双方の意見をよく精査し、それでも相容れない場合、別の角度から歩み寄っていく必要がある。そこで新たな協力関係が生まれる。また、この対立関係には第三者の介入。所謂、仲介できる存在が双方の体制にたりなかったのではないか、ということ学び考えることができた。本研究では荒海村の史料を主に取り上げたことで通説とは違った視点を得ることができた。一方で、使用した史料の客観的な検証が、必ずしも十分とは言えなかった。今後の研究においては更なる史料批判の必要性を感じている。

歴史を研究すると新しい未来が見えてくると私は感じている。過去に答えは必ずある。これは私が歴史研究の道を突き進む原動力である。これからも研究を邁進していきたい。

(注1)慶応義塾大学通信教育課程 千葉県「長沼事件」(最終閲覧日2024年6月28日)

(注2)『成田市史 近世編史料集3』解説 10頁 1984 成田市史編さん委員会

(注3)成田山霊光館所蔵『長沼地借地につき追願』(成田市竜台 根本良三家)

(注4)「長沼正税復帰願」『成田市史近代編史料集5 76』1983 成田市史編さん委員会

(注5)「長沼悪水路についての意見」『成田市史 近代編史料集5 77』

(注6)「沼地拝借願」『成田市史 近代編資料集5 78』

(注7)長妻廣至「長沼事件拾遺—長沼における漁業を中心として—」

『成田市史研究8』1983 成田市史編さん委員会編

(注8)『山川出版社 詳説日本史探究』 240頁 山川出版社

(注9)堀充宏「成田市長沼集落と捕魚採藻之図 『むら』の多様性と現代民俗」

『成田市史研究28』2004 成田市史編さん委員会編

(注10)「明治10年11月14日自力社員の演説」,「契約書」『福沢諭吉と『非暴力』-学問のすゝめ150年 資料5-04,5-08』2022 福沢諭吉記念慶応義塾史展示館

ほらどのめぐみ 関市洞戸の未来を守りたい

岐阜県立関高等学校

西野華容 船木曜子

私たちは洞戸の地域活性化を目標に洞戸の特産品であるほらどキウイや観光資源を活用した活動を行ってきました。洞戸は岐阜県関市の北部に位置する地域で、板取川や溪谷などの自然や観光資源があります。しかし、そんな洞戸ですが現在は人口減少が進んでおり、11年間で21%減少して過疎化、高齢化などの問題が発生しています。これらの問題は地元経済と公共交通機関の衰退や農地の荒廃を引き起こします。そこで洞戸の未来を守るために、ほらどキウイの認知度を高めることと、観光客の増加、農家の後継者不足の解決を具体的な目標として地域活性化に取り組んできました。

初めに、ほらどキウイの認知度を上げるためにおこなった活動について話します。この活動は2018年から私たちの先輩が、関市の特産品であるほらどキウイを知ってもらい、地元の経済を盛り上げるために始めたものです。先輩方が行った活動はキウイを使用した焼き肉のたれを開発することです。加工品にすることで長く保存でき、いつでも販売することができるので、より多くの人にほらどキウイを知ってもらいきっかけになるからです。また、キウイにはお肉を柔らかくするアクチニジンという成分が含まれているので、その特徴を生かせるからです。「ばかたれ福ちゃん」、「焼き肉まるちゃん」、「JAめぐみの」といった事業者の方たちの協力で、2021年にほらタレ、ほらドレという名前で商品化することができました(右写真)。また、ふるさと納税の返礼品として提案し、さらに多くの人に手に取ってもらうことができました。



私たちはタレとドレッシングの販売開始の翌年に、この活動に参加しました。私たちの行ってきた活動について話します。私たちも地元のスーパーや直売店で、ほらドレほらタレの販売を行いました。そして、販売本数が2000本を突破しました。しかし、ほらどキウイ本来の魅力も広め、認知度を上げたいと感じるようになりました。そこでほらどキウイを使用したスイーツの販売を行うマルシェを企画しました。マルシェは、「ほらどのめぐみマルシェ」という名前で、昨年と今年の3月に2度開催しました。ほらタレ、ほらドレを使用しようとしたお弁当やキウイの販売も行い、1回目のマルシェではキウイ280個を使用した商品が約300個完売しました(文末写真)。

このマルシェで、ほらどキウイをもっと手軽に食べたいという意見をいただいたので、2回目のマルシェでは、ドライフルーツに加工したキウイを、「ヤマキマルシェ」をお願いして作っていただき、販売しました。ドライキウイなら手軽に食べられるだけでなく、保存

もでき、キウイそのものの魅力も広められると考えたからです。そしてキウイ 260 個を使用した商品が約 300 個完売し、ドライキウイも約 50 袋が完売しました。これらの活動により、地域の方からも県外の方からもほらドレ、ほらタレを手にとっていただくことができました。また、ほらどキウイそのものの魅力を伝え、興味を持ってもらうきっかけを作ることができました。

次に観光客の増加のために行った活動について話します。洞戸の魅力を動画にし、より広い範囲の人に興味を持ってもらえるように SNS を通してほらどの魅力を伝えました。インスタグラムでほらどキウイに関する投稿をしたり、YouTube に観光地を紹介する動画を投稿したりし、100 回以上再生されました。しかし実際に体験してみないと伝わらない魅力も伝えたいと考え、洞戸の自然とキウイの魅力を伝える親子ツアーを開催しました。このツアーは農家の後継者不足の解決にも繋がっています。

農家の後継者不足を解決するために行った活動について話します。親子ツアーは将来を担う子供世代に焦点を当てたものです。洞戸の自然を体感してもらうとともにほらどキウイの収穫体験と料理体験を行いました。これらの活動を通してキウイの栽培にも興味を持ってもらえると考えたからです。当日は 5 組の親子に参加してもらいました。また訪れたいや来年も開催してほしい、市民なのに知らない場所を知れたという声を頂きました。しかし、親子ツアーは、間接的に農家の後継者不足の解決に繋がるけれど、急いで解決しなければならない農家の後継者不足に直接的には繋がりませんでした。そこで、新たなアイデアとして、農園付きシェアハウスを提案します。収入が安定せず負担が大きいというイメージの農業を、手軽に始めることができたら解決に繋がると思うからです。シェアハウスとすることで農園の管理を交代でできたり、費用の負担も少なくなったりします。まだ、提案の段階なので、実現を目指して活動していきます。

私たちは活動を通してほらタレ、ほらドレやマルシェを通して、たくさんのほらどキウイの魅力を伝えるきっかけを提供できました。また、SNS や親子ツアーを通して洞戸の魅力を発信できました。活動を行っていく中で地域の人とも交流し、共にイベントを行っていく中で課題を共有することもできました。また、私たちの活動は身近な地域の問題ですが、世界の目標である SDGs にも繋がってくるとして行うことができました。そして、私たちが解決していかなければならない問題だと再認識することができました。さらに課題を見つけ、それを解決するだけでなく次につなげていく探究のサイクルにより活動の幅がひろがりました。

これからも大好きな洞戸の魅力を伝える活動を続けていきます。



楽しく学ぶをモットーに! 模擬国連×模擬市議会

岐阜県立関高等学校・岐阜県立加茂高等学校

古田真悠・大山絢女・後藤柚和・嶋田知紗・瀬戸口寛明・市原柊奈子

私たちは計 24 名の活動メンバーとともに、「模擬国連」というイベントを開催しています。岐阜県内の 3 校による共催 5 年前の 2019 年に先輩方から始まり、様々な変化を加えながら、これまでに計 8 回イベントを開催しました。

模擬国連とは、「国連総会などの国際会議を想定して、一国の大使の立場から、様々な議題についてのディスカッションをする」という活動です。しかし、私たちが開催する模擬国連は一味違います。ポイントは下記の 2 つです。

1. 参加対象を主に“中学生”としている点
2. 準備や運営を全て高校生が行っている点

こちらが活動記録です

		<議題>	<会場>
2019 年	第 1 回目	国連カフェメニュー	関市
2021 年	第 2 回目	国連カフェメニュー	関市
2022 年	第 3 回目	国連カフェメニュー	関市
2023 年 7 月	第 4 回目	国連カフェメニュー	関市
2023 年 8 月	第 5 回目	国連カフェメニュー	美濃加茂市
2023 年 12 月	第 6 回目	世界の教育問題	関市
2024 年 6 月	第 7 回目	国連カフェメニュー	郡上市
2024 年 7 月	第 8 回目	岐阜県の教育問題	関市

模擬国連には多くの魅力があり、また参加することで、普段得られないような有意義な経験をすることができます。しかし、どうしても「難しい」という印象を持たれやすいという課題があり、どうしても参加者の中学生に「楽しい、また参加したい」と思ってもらえるだろうかと頭を悩ませました。

何度もメンバーたちで話し合いをし「難しかったけど、楽しかった!」と思ってもらえるような会議にしようという方向性を固め、議題の適切なレベル設定や説明書類のわかりやすさにこだわるなど、運営側でできるサポートを精一杯行う上で、入門編から応用編まで様々な難易度の模擬国連を開催してきました。



私たちは現在、「グローバル課題」について考える模擬国連を開催しています。そこで、さらに地元へと視点をズームアップし、「地域課題」という身近な問題について話し合いたいという思いから、「模擬市議会」の開催を企画しました。そしていずれ、議決された課題に対しての政策案を、実際に「請願」というかたちで議会に提出することで、今後有権者となり、社会を作っていく私たち若者の、「社会参加意識」の向上にもつながるという展望を持っています。いきなり実現することは難しいため、まずは知識と経験を身に着けるため市議会議員の方々と交流したり、また、参加者を高校生に限定して練習会を行うなど、一步一步実現に向け歩みを進めています。

この活動を通して、活動メンバーの中にも、自らの意識が変わったり、将来の夢を見つけた生徒がいます。このように、この活動は、企画運営を行う私たちにとっても貴重な経験となっています。

また、現在私たちの住む関市や美濃加茂市では、政治の若返り化に向け動き出しており、町が変わり始めています。そのような動きに、私たちの活動はまさに一役を担うことができると考えています。

グローバルから地域まで、様々な問題に関して、中高生が集まり、楽しみながら学べ、深く考え議論できる場所としてこの活動を地域に根付かせていくこと。それが私たちの目指す未来です。今後もこの未来の実現に向け、活動に励んでいきます。

興味をもってくださった方はぜひ Instagram のフォローをお願いします！

Instagram ID : mun_mogikokuren

Instagram 名 : 関高×加茂高×郡上高 模擬国連 公式



↑ 地元の公共施設にて第3回目の模擬国連を開催した際の集合写真と運営の様子

新しい故郷と、原故郷のはざままで

— 鳥取に暮らす東日本大震災避難者/移動者たちの、これまでとこれから —

鳥取敬愛高等学校

河村 昌憲

2011年3月11日は、私たちの暮らす時代を画する、大きな出来事があった日です。

「東日本大震災」。昨年、私たちは、中国電力がかつて計画した青谷原子力発電所への反対運動を調査しました。原子力発電をテーマに活動する私たちにとって、東北沿岸部、特にフクシマの地を訪れることは必然でした。そして私たちは、今から5か月前、実際に福島県と宮城県を視察しました。当時、福島県で保健士として避難所運営に尽力した方、市の職員として被災者支援に奔走した方など、多くの人たちにインタビューを行うことができました。福島第一原発周辺の町では、店舗や家屋が放棄され、電柱は傾き、発電所につづく道路は嚴重に管理されていました。津波の被害は甚大で、震災遺構として見学できる施設は廃墟というほかありませんでした。

一方で、「復興」、と言える姿も目にしました。新しい道の駅はたくさんの人で賑わっていました。津波に飲まれた宮城の女川町は、津波対策を施したモダンな街に生まれ変わっていました。しかし、いくつかの映像が、私たちの脳裏に浮かんでくるんです。一つは、福島第一原発から少しでも離れようと避難する人たちの映像です。この車列の中で、恐怖と怒りに震えていた人たちは、このあとどこへ向かったのか。風上の新潟だろうか、人口の多い東京だろうか。もう一つは、着の身着のまま家を出て、見知らぬ土地へ避難してきた人たちの映像です。この、お年寄りや子供たちは、このあとどうなったのか。これらの映像が、被災地の「復興」の姿と、一致しないのです。そして、私たちにはある問いが浮かんできました。ひょっとして、故郷を遠く離れ、鳥取までやって来た人たちも、いるんじゃないか。鳥取で新しい生活を始めて、鳥取県民として、幸せに暮らしている方たちがいるんじゃないだろうか。の方たちと会うことができないか。会って、どんな12年間を鳥取の地で過ごしたのかを聞きたい。そして、得られるであろう回答はそのまま、自分たちが暮らす鳥取がどんな場所であるのかを映す鏡でもある。そしてもうひとつ。鳥取という見知らぬ土地で暮らすことを、支援した人たちの存在。支援する側がどんな思いで避難者支援に携わったのかを、直接聞きたい。私たちの目的は、公にされることが少ない避難者の、その後と現在を知り、可能な限りそれを、多くの人にも知ってもらうこと。高校生の私たちができる、最大の範囲での、ジャーナリズム。調査の方法は、まず、鳥取県に移動した避難者の人数を確認。同時に、避難した方々をめぐる先行研究の調査。そして、今も鳥取で暮らす避難者の方と、当時または現在支援を行っている方の双方にインタビューを行い、そこで語られた言葉を、何らかのかたちで、世に問う。私たちは、「インタビュー」を、主たる方法としました。数字は、鳥取県と復興庁の統計を利用しました。最大時が2012年の205人。そして今でも、約60人の方々が鳥取で生活していらっしやる。同時に、先行研究の調査も進めました。目的は、事実関係の整理と、課題となってい

ることの把握。そこでは、様々な団体の支援策が分析されていましたが、何よりも、アンケートやインタビューを通じた、県外避難者の生活状況や、心の問題が明らかにされていました。

私たちは、ある民間支援団体の方々にご協力いただき、東北出身の計3組・6名の避難者の方にインタビューを行うことができました。今回、インタビューに当たり私たちが心にとどめておいたのは、年々、講演会などで話してくださる避難者の方が減っている、という支援者の方の言葉でした。「10年以上が経つ今、自分はもう避難者と呼ばれることに、抵抗がある」、ということが、その理由です。私たちはこれ以後、「避難者」という語を使うことにためらいが生まれましたが、発表の便宜上、使用することをおことわりしておきます。私たちがどうしても聞きたかったことは、4つ。「なぜ鳥取だったんですか」。「どうやって心を保ったのか」。「今、お幸せですか」。そして最後に、「故郷へ帰りたいですか」、ということでした。

インタビューを受けてくださった最初の方は、矢野千代実さんです。震災当時、矢野さんは福島県会津坂下町で暮らしていました。お子さんと共に移住し、現在鳥取市内にお住まいです。とてもひょうきんな方でした。鳥取を選んだ理由、それは、「人間扱いをしてくれたから」。当時、矢野さんは、とにかく太平洋側を避け、福島から離れようと思いました。「原発がない所に行きたい！」日本海側を南下し、疲れ果て、鳥取までやってきました。そして矢野さんは、浦富の海を見て、泣いたそうです。「逃げた者の負い目」。

「避難とは、『捨てる』ということ」。こういう負の思考を切り捨てて行かないといけない。この苦しさを和らげてくれたのは、人と話す機会だったそうです。避難で途切れた就学。鳥取の高校で、わが子が、入学した学校に最後まで通い、卒業したのが、鳥取で初めてでした。最後の質問。「福島に帰りたいですか？」という問い。答えは、「全く帰りたいと思わない」。「今、私は鳥取にいて、鳥取が好きだ。」「『こんな何もない所へ来て…』、とよく言われるけど、鳥取には豊かな海や山がある。あり過ぎて、逆に皆さん、見えていないんじゃないですか？」と。インタビューの二組目は、鳥取に2015年と14年まで暮らし、それぞれ福島県郡山市といわき市に帰還した、片山春美さんと佐川晴香さんです。zoomを使ってのインタビューとなりました。片山さん親子は、2011年の夏、鳥取県・中山間地域振興課が実施したサマーキャンプへ参加しました。放射線量が高く、子どもを外遊びさせることが難しいなか、夏休みだけ、と思っていた鳥取に向かい、そのまま移住しました。当時、4歳と3歳の小さな娘さんを連れての決断でした。佐川さんは、震災発生の3日前、3月8日に出産し、その後12月に鳥取へ移住しました。二人とも、「毎日、被ばくによる死を意識していた」、とおっしゃいました。「究極の精神状態だった」、と。また、鳥取では、避難者同士の人々間関係に、苦しさを感じたこともあったそうです。現在、福島で暮らすお二人ですが、今も、スーパーで「県外産の商品を買ってしまう」そうです。原発事故以前、反原発運動をやっている人たちなんて、むしろ怖かった。けれど今、すべてがわかったと、苦しそうにお話くださいました。高校生のお二人は、とても明るい子たちでした。妹さんは、小学生になって福島の小学校に転校したとき、鳥取弁で自己紹介したら、みんなに笑われました。鳥取弁が標準語だと思っていたそうです。

最後にインタビューを行ったのは、現在、鹿野町で創作料理店を経営される、神山孝光さんです。震災時、宮城県石巻市にお住まいでした。住所は、生徒・教員84名が亡くな

ったあの大川小学校の近くです。5人の子どもさんと奥様の7人家族。当時、小学生から大学生までのお子さんたちでした。津波の直後、神山さんは、県外にいた大学生の息子さん以外、「みな死んだ」、と思ったそうです。何か所も、遺体安置所を探しました。結果、全員がなんとか家に戻ってきたけれど、高校2年生の息子さんが、普通の状態ではありませんでした。別の町の体育館で何日も過ごし、率先して食料を集め、途中、何百人もの遺体を目にして、家に帰ってきたときは、別人のようになっていました。診断は、パニック障害。「みんなを助けたいから、避難していたあの体育館に戻る！」と叫ぶ次男を、神山さんは柱に縛り付けました。それでも暴れる次男を殴って気を失わせて、着の身着のまま、わずかなお金をもって、家族全員で石巻を出たそうです。震災発生から、10日ほどが経っていました。日本海側を南下しました。富山を過ぎたころから、次男は「帰る」と言わなくなりました。宮城から遠く離れ、鳥取まで至りました。そして、少しでも身体を休めようと、東郷池の望湖楼で足湯に入ろうとしたとき、旅館の方に声をかけられたそうです。泥に汚れた服、宮城ナンバー…。ひょっとして、避難してこられたんですか？このとき、避難者が無料で宿泊できる鳥取県の制度を利用して、4日間、宿泊しました。女将さんが県にかけ合い、実現しました。神山さんたちは、この出会いで、緊張や不安がほぐれたそうです。そして泊まりながら、家族と今後のことを決めました。通過点と思っていた、鳥取にとどまる。高校生の次男は鳥取市内の高校へ編入学し、宮城で県立高校を合格していた次女も、同じ高校へ入学しました。鳥取に来てよかったことは、石巻のときより、親子の絆が深くなったこと。「いつ故郷に帰るのか」、と子どもから問い詰められることもあったが、話し合っ、決めていきました。今、石巻へ戻る意志は、全くないそうです。家族の一人でも亡くなっていたら、そこにとどまっていたかもしれない。全員が生きていたから、あそこを離れられた。「避難者ではなく、人間として見てもらえるとありがたい」、と神山さんは最後にお話してくださいました。

インタビューを行ったみなさんは、声の明るさに違いはあるけれど、自身が経験したことをはっきりとお話してくださいました。原子力災害と津波災害。原故郷に帰った方 / 帰らなかった方。それぞれに、とても似ているけど、違った世界を生きて、私たちが想像していなかった経験をしてこられました。もちろん、私たちが出会った方々は、数万人が広域避難したうちの、数字的にはごく一部です。聞いたお話を簡単に一般化することは間違いです。しかし、それでもみなさんのコトバは真実であると、私たちは感じました。

次にインタビューに向かったのは、震災の混乱の中で始まった、鳥取県の初動支援に携わった方たちのところ。震災発生時の、県行政の最前線はどうだったのか。

現在、鳥取県社会福祉協議会に勤める、新貞二さんです。当時、震災支援を担う県総務課の課長職にありました。着任は震災発生後の20日後、2011年4月1日。「支援策をどのように決めたのですか？」という質問に対する第一声は、意外なものでした。東北から、わざわざ鳥取まで避難者が来ることはないだろう。これが、着任直前の新さんや、課の全体が最初に思っていたことだったそうです。むしろ考えたのは、東北沿岸が被災したことで、取引のある鳥取の企業にどんな影響があるか。また、東北の被災企業を誘致することなどを、考えたそうです。確かにその通りでした。当時、こんな大規模な広域避難は、戦争中の疎開を除いて、ないのです。しかし、徐々に避難者が鳥取でも増えていることを把握した新さんは、複数の課と施策を実施していきました。「一番もめた」、とおっしゃって



いたのが、県営住宅を避難者の方に優先的に提供することでした。県民にたくさん入居を待っている人がいるのに、県外避難者を入れるのか、と反対する意見も多いなか、新さんは優先提供を押し通したそうです。そして、最大の課題は、個別の事情のある、避難者一人ひとりへの対応でした。県職員では対応できない。

そもそも無理だ。地元に対する思いがある人、東北の文化や気候がわかっていなければ、これはできない。そんななか、ある団体と、ある人に、白羽の矢が立ったのだそうです。「とっとり震災支援連絡協議会」。

場所は、私たちが毎朝登校する、鳥取市若桜通り。今回のインタビュー調査はすべて、このお二人と出会えたことで始まりました。支援員として活動されている、佐藤淳子さんと、大槻枝里佳さん。佐藤さんは福島、大槻さんは大阪のご出身です。佐藤さんは特に、結婚と同時に鳥取にやって来て以来、実に40年間鳥取で暮らし、震災発生時は、倉吉の「男女共同参画センター」で働いていました。県の委託事業を請け負い、避難者支援を行う組織を指揮できる人はあなたしかいない、と、新さんから要請を受けました。本当に様々なこととお聞きし、ここでは述べられないほどの多くの事実と、苦労をお話頂きました。避難者に顔と名前を覚えてもらうまでの苦労。一人ひとり異なるニーズの把握。避難者の心の苦しさが、自分の苦しみに変化してしまうことへの対処。私たちは、調査を終えるにあたり、先月29日、再度協議会を訪問し、佐藤さんにこんな質問をしました。もし、「あなたは鳥取県民ですか？」と聞かれたら、何と答えられますか？と。「はい、鳥取県民です」、という答えがすぐさま返ってくるかもしれないと、どこかで思っていました。ですが、真剣に悩まれ、長く考えられたあと、「あえて鳥取県民でない自分が支援にかかわっている方がよいと、思おうとしています」、と答えられました。「福島から鳥取に来ている私は、あなた方と同じ異邦人です。だが、自分はあなた方とは違って、避難者ではないのですよ。」こうすることで、避難者と、「よい距離感」を保ち、それがむしろ、よい人間関係や適切な支援につながれる。

日本中に、計り知れない衝撃と影響を与えた東日本大震災から、13年近く。私たちの住む鳥取も、一つの大きな主体となったことが、調査の過程で分かりました。最後に改めて考えたこと。それは、「故郷とは何か？」ということです。方言でしょうか。文化でしょうか。風景でしょうか。どれも間違いではありません。私たちはこれに、あと少し付け加えたい。ある場所で、今、暮らしているということ。ある場所で、今、頑張っているということ。鳥取という場所は、原故郷を離れた人たちの一部に、力を貸すことができた。これは間違いがない。一方で、多分ですが、私たちがお会いした避難者の方たちは、原故郷への思いは消えることはないと思います。同時に、鳥取への思いも、絶対に消えないと思うのです。私たちも同じでしょう。故郷は、複数あってもいいのだと思います。東日本大震災避難者のこれからと、私たちのこれからは、同じ場所を起点として、もう始まっているのではないのでしょうか。

復元の今

～金沢城二の丸御殿を通して～

金沢桜丘高校郷土研究部

吉政楓 上田梨桜

山本直幸 笹賀美羽

宮本莉奈 池田琴音

金沢桜丘高校郷土研究部は金沢城の復元に関して研究してきました。金沢城は古くから金沢の名所の一つですが、度重なる火災などによってその大半が焼失してしまっています。現在ある姿は、幾度も再建を繰り返してきた物です。

石川県は、2022年に行なわれた谷本元知事の会見で、金沢城二の丸御殿の「表向」復元整備に着手すると発表しました。現代における復元は安全性、防災設備、法律、バリアフリーなど配慮すべき点が多くあります。後世に伝えるべき歴史的な建造物としての面と石川屈指の観光スポットとしての面の双方に気を配った工事が必要です。私たちは金沢に住む高校生として、様々な視点から金沢城、特に二の丸御殿の今後の復元について考えてみることにしました。

石川県が発表している二の丸御殿復元整備の内容を踏まえ、前半では、「今まではどのように復元作業が行われていたか」、「二の丸御殿は歴史的に見てどのような場所だったか」、「バリアフリーと歴史的価値とのバランスについての工夫」という流れで研究していきたいと思います。後半では、前半の研究で得られた復元の方向性を踏まえつつ、具体的にどのように復元をするべきかという提言内容を考察していきます。

1、今まではどのような復元が行われていたか

実際に現地に足を運び、これまでに復元された部分について考察しました。

○菱櫓について

菱櫓は、武器を保管する倉庫、のちに物見やぐらとしての役割を果たしていた建物です。こちらは車いすを二階に上げるための昇降機が設置されているのを確認できました。建物全体及び、柱、出窓などがひし形なのは菱櫓の語源ともなっている重要な要素で、こちらは忠実に再現されています。高度な技術が必要な構造ですが、専門の職人の手によって正確に再現されています。

○河北門について

河北門は金沢城の実質的な正門であり、高い防御機能を備えた建造物です。

建築基準法では安全面について構造に指定があり、柱の本数が史実とは異なっています。また消防法により排煙の穴を開けてあり、スロープがありました。河北門は石川門と対照的な構造で作られているという情報が残っており、資料にない部分は石川門の作りを参考に、同じような工法を用いて建てられているそうです。

○鼠多門・鼠多門橋について

ここでは二つの昇降機とスロープが設置されている点、安全基準等を満たすために鋼構造にしてある点や、昔は堀だった橋の下が現在は車道になっているため車が通りやすいように二メートル程度底上げされていることが分かりました。しかしスロープは新たに作られたものとして認識できるように材料や外観を現代的にしてあったり、鋼材を木で覆って周囲との調和が意識されていたりと、景観保全への配慮が随所にうかがえました。また、この場所は城内の他の門と違って海鼠壁の目地が黒漆喰で仕上げられています。

次に、これまでバリアフリーを取り入れた工事をどのように行っていたか、また工事で工夫していた点などを知りたいと考え、実際に金沢城の復元に携わっていた方である川元建設会長の川元傳さんにインタビューを行いました。

川元さんのお話によると、詳細な建築方法が不明な部分は、同年代に作られたと予想される石川門の年代の工法に合わせて作るなどの工夫を取り入れていたそうです。図面ではすでにバリアフリー設備の構造が記載されており、設計段階でよく練られているため、バリアフリー構造が歴史的構造を損なう部分はほとんどないそうです。

川元さんは復元にあたって金物を使わず、必ず石川県産の素材を使うなど史実に基づき城の建設を手掛けています。100年後に金沢城が国宝に指定されることを目指して、県民に寄り添いながら川元さんは現在も金沢城の復元に努めています。

2、二の丸御殿は歴史的に見てどのような場所だったか

復元の順番で最初に「表向」が再建される理由としては、二の丸御殿の玄関であること、多くの資料が残っていること、二の丸御殿の中でも変化が少ないことがあげられます。二の丸御殿の図面は多く残っていますが、史実に忠実に設計するために、発掘調査で分かった遺構などと照らし合わせながら、残されている図面の信ぴょう性を確かめています。

二の丸御殿の特徴として、著名な職人による数多くの装飾品があります。それらについても可能な限り再現するため、御殿の細部仕様について、現地を指揮した技術者の立場から御大工がまとめた資料が参考にされています。

この資料から細かな装飾が判明したことで、現在犀川近くにある中村神社に同じものが移築されて使われていることが分かりました。こうして焼失以前の二の丸御殿の一部が見つかったことで、より史実性の高い復元が可能になりました。

3、バリアフリーと歴史的価値とのバランスについての工夫

バランスについて考えるため、前金沢城調査研究所所長、木越隆三さんにインタビューを行いました。それによると、バリアフリーとの調和は復元するときの一番の課題であること、金沢城は、内部まで本物志向で復元しているが、バリアフリーは必要であるため、実際に足を運ぶ一般の人たちの意見を求める必要があることなどが分かりました。城郭建築では、敵をいかにして城内に入れない構造にするかが重要ですが、観光施設のバリアフリー構造では誰もが訪れやすいものにする必要があります。互いに相反する二つの概念を、どう調和を保ちつつ共存させるかが課題となると思われます。

それでは、金沢城のバリアフリーはなぜ多くの観光客に受け入れられているのでしょうか。金沢城の復元では史実に忠実に再現することが方針となっており、実現のために数多くの工夫がなされています。金沢城でのバリアフリーの工夫について知るために金沢城管理事務所の日出平さんにインタビューを行いました。

特に私たちが注目したのは、建物の構造以外での工夫と、バリアフリー設備の設置場所の工夫の二点です。まず、建物の構造以外で見られた工夫は、車いす専用マップの作成です。バリアフリー設備により道の傾斜が緩やかにされているルートを示すことによって、車いすで移動する人々が観光しやすいようになっています。回りやすいルートをあらかじめ提示しておくことで、バリアフリー設備を必要最低限に絞ることができ、景観保全につながる上、費用を削減することができます。

また、五十間長屋にはエレベーターが設置されています。このエレベーターが設置されている場所はもともと荷物の下ろし場として使われており、最初から構造が吹き抜けになっていました。このよ

うに、元の構造を利用したバリアフリー設備を設置することによって、本来の構造への影響が抑えられています。

次に、他県でのバリアフリー化の事例について調べました。

長野県善光寺では、1997年に、善光寺は当時ほとんど行われていなかった国宝に対するバリアフリー化を進めました。建物を保護するため、本堂本体にはまったく手を加えずに、仮設建造物の形をとることでスロープの設置に成功しています。

スロープは、本堂と一体化しているようで、実は着脱可能になっています。また、仮設スロープ以外にもバリアフリー板や案内板を設置しました。これらによって、障害のある参拝者でも、本堂に入り参拝することができます。

松本城では、園路の簡易舗装がされていないところにマットを敷くことでベビーカーや車いすに配慮しています。天守を保護するためエレベーターは作っていませんが、ホームページに、「空から見る松本城」と題してストリートビューなどを公開し、天守に入れない人向けのサービスをしています。また、スマホアプリでは、焼失した建物などの姿を楽しめるようになっています。

以上二つの建造物からは、さまざまな取り組みが見受けられました。これらのものはいずれもこれからの金沢城に活用できる内容ですが、私たちはこの中で特にVR、AR技術の活用についてももう少し掘り下げてみようと思いました。金沢城にはARを活用した「金沢城ARアプリ」がすでにあるからです。しかし、石川県公式ホームページによると、このアプリはバリアフリールートの案内を目的とするものではなく、普通の観光案内では満足できない人向けに開発されたものであるそうです。

内容としては、貴重な写真や絵図を大量に使用し、特色ある場所についての補足情報をスマホ画面から見られる仕様です。かなり充実したコンテンツ量ではありますが、先ほどの松本城のVRアプリと比べると機能が少なく感じられました。このアプリをアップデートして、バリアフリーに活用できれば、より多くの方がアプリを利用でき、訪れやすい施設になるのではないのでしょうか。

これを実現するにはAR(拡張現実)の技術に加えて、VR(仮想現実)の要素を取り入れる必要があるので時間がかかりますが、既存のアプリケーションでの開発基盤があるので不可能ではないことだと思われれます。

以上の内容を踏まえ、最後に研究のまとめです。

金沢城は貴重な建造物であると同時に県民のための城であり、多くの人が利用できるようにするためにバリアフリー設備が必要不可欠です。しかし、それによって二の丸御殿の歴史的景観が損なわれるようなことはあってはなりません。御殿は平屋建築であるため必要な設備はスロープ、手すり、段差の解消などに絞られます。歴史的景観や建物の構造を害さないように、景観に合わせた木目調のデザインを施し、スロープにおいては着脱可能のものを設置することを提案します。

また、構造以外の工夫としてAR技術を活用したサービスを3つ提案します。1つ目は、金沢城の特定のスポットに立ち、アプリを開くと復元前のその地点の様子を知ることができるもの。2つ目は、体の不自由な人でも通りやすいルートを位置情報と連携して案内してくれるサービスです。また、目が不自由な人のために音声ガイドも必要です。最後に、バリアフリー設備を設置できず実際に訪問することが難しい場所では、アプリの位置情報と連携し、内部のVR映像を端末から見られるようにすることで、金沢城を堪能することができるのではないのでしょうか。

未来へより良い形で歴史を残していくため、これからの金沢城の復元プロジェクトが柔軟な視点から行われていくことを願います。



参考

https://roadtrip-ishikawafukui.jp/assets/images/winter/1/trip1_slider01.jpg

<https://travel.watch.impress.co.jp/img/trw/list/1378/847/01.jpg>

https://kanazawa.hakuichi.co.jp/upload/save_image/blog/08190931_5f3c72c8c43d4.jpg

<https://www.hot->

[ishikawa.jp/image/rendering/attraction_image/1171/trim.900/3/2?v=ef7d95dc9363a753d4014da9a5b974a38418e1a7](https://www.hot-ishikawa.jp/image/rendering/attraction_image/1171/trim.900/3/2?v=ef7d95dc9363a753d4014da9a5b974a38418e1a7)

<https://img->

cdn.guide.travel.co.jp/article/1129/44298/F8AE6293F85A4B7BB24C897E7831A143_L.jpg

<https://www.hokurikushinkansen-navi.jp/dataa/news/photo/NEWS000002461801.jpg>

<https://cdn.mainichi.jp/vol1/2020/02/02/20200202ddk17040282000p/9.jpg?1>

<https://www.tkbc.jp/hasizumeiti.jpg>

https://towa-seisakusho.com/wp/wp-content/uploads/2017/02/Fotolia_104356362_XS.jpg

<http://www.pref.ishikawa.jp/siro-niwa/kanazawajou>

よみがえる金沢城 (1)(2)

石川県金沢城調査研究所 編

金沢城調査研究所 木越隆三さん

加藤克郎さん

都市と遺跡

～川崎における過去との共生～

法政大学第二高等学校
社会科学・歴史研究部

1. はじめに

私たち法政大学第二中・高等学校社会科学・歴史研究部は、「高校生の視点で、地域の歴史と社会問題を掘りおこす」ことを目標に活動している。今年度、私たちは古代官衙跡である「橋樹官衙遺跡」と古代寺院「影向寺」を研究テーマに設定した。影向寺の発掘調査の成果を明らかにし、現代における地域史の継承や開発・保存に関する課題について考えていきたい。

橋樹郡家跡とそこに隣接する影向寺の一部は「古代地方行政機関と寺院との密接な関係性を示す官衙遺跡群として高い歴史的価値を有している」として2015(平成27)年に国史跡に指定された。2008年には「たちばな古代の丘公園」として整備され、2024年、全国初である飛鳥時代の正倉が復元された。

2. 影向寺遺跡出土遺物と法政二高

社会科学・歴史研究部の部室には数箱のコンテナが積み、長年誰も触れることなく保管されている。歴代のOBたちもその存在は知っていたものの、開けられることはなく、これまで具体的に調査が行われることはなかった。

コンテナを開けてみると、当時ものと思われる「影向寺」と書かれた札が残っていた。当時を知る歴史研究部OBに聞き取りをおこなったところ、①かつて歴史研究部が1974～1977年の間、部活動として独自に調査していた、②調査は影向寺の発掘調査がおこなわれる以前で、歴史研究部が調査資料として表面採集し、持ち帰っていたことがわかった。

【資料1】歴史研究部に積まれていた瓦



3. 橋樹官衙遺跡群及び影向寺遺跡

(1) 橋樹官衙遺跡群・影向寺遺跡とは
橋樹官衙遺跡群は、多摩丘陵上であり、東側に広がる多摩川によって形成された沖積低地と多摩川を見下ろすことのできる場所に位置している。この遺跡群は主に千年伊勢山台遺跡(橋樹郡家跡)と古代寺院である影向寺遺跡の2つの遺跡より構成されている(資料1)。また周辺には縄文時代の遺跡から、古墳時代の古墳などが点在している。周辺に位置している馬絹遺跡は造成時期が7世紀であったことがわかっており、橋樹官衙成立との関連が指摘されている。千年伊勢山台遺跡は、1996年の宅地造成の際に行われる発掘調査でその存在が明らかになった。影向寺は、江戸時代には古瓦が見つかったことが当時の文献に残されている。

【資料2】橋樹郡衙遺跡と影向寺遺跡の立地 国土地理院地図より作成



(2) 史料からみる古代橘樹地域

橘樹の地域に関する記述が初めて登場するのは『日本書紀』安閑天皇元年(534年)である。笠原直使主(かさはらのあたのおみ)と同族の小杵(おき)が武蔵国造の地位を争った武蔵国造の乱で、朝廷の援助を受けて争いに勝利した笠原直使主が、その礼として横渟屯倉・橘花屯倉・多氷屯倉・倉樸屯倉を献上したとある。「屯倉」とは、大化の改新以前の倭王権の「政治的軍事拠点」「貢納奉仕の拠点」ともいわれている。この橘花屯倉は、「たちばな」という音の共通性などから、橘花屯倉が武蔵国橘樹郡に所在していたと考えられている。他にも、『万葉集』巻20の4419と4420番歌から天平勝宝七歳(755)年に詠まれた防人の歌には「橘樹郡上丁(かみつよほろ)物部真根」とその妻「棕椅部(くらはしべ)」という名前が確認でき、古代の川崎地域には複数の氏族が存在していたことがわかる。『続日本紀』には、神護景雲2年(768年)に武蔵国橘樹郡の人物として「飛鳥部吉志五百国」が白雉を献上し、位階を授けられたことが記述されているが、「飛鳥部吉志」は渡来系氏族であると考えられている。また、正倉院宝物である「武蔵国調庸合成布墨書銘」からも「武蔵国橘樹郡橘樹郷刑部直」という氏族がいたことが伺える。

このように古代の記録からは、8世紀には橘樹の地において複数の氏族が並立していたことがわかる。

(3) 橘樹官衙遺跡群及び影向寺の発掘調査について

1987年2月、川崎市高津区の台地裾部において、民間の調査機関がマンション建設に先行して発掘したところ、総柱掘立柱建物跡1棟と側柱建物跡2棟が発見された(蓮乗院北遺跡)。総柱の掘立柱建物は正方形が多く、直線で結んだ建物内にも同じ太さの柱が建てられていることから、納税物の穀物などの格納した高床式倉庫の可能性があり、正倉院的な役割を担っていた場所なのではないかと考えられた。

1998年から2003年にかけて、川崎市教育委員会による遺跡の本格的な発掘調査が行われ、調査の結果、総柱の掘立柱建物が21棟、側柱の掘立柱建物が20棟以上、床束(床下に柱・構造上は床張り)の掘立柱建物が1棟、堀が8条、溝が8条確認された。土師器・須恵器のほか、郡に勤務する役人などが使用する円形の硯や鉄製の刀、鉄釘が出土している。そして将来に向けて保全・整備すべきという考えから、正倉跡などの古代の遺構より深く掘り進むことは原則的に自重された。現在に至るまで多くの調査が行われ、千年伊勢山台遺跡の正倉院郡跡をはじめとした、橘樹郡衙の全貌が判明しつつある。

(4) 影向寺における発掘調査と成果

大正時代から影向寺内にある影向石や寺所蔵の二種類の巴瓦(軒丸瓦)、「都」の文字が刻まれた文字瓦などから武蔵国分寺との関係に着目した研究が行われてきたが、1975年、境内を少し外した北側の畑地の発掘調査が実施された。狭い範囲ながら、掘立柱建物跡や竪穴式住居跡、古代の鎧瓦(軒丸瓦)、鉄製品(バックル状製品)など多くが初めて発掘された。鎧瓦の時期は7世紀後半という最古級のものであると推測され、本格的な発掘調査がおこなわれるようになる。川崎市教育委員会が主体となり1977年～1981年にかけて実施された影向寺文化財総合調査では、大型の掘立柱建物が発掘され、奈良時代のものでされる金堂や塔より以前に建てられたものだと考えられた。また、発掘によって現薬師寺に至る変遷が4つの時期に分類できることも判明した。さらに「无射志国荏原評(むざしこくえばらこほり)」と篋で書かれた文字瓦が確認されたことは大きな発見となった。「无射志国」は「武蔵国」のことで、「荏原」というのは多摩川を挟んだ対岸にある現存する地名である。「荏原」の地名をもつ瓦が発見されたことから、古代における橘樹郡と荏原郡との間に、一定の連帯性があったことが読み取れる。大宝律令(701年～)で「郡」に改められた「評」の銘が確認されることから、古代影向寺の成立は7世紀後半ごろと推測されている。「都」銘瓦も存在するため、評や郡の領域を超えた公的・官寺的な機能があったのではないか、善業を積むため荏原評・都筑評から物品を受け入れる智識寺院であったのではないかなどの、古代影向寺の社会的な役割や様相について考察されている。

4. 法政二高所蔵の影向寺瓦の調査と成果－専修大学考古学ゼミ生との学習から考える古代瓦－

瓦の整理にあたって、専修大学考古学(小林孝秀准教授・専門東アジア考古学)のゼミ生の方々に来ていただき、瓦の整理の方法や瓦について学ぶ機会を得た。そこから以下のことが分かった。

- ・影向寺遺物は、瓦を主体とするが、瓦のほかにも須恵器、縄文、弥生土器も混在している。
- ・瓦は大きく分けて平瓦と丸瓦に分けることができる。軒先に設置される瓦には意匠が施される場合があるが、法政二高の影向寺の瓦の多くは無文の軒丸・軒平瓦の破片で、文様は見られなかった。
- ・布目のついた瓦が数点、軒平瓦の弧文線の破片が複数点確認することができた。これらが年代を特定するうえで鍵となる。軒平瓦の流線は単純なものなので古代瓦の特徴である。そのほかにも、布平瓦には格子文様と斜格子文様があり、幅が異なっているので年代差があるものと思われる。

この時代に瓦を葺くことは寺院以外には考えられず、古代の影向寺も瓦葺きであったといえる。また瓦の製造方法をみると、同じ范型なのか、それは何種類あるのか、どこの窯跡なのかかわかり、瓦がどのように運ばれたのか推測することができることも分かった。今後は法政二高が所蔵する古代瓦を整理・分類してその特徴を明らかにしたり、瓦の年代観や産地などについて考えていきたい。

5. 現地調査（フィールドワーク）の成果から

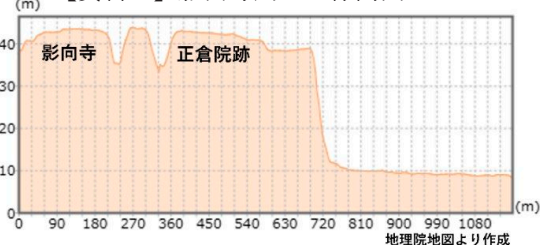
橘樹官衙跡と影向寺の現地調査を、1970年代に在籍していた歴研OBで本校教員でもあった大庭乾一先生の案内のもと実施した。調査では橘樹官衙・影向寺にいくまでに傾斜の大きい坂が多く存在し、橘樹官衙が崖上に築かれていることがわかった。低地と遺跡の位置する多摩丘陵の標高差は30mもあり、周辺一帯を臨むことができ、そこに立地する理由があると思われる。また、影向寺と橘樹官衙は道で結ばれ、距離が思ったよりも近いと感じた。そして、遺跡のすぐそばまで住宅街が迫り、住宅街のなかに史跡公園が挟まれ、大都市かわさき特有の遺跡だと感じた。実際に向かってみると駅から遠く、バスを使って行くか、長時間歩いて行くか、出向くことがなかなか難しい。遺跡がアクセス面で不便な要因のひとつであり、どのようにアピールするかという点に課題が残されている。また、遺跡の中に芝生の公園が設置されており、散歩する人や学校帰りに遊ぶ小学生の姿もみられた。歴史的景観を残しつつも、公園が地域の憩いの場となっていた。

6. 史跡整備・保存に向けた川崎市の取り組み－歴史をどのように残し、共生をはかるか－

(1) 国指定史跡に向けた川崎市・地元住民の取り組み

1997年の千年伊勢山遺跡の発掘を受けて、地元町内会を主に市議会への請願運動がおり、2008年に「たちばな古代の丘公園」が作られた。その際、地元民にとって交流・学習の場所にする、郷土や古代日本の歴史が学べる場所として整備しまちづくりの拠点とする、などの基本方針が打ち立てられている。そして「7世紀後半の地方行政組織である評の役所の成立や構造、そこから群家へと発展する過程やその後の廃絶に至るまでの経緯をたどることができる稀有な例」として2015年、川崎市初の国指定史跡に指定された。2023年度には、全国初の飛鳥時代の正倉の復元や当時の服装を再現するためのクラウドファンディングが実施され、目標額100万円を超えた178万円が集まり、今年実現に至った。

【資料3】影向寺周辺の標高図



【資料4】影向寺の調査



(2) 現代とのかかわりと課題点—過去の建築物をどう現在に活かしていくか—

他の国史跡と共通して旧状復帰が原則である文化財保護法と、耐震化などの現代基準での建築を求める建築基準法との間で板挟みになってしまうことが挙げられる。実際に正倉が一棟復元されたが、柱の部分に金属製の管のようなものが巻かれており、建造物を当時の姿のまま完全復元することは難しい。

また、現状史跡の周辺に案内板しか史跡の説明を行えるものがなく、最寄り駅である武蔵新城駅には設置されていない。また案内板自体が小さく目立たなく毎年周辺の町内会から、拡充が求められている。

(3) 川崎市教育委員会への聞き取り調査

私たちは、橘樹官衙の国指定史跡に携わり、影向寺の瓦の研究をおこなった川崎市教育委員会の栗田一生さんにお話を伺った。栗田さんからは、瓦の見方、分類の仕方、年代観をどのように考えていくのか、そして国指定史跡に指定するまでの市の取り組みについて話を聞くことができ、文献調査や現地調査では得ることができない、行政の立場からの意見をうかがうことができた。

- ・整備沿革について、必要な面積である2万 haには届かなかったが、大蔵省の国有地など、何度か買取して川崎という場所の特殊性を鑑みて、規定より少ない面積で国史跡に指定された。
- ・復元するにあたりモデルとなった遺跡は秋田県の胡桃館遺跡や三重県の久留倍官衙遺跡群である。
- ・正倉を復元する時に文化庁の復元検討委員会に申請を出したが、飛鳥時代の建物の復元は珍しいため許可が下りるまで2年かかった。さらに世界情勢により木材の入手が難しくなり着工が大幅に遅れた。
- ・復元の際、正倉裏の金属パイプは建築基準法を回避する点から設置しなければならなかった。
- ・看板について、市としても増設に向かっているけれど、規制が多く街中の設置はなかなか難しい。
- ・町内会との関係は、町内会に国史跡指定を目指すための団体が結成されるなど、これまで協力してきた。コロナ禍で関係が途絶えてしまったが、協力関係を再構築して今後も維持管理を継続していく。

7. おわりに

橘樹郡衙遺跡群周辺には、縄文時代から平安時代までの遺跡が存在しており、長らくこの地域の中心地であった。また、江戸期の影向寺は他の地域からも人が訪れてくる場所でもあった。この場所は今後どのように保存、活用されていくべきだろうか。歴史公園というからには、もちろん歴史関係設備を充実させて、他地域から歴史好きを呼び寄せることは必要だろう。しかし、栗田さんの指摘するとおり「使われてなんぼの公園」を目指すのであれば、日常的に公園を利用する地域住民にとって愛される公園を目指す必要がある。現に、この公園は積極的に町内会と関わりがあり、公園化を進めたのもクラウドファンディングの寄付も地元なしには成り立たなかった。この関係を維持・向上させ、これからも住民が公園の整備に何かしらの形で関わり、「愛される公園」だけではなく「自分たちで作っていく公園」になるべきである。しかしながら、この場所は現在多くの人が生活を営んでいるため、整備には多くの課題がある。だからこそ今、「過去との共生」という考え方が必要なのではないだろうか。「どのように残すか」、その線引きに住民が積極的に参加して「歴史とお隣さん」となることがあるべき姿だと考える。

[参考文献一覧]

- ・佐藤信『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社、2017年
- ・佐藤信『古代の地方官衙と社会』山川出版社、2021年
- ・川崎市教育委員会『国史跡橘樹官衙遺跡群橘樹郡家跡・影向寺遺跡』川崎市教育委員会、2024年
- ・村田文夫『古代の南武蔵：多摩川流域の考古学』有隣堂、1993年
- ・村田文夫『たちばなの古代史：寺院・郡衙・古墳から探る』有隣堂、2010年
- ・村田文夫『武蔵国・橘樹官衙遺跡群の古代学：国史跡・橘樹郡衙跡と影向寺遺跡』かわさき市民アカデミー、2016年

静岡県における更生保護事業のはじまり

— 金原明善と川村矯一郎に学ぶ —

静岡県立浜名高等学校

水野花南・月原実咲・鈴木彩羽・影山疾風・
伊藤千沙都・築地夢唯・匂坂日菜乃・山崎萌瑛

I. 研究の動機と目的

令和4年度、静岡県立浜名高等学校史学部は、浜松市の郷土の偉人である金原明善について興味を持ち、研究を始めた。明善は天竜川の治水や植林事業で有名だが、それに加えて、刑期を終えた人々が、社会に復帰する手助けをする更生保護事業を全国に先駆けて行なっていたことを知った。その中でも、私たちは明善が日本初の民間更生保護施設である勸善会を設立したことに関心を持った。さらに研究を進めていくと、明善と同様に、更生保護事業の功労者と言える人物である川村矯一郎の存在を知り、より深く知りたいと思った。以上に基づき私たちは、明善と川村に着目し、更生保護事業についての研究を行うことにした。

本研究は、金原明善による更生保護事業の具体的な関与を解明すること、明善と共に更生保護事業に尽力した川村矯一郎の人物像を解明し、2人の更生保護事業の独自性を明らかにすることを目的とする。

私たちは文献、古文書などの1次史料の調査、関連施設訪問、聞き取り調査を中心に研究を進めた。

本稿は、II章で金原明善による更生保護事業の沿革から、どのように受け継がれてきたのかを確認し、III章では、明善が更生保護事業にどのように関与したかを検証する。IV章において、更生保護事業の真の功労者である川村矯一郎を考察し、人物像を検証する。またV章では、同じ分野で名を上げた留岡幸助を比較対象とし、明善と川村が行った更生保護事業の独自性を考察する。最後に、I～V章での検証、考察を踏まえ、更生保護事業における明善と川村の実績や、勸善会の独自性を明らかにし、VI章結論とする。

II. 日本初の更生保護事業の沿革

A 金原明善と川村矯一郎による事業の設立

西欧文化が取り入れられた頃、世の中が複雑化し犯罪率が急増したため、金原明善と川村矯一郎は出獄人の保護善導こそ、力を注ぐべき問題であると思い、更生保護事業をはじめた。川村矯一郎の受刑経験から刑務所内の改善運動が必要だと考え、再犯防止の教育と改善を目的とした静岡勸善会を設立した。その後、川村は静岡刑務所の典獄となり、自ら受刑者らを更生させていった。しかし、自身が更生させた受刑者が、出獄後に社会に受け入れられず自殺をしてしまった事件、いわゆる「吾作事件」がおこってしまう。川村は、第2の吾作をつくらないためにも、出所後の元受刑者を一時収容し、自立支援や就職の斡旋、共同生活や教育を行うための施設である静岡県出獄人保護会社を設立。これが現在の静岡県勸善会である。



B 更生保護事業の経緯

金原明善と川村矯一郎が主体となり開始された静岡の更生保護事業の設立当初から、この事業を継承する勸善会という組織が停止された、一昨年までの経緯を下の表にまとめた。

第1表

1880（明治 13）年	静岡下魚町（現在の常磐町）の常光寺で、金原明善と川村矯一郎が会う。 囚人に対する最初の説法が行われ、静岡勸善会が組織される。
1888（明治 21）年	静岡安倍町（のち現在の長谷町へ移転）に静岡県出獄人保護会社を設立。
1891（明治 24）年	川村矯一郎が死去し、金原明善が社長に就任。
1911（明治 44）年	財団法人となり、名称を静岡県勸善会に改称。 ※静岡市長谷町で事業を行う。
1923（大正 12）年	金原明善が死去。
1964（昭和 39）年	静岡市小黒の旧陸軍弾薬庫跡地の土地を入手し、昭和 42 年（1967 年）に移転。
2022（令和 4）年	静岡県勸善会が事業を停止。

この年表からは、勸善会の事業を継続させたいという思いが強く感じられる。2022 年まで勸善会の事業を継続することが出来たのは、明善、川村を始めとした多くの人たちが支えてきたからだと思つた。より多くの人に、勸善会の関係者たちが積み重ねてきた努力を知ってもらいたいと思つた。

III. 明善の更生保護事業への関与

本章では、明善が更生保護事業にどのように関与していたのかを検証する。

そのために、①寄付金集めの方法、② 明善の更生保護事業の経営面での目標、③明善記念館未整理文書からの考察に着目し、検証を行う。

まず、①寄付金集めの方法についてである。事業への集金に際し、明善の講演会への参加、揮毫を売る、渋沢栄一などの高名な人々への訪問を行っていたことが認められた。

次に、②明善の更生保護事業の経営面での目標についてだ。更生保護事業を経営する上での目標が2つあった。1つ目は、寄付金の利子で経営費を賄うこと、2つ目は、人との関わりを保てる人材、いわゆる地方名望家の協力の確保であることだ。これらは短期的に実現できるものではなく、更生保護事業は長い見通しを持って取り組むべきだと明善は考えていたと察することができる。また、明善が寄付金にこだわった理由については、寄付金とは人から集められたものであるため、罪を犯した人々が寄付金を通して何か感じられるものがあると考えたからではないだろうか。また、寄付を募る際には多くの人を訪問す

る。その際に寄付金を募るだけでなく、宣伝活動も行うことができる。このような理由で、明善は寄付金にこだわっていたのではないかと考える。

最後に、③明善記念館未整理文書からの考察をする。私たちは、明善記念館未整理文書から、静岡県出獄人保護会社関係の文書を発見し、鹿児島大学の伴野文亮先生との共同研究の成果を活かして整理作業を行った。それらの文書から、勸善会と明善が細かいやり取りをしていたこと、更生保護事業に深く関与していたことが明らかになった。

IV. 川村矯一郎の人物像

ここでは、静岡県における更生保護事業の始まりを研究するにあたり、欠かせない人物である川村矯一郎について検証する。

旧中津藩、現在の大分県生まれの川村は、更生保護事業の功労者である。自由民権運動に積極的に参加し、西南戦争に多くの仲間が加わる中、自身も木戸孝允の暗殺計画に加担したことで、投獄された。川村は、この受刑で静岡に移送され、監獄の劣悪な環境の中で、受刑者に自由と権利を説いた。これが川村の人生をかける第一歩となった。その後は、上述のとおり静岡県出獄人保護会社、現在の勸善会を設立した。

川村は、激動の時代を生きていた。明善と同じように、幼い頃から勉学に励み、社会に目を向けて、より良い社会にするため一生を捧げた。更生保護事業は、金原明善の協力もあってできたものであるが、何より川村の強い思いで実現できたものであったと思う。

明善が自身の回顧録に更生保護事業を記載しなかった理由だが、「川村があつてこそその更生保護事業と思っていたから」と考えていたことが推測できる。まさに川村は、更生保護事業の真の功労者といえる。

V. 留岡幸助との比較

本章では、二人の事業の比較対象とした留岡幸助について概説し、勸善会の独自性を考察する。

留岡は岡山県に生まれ、当時の同志社英学校を卒業。17歳の時にキリスト教徒になり、アメリカ・マサチューセッツ州へ留学。そこで監獄学・感化院事業を学び、実践も行った。帰国後は教誨師をしつつ、感化院設立のため奔走。東京・巣鴨に児童養護施設家庭学校を創立した。日本の社会福祉の先駆者であり、明善との書簡も見つかっている。

第2表

留岡幸助	明善・川村矯一郎
感化院 児童養護施設学校	勸善会 (出獄人保護会社⇒静岡県勸善会)
アメリカの制度を手本	スコットランドの制度を手本
留岡 ⇒キリスト教、 報徳思想(?)	明善 ⇒儒学、仏教(?) 川村 ⇒国学、自由民権思想
民営⇒少年保護団体(少年法施行) ⇒社会福祉法人	社団法人 ⇒財団法人 ⇒更生保護法人



第2表から、留岡はキリスト教を基盤とした先進的な思想をもち、明善たちは国学や儒教を基盤とした伝統的な思想を持っていたと考えられる。また、留岡は未来ある少年の更生に取り組んでいたが、川村は大人の更生に取り組んでいた。この違いは、川村の受刑経験が大きく関係していると感じた。川村は大人を更生させる必要性を感じ、かつての自分と同じ立場にいる人々を助けたいとの思いで動いていたのではと推測できる。

VI. 結論

第I章から第V章を踏まえて明らかになったことをまとめる。

明善は寄付金を集めるため、自分の足で全国行脚をし、出獄人に対して別け隔てなく接していた。現代の人間は、嫌なことを他人に押し付け、前科のある人々に対して差別がひどいため、明善のように自分でやれることはやり、一つの情報だけで人を判断しないことが大切であるということ学んだ。また、常に出獄人のことを考えていた川村から、利己的行動のみ取るのではなく、利他的行動をできるように考えることが大切であると感じた。

明善記念館未整理文書を通し、当時のことを詳しく知ることができた。文書には勸善会のことや明善個人に向けての書簡も多かった。このことから豊富な人脈があったことが分かった。また、出獄人の情報が細かくまとめられた資料を見ることで、明善の熱心な様子を想像することができた。

そして、勸善会の独自性を2つ明らかにすることができた。1つ目は、経営者である川村が受刑を経験していることだ。2つ目は、出獄人に対して差別することなく寄り添い、政府に頼ることなく運営されてきたことである。

川村の更生保護事業に対する思いに明善が賛同し、事業を拡大した。昨年まで続いた勸善会は近藤さんを始めとして多くの人々によって受け継がれてきた。

私たちはこれから、前科を持つ人々が社会に復帰したときの差別がなくなるよう、改めて更生保護事業の大切さを発信していきたい。

—主な参考資料—

明善記念館未整理文書

金原明善『経歴及希望』

金原治山治水財団『金原明善資料』上巻・下巻

国立国会図書館所蔵 川村矯一郎「卑見書」（明治16年）

太神秀一郎『マンガ 更生保護の創設者 川村矯一郎』

安形静男「川村矯一郎」（法務省保護局編集『更生保護史の人びと』平成11年）

新谷九郎「金原明善」（法務省保護局編集『更生保護史の人びと』平成11年）

静岡県勸善会百年史編纂委員会編『静岡県勸善会百年史』

伊藤晴信・畑陽日希・森下陽斗「金原明善から学ぶ」（浜名高校史学部『伎倍』第23号）

家庭学校の歴史 <https://katei-gakko.jp>

わたしあうまち 高梁市 <https://www.city.takahashi.lg.jp>

家庭学校へようこそ <https://www.kataigakko.org>

—お話を伺った方々（五十音順）—

足立洋一郎様、大場康弘様、金原利幸様、近藤浩之様、松本一男様

三戸高校クリエイティ部とは

青森県立三戸高等学校

岩 間 愁 翔 千 葉 優 思
上 田 和 奈 大 平 珠 来
小 川 真 由 千 浦 瑠 杏

1 はじめに 三戸高校の現状とクリエイティ部

私たちの通う青森県立三戸高等学校は、青森県の南東部に位置する三戸町にある。三戸町のある三八地方では人口減少が著しく、特に少子化の影響で近年は隣町の田子町にあった田子高等学校が生徒数減少により閉校した。私たちの三戸高校も、この10年間で1学年3学級から1学級まで減少し、学校存続の危機にある。

生徒数減少という課題を打開するため、三戸高校は一昨年から生徒の全国募集を開始した。三戸町が生徒の下宿先を整備したり、入学した生徒が充実した高校生活を送れるように魅力化を図ったりすることを通して、生徒数の確保に尽力した。2023年、全国募集の一期生が入学すると同時に、三戸町による高校魅力化の1つとして生まれたのが「クリエイティ部」だ。

2 クリエイティ部創設

新設されたクリエイティ部は、高校で毎年行われる部活動紹介で「～クリエイティブを学んで、クリエイティブで地元を変える～」をテーマに県内外で活躍するクリエイターの指導のもとワークショップ形式でコピーライティング、写真撮影、デザイン、イラスト、動画撮影、情報発信などを学習する部活動」「実習をとおして、情報発信の基本を学び、社会に出たときに必要なスキルを学ぶ」と紹介され、初年度は私たち含む7名が入部した。

2023年6月、大阪で活躍されている日下慶太さんを講師とする最初の活動がスタートした。講師のクリエイターから、地域課題解決の方法として紹介されたのが、ポスターの作成だ。三戸町、および三戸高校にあるものをどのように発信すれば注目してもらえるのか、そして魅力的に見えるのか、ということ踏まえてキャッチコピーをつくり、分かりやすくシンプルな写真で伝えることが大事だということ学んだ。「駅のポスターは0.2秒で判断される」「広告は永遠の邪魔者」それでも通りがかった人の目に留まるためにどんな工夫をするか。私たちがこれから取り組む活動の基本を学び、クリエイティ部は始動した。

3 クリエイティ部始動

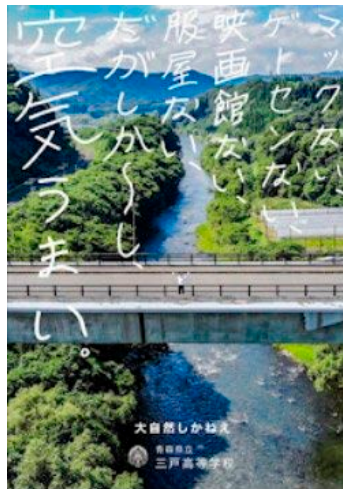
2023年7月24日、夏休みに入り、クリエイターの指導のもとクリエイティ部最初の地域課題ミッションである、「三戸高校を宣伝するポスター」の制作に取りかかった。三戸高校存続のため、入学希望者を増やすことが目的だ。完成したポスターは、近隣の中学校

や全国募集での高校PRに使われることになる。先日学んだポスターづくりの基本を念頭に、最初はキャッチコピーのもとになる「何を伝えたいか」を言葉にすることから始めた。

何を伝えたいかを書き出したあと、キャッチコピーを考えた。いかに短く相手に伝えるか、そして相手に伝わるのかを考えていくつも案を出しては、クリエイターと議論して「これだと伝わらない」「もっと良い言い方はないか」と試行錯誤を重ねていった。

伝えたいことの方向性がある程度固まり、キャッチコピーを練る活動と並行して考えなければならないことがある。それが「どんな写真を使うか」だ。私たちは初めて一眼レフカメラを使った写真撮影に臨んだ。カメラの基本をクリエイターからレクチャーされ、いざ撮影に臨むと、考えなければならないことが山ほどあることを体感した。撮影場所をどこにするか、場面設定はどうするかはもちろんだが、高い位置から撮るか被写体の目線に合わせるのか、どの角度から撮影するか、さらには私たちが自ら考えるキャッチコピーの文字をどこに入れるかも踏まえて撮影する必要がある。私たちは何度も何度もテイクを重ねて、ようやく候補となる写真を撮り終えた。

キャッチコピーの考案、写真撮影を終えたら、文字のフォントや大きさ、ポスター全体の構図を調整した。この作業も非常に重要である。「ポスターは0.2秒で判断される」その0.2秒で目に留まるものに仕上げる最終段階を終え、私たちのポスターはついに完成した。



ポスター制作の過程で、私たちは自分の郷土を多角的に見ていたことを、後から振り返って気付いた。三戸町は「南部藩発祥の地」で歴史が深く、現在も町のシンボルとして城山がある。左のポスターはそこから着想したものである。そして逆転の発想から生まれたのが真ん中のポスターだ。全国募集では、人口の多い都市部から地方の高校に入学する事例が多い。だからこそ、多くものがない中で三戸町にあるものを考えることとなった。そして右のポスターは、高校周辺は坂が多いことから着想した。坂を上ることと自分が目指す先を重ね合わせるキャッチコピーは、クリエイターと議論する中で生まれた。私たちが「短所」と思っているものも、考え方や伝え方を工夫することで魅力として発信すること



ができることを学んだ。このポスター制作を通して、私たちは三戸町、および三戸高校をもっと多くの人に知って欲しいという思いがより強くなった。

このポスターがPRに使われた反響がどうであったかは、三戸町の地域おこし協力隊で三戸高校魅力化コーディネーターである村田さんから聞くこととなった。三戸高校のブースの前を通る人たちがこのポスターを見て足を止め、ポスターについて聞いてくる。生徒が制作したことを伝えると「本当に高校生が作ったの？すごい！」という感想が得られた。「私も高校生の時にこうやって作ってみたいかった」という保護者の感想もあったそうだ。そして、三戸高校の紹介・説明を聞いていってくれる。今年度、このポスターのおかげというだけではないが、青森県外から入学生は前年度より増えることとなった。

4 町内のカフェ リノベーション事業

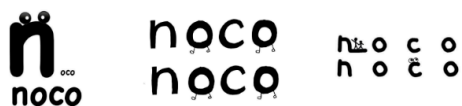
2023年12月より、次の活動が始まった。三戸町のカフェ「いなかふえ ほっといれぶん」のマスターである西澤剛介さんからの依頼だ。

「いなかふえ ほっといれぶん」は、もともと美容院だった建物を西澤さんがリノベーションし、令和4年に開業したカフェである。しかし、リノベーションを終えたのは1階部分のみで、2階部分はまだ未着手であった。そこで、クリエイティビティ部への依頼は「この2階部分にコミュニティスペースをつくる予定だ」「みんなが集まって楽しめる空間づくりを一緒に考えて欲しい」ということであった。

さっそく現地を視察し、場所や広さを確認するとともに、マスターの西澤さんの考えや思いを聞いた。私たちはこの場所をどんな風に使えるか考え、最初に取り組んだのは、コミュニティスペースの名前を考えることだった。これから一緒に場所作りをする中で、みんなが親しみやすい名前を先につけようということであった。

しかし、この名前を考えるにあたって、考慮しなければならないことはたくさんあった。親しみやすい名前はもちろんだが、それはどの年代、どんな人にとっても呼びやすい簡単なものであること、そして「ロゴ」をデザインすることも考えなければならなかった。

考案した名前のうち、最終候補をマスターの西澤さんにプレゼンし、選んでもらったのが「noconoco」である。音の響き、みんなが「のこのこ」集まれるようにという思い、そして青森県南部地方の方言「○○っこ」という由来から名付けられた。

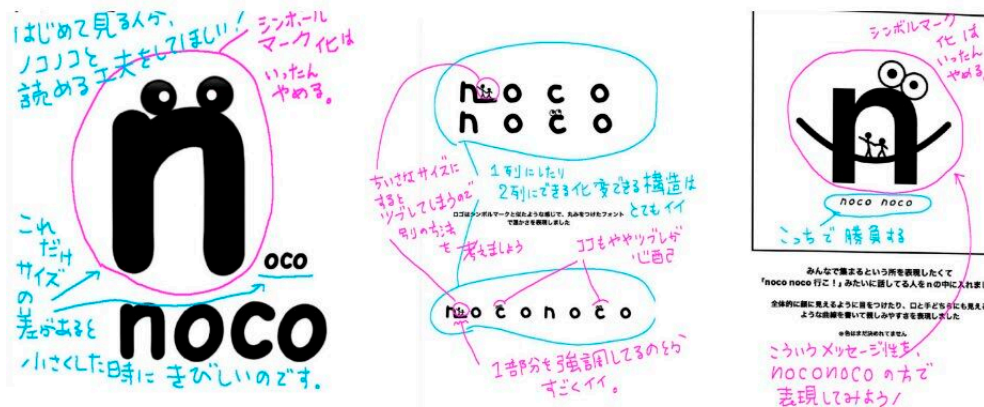


店名のロゴマーク原案



いなかふえ 2階部分の視察

カフェの2階部分の解体を手伝うのと平行し、三戸町の憩いの場を表す「noconoco」のロゴづくりに着手した。当初はひらがなの案もあったが、アルファベット小文字で表現することに決めた。人々の目に留まるもの、一目で名前が連想できること、親しみやすいものであること、これらを満たす案を考え、クリエイターに提出しフィードバックをもらった。



クリエイターによるフィードバック

クリエイターからのフィードバックをうけてデザインを繰り返したいくつかの案を、マスターの西澤さんにプレゼンしたのち、そのうちの一つを選んでもらってついに完成したのが右のロゴである。

今後は、2階部分の内装のデザイン、活用方法やイベント企画のモデル案を考えていく予定である。



5 2年目の現在

クリエイティ部創部2年目となった今年度は、昨年制作したポスターをベースとするCM制作を行う予定である。

また、昨年の活動は地域の新聞やテレビ局などのメディアに取り上げられ、クリエイティ部の知名度が上がり、地域企業や団体から学校への依頼が集まっている。これらの依頼は、地域の活性化を試みる地元住民からのものである。地域課題の解決を目指す私たちの活動に、地域からの期待が高まってきているようだ。

その話を聞いて、自分たちの住んでいるこの三戸町に、町に愛着を持ち活性化を図っている人がこんなにもいるのだということを知った。そして、私たちの活動をきっかけとして、その動きが活性化しているようだ。私たちクリエイティ部の活動は、地域の活力源になりうるのではないか。その仮説を実証するため、今年度入部した後輩たちと共に、実践活動を行っていく。

未来のために私たちができること

山陽学園高等学校
瀧 翔太

私たち山陽学園高等学校 J R C 部は、身近で新しい地域貢献として特殊詐欺撲滅活動を始めている。増え続ける詐欺被害を社会的課題と捉え、警察と協働して自分事として考え探究活動として取り組んでいる。年々増加する詐欺被害に対し、今までとは違う視点と作戦を私たち自ら考え、挑戦している。

この活動の斬新な点は、以下のとおりである。

- ①警察、企業、中高生が協働しての今までにないボランティアである点。
- ②自分たちで考え、企画したことを警察の方に提案して実行している点。
- ③今までの啓発ポスターは警察が「気を付けろ」など強い言い方だったが、市民に寄り添う形で共に頑張ろうというイメージを高校生がデザインした点。
- ④県民を巻き込んだ大きな流れにしようとしている点。

従来の防犯ボランティアは、その大半が警察の啓発活動に参加して共にチラシなどをくばるといったものが主だった。しかし、特殊詐欺の撲滅を警察や行政の仕事と捉えるのではなく、市民一人ひとりが「自分事」として認識していけば、被害者が減るのではないかと考えたのがきっかけである。高齢者は被害者、中年や若者は詐欺の実行役や受け子もいる、さらに「ロマンス詐欺・投資詐欺」などといった、SNS を利用した特殊詐欺に準じる詐欺も横行している。子どもにとっては、祖父母は被害者というようにすべての世代に関わる大問題になっている。しかも被害額は岡山県だけでも年間数億円と信じられない額だ。

私たち J R C 部は、この問題に対して、詐欺の横行で信頼が失われ、人が信じられなくなっていく世の中をあえて、「愛と絆・信頼」で救おうと考えた。なぜなら、被害者のほとんどは、純粋で人を信じやすいつまり「いい人」だと警察の方に聞いたからである。

下記のデータを見ると、被害者の多くは、高齢者の女性であることが分かる。

「R 5 岡山県警調べ」



私たちは、上記のデータからまず、警察は市民の方々に協力と相談ができ寄り添うことができるというイメージを大切にしたいポスターをデザインした。

様々な関連グッズの考案

人が集まる場所での活動を広げるために様々な関連グッズを考案しました。具体的には、夏に配布しやすい「うちわ」、来館者数と個人貸出冊数が全国の都道府県立図書館で日本一を誇る岡山県立図書館を始め、各図書館や本屋で配布できる「しおり」なども製作して配布しました。

資料 5



資料 6



企業にも協力を求める、チーム岡山を目指す取り組み

地元岡山市内を走る路面電車の運営会社の岡山電気軌道さんにも協力を依頼して快諾してもらった。外に横断幕をあしらい、中には、JRC部員がデザインした電車のポスターが所狭しと貼られた。こちらも好評で2年連続行うことができた。毎年10月に一定期間走るような風物詩にしていく計画である。

資料 8



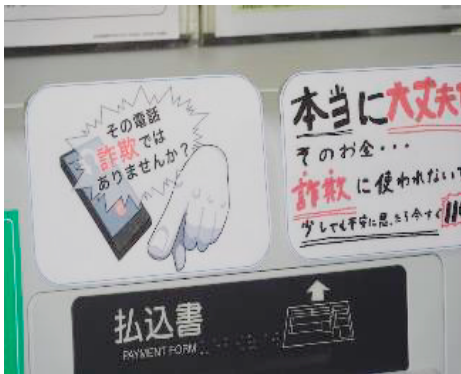
資料 9



厳しい規制を超えての挑戦！ポップ作戦

ポスターやリーフレットの掲示に加え、新たな試みとして、手作りポップをATMに貼ったり、ATMに並ぶ導線に手作り啓発シートを貼った。とにかく金融関係は規制が厳しく、ポップを貼るどころか、ATM自体の記録写真を撮ることも許されなかった。警察の方にご協力いただき、地道に交渉して、岡山中央警察署の管轄内の銀行には許可をいただくことができた。不思議なもので、前例ができると次々に許可が下りた。詐欺被害の多い現場での啓発活動が難しいのも詐欺被害を増やす一因かもしれないと感じた。

資料 10



資料 11



幼児、若年層も取り込む画期的な活動「だがし防犯」

今年度、大きな取り組みとして企画したのが、「だがし防犯」である。これは私たちが、注意喚起を呼びかけるより、実際の孫から詐欺の話をしてもらうことで、コミュニケーションがとれ、詐欺の話も家族で盛り上がり、効果が上がるのではと考えた作戦だ。もちろん、子どもに難しい話はできないので、中高生の説明を聞いて、「詐欺に気を付けてね。流行っているよ、だまされないでね」と簡単な声掛けをしてくれる約束をしてくれる人を対象に駄菓子の詰め合わせを渡した。前述した、人が信じられなくなっていく世の中をあえて、「愛と絆・信頼」で救おうと考えた企画の実践である。この企画には地元駄菓子販売の株式会社「大町」さんに快く協力いただき実現することができた。

資料 11



結果の考察と今後の展望

犯罪被害という特殊性と規模が大きすぎ、私たち中高生がエビデンスをとることは、できないが、この活動を通じて少しずつだが確実に市民の皆さんに今までとは違う認識を持ってもらえたように感じた。また、協力者がどんどん増えることにより、続けることが最大の特殊詐欺撲滅活動に繋がると実感できた。特に規制が厳しく、今まで難しかった金融機関や郵便局などでの直接の活動ができたことは最大の効果であり、中高生の活動としては全国初でないかと自負している。今後も様々なことを考え、企画して、多くの仲間を増やすことによって社会問題の解決に努めていきたい。

大会マスコットキャラクター

ミナモ

